慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	擬古物語系統の室町時代物語(続) : 「伏屋」「岩屋」「一本菊」外
Sub Title	
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1966
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.5 (1966.) ,p.1- 183
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000005-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

擬古物語系統の室町時代物語（続）

――「伏屋」「岩屋」「一本菊」外――

松本隆信

はじめに

筆者は前稿（斯道文庫論集第四輯）において、鎌倉期擬古物語の系統を引く室町時代物語の中、筋立のきわめてよく類似する「しぐれ」「若草」「桜の中将」「志賀物語」の四篇、及びそれらと関連をもつ「くるま僧」「千手女」等の諸作品を対象として、異本の調査と、作品間の関係についての考察を加えてみた。本稿では、その前稿に続いて、同じく鎌倉期の物語の改作として成立したとされている「伏屋」（美人くらべ）「岩屋」「一本菊」の三篇と、これと同類型に属する「秋月物語」「朝顔の露」の二篇、及び平安朝の「落窪物語」の影響を受ける「落窪」をとり上げることとする。

右の六篇は、室町時代物語の分類において、常に一項目として立てられる継子物に含められるが、物語の内容には、前稿でとり上げた「しぐれ」以下の諸篇と近似した所が多く、継子物型恋愛譚と言うべきものである。継子物にはこ

の外、「鉢かづき」「花世の姫」「姥皮」「月日の本地」「伊豆箱根の本地」等の諸作品が存するが、これらは民間説話を骨子として作られたものと考えられ、「伏屋」等の一類の作品とは、相互に交渉の深いことは認められるとしても、それとは一応別の類型に括って扱うことができると思われる。ただし、本稿でとり上げた「落窪」は、後に詳述するように、平安朝の「落窪物語」との関係はきわめて表面的なものに過ぎず、内容的には「鉢かづき」以下の諸篇の類型に入れる方が適当かとも考えられるが、それらを扱う予定の次稿への橋渡しの意味で、本稿に含めることにした。

はじめに、風葉集所載の散佚物語を改作した「伏屋」「岩屋」「一本菊」並びに「伏屋」と同系列にある「秋月」「朝顔の露」の五篇の諸本を分類、解説した後、それらの作品の特徴、相互の関係等について考察し、最後に「落窪」の諸本解題及びこの作品の位置についての私見をつけ加えることとしたい。

伝本解題に当っての記述方法や、本文引用に際しての翻刻方法は、前稿におけると同様である。

一、「伏屋」「岩屋」「一本菊」「秋月」「朝顔の露」の伝本解題

伏　屋　附美人くらべ

本作には明応八年の写本が伝存し、この類の物語の中では、年代の明確な最も古い伝本を有する。また、万治二年刊の「美人くらべ」は、登場人物の人名が異なる外、発端の部分の筋立に相違が見られるが、「伏屋」ときわめて近い作品である。「伏屋」と「美人くらべ」との関係については、島津久基博士は「美人くらべ」は「伏屋」の改作であろうとされ、（近古小説新纂）市古貞次博士は、散佚物語「ふせや」から両者が作られたと認める方が妥当なよう

であると述べられている。（中世小説の研究九二頁）また、清水泰氏の如く「美人くらべ」を「伏屋」の一異本とする考え方もあって、（日本文学論考一三三頁）一定していない。筆者は「伏屋」の諸本を調査した結果、その中の一系統に属させて扱うのが最も妥当であろうと判断したので、「美人くらべ」を「伏屋」の一異本として一括することとした。本作の伝本の本文は、諸本の間での相違がきわめて著しいが、「美人くらべ」をも含めて類別を試みると次の如くになる。

A類

尊経閣文庫蔵明応八年写本　一冊

鳥の子紙打曇表紙（二四・八×一六・二糎）。綴葉装両面書。外題なし。内題尾題「ふせやのものかたり」。奥書「明応八年己未八月五日」。本文字面高さ約二二・五糎。六四丁半、毎半葉七行、各行二〇字内外。朱で句点、振仮名を附す。巻頭に近い、少将がにほひ君に通い初める条に大きな脱文がある。「室町時代物語集第三」に翻刻。

島津久基氏旧蔵写本　一冊

同氏の「近古小説新纂」に翻刻。本文は前掲の尊経閣本と全く同じ。脱文の箇所も同様である。

B類

第一種

慶應義塾図書館蔵〔室町末江戸初間〕写本　一冊

改装鳥の子紙灰色表紙（二七・七×二一・九糎）。外題内題共になし。本文字面高さ約二三・五糎。六一丁、毎半

葉一一行、各行二三字内外。巻頭に「岡田真」の朱蔵印。

第二種

多和文庫蔵写本　一冊

本書は横山重氏が「神道物語集」に翻刻された。未だ披見の機を得ないが、同氏の解題によれば、本文共紙表紙（二四×一七・五糎）。外題「ふせや草紙」。七三丁半、九行、各行約一五―二〇字。「阿波国文庫」「不忍文庫」「香木舎文庫」の朱印。書写の年代は記されていない。

第三種

万治二年石津八郎右衛門刊絵入本二巻（京都大学附属図書館・赤木文庫・天理図書館下欠・日比谷図書館有欠等蔵）

日比谷図書館蔵本の元題簽には「絵入びじんくらべ　上（下）」とある。内題「びじんくらへ上（下）」。板心「ひしんくらへ上（下）（丁付）」。刊記「万治弐年九月吉日　石津八郎右衛門開板」。（上）一五丁（下）一五丁半。一二行、各行二一―二五字。挿絵、上下各六頁。本書は「室町時代物語集第三」の外、有朋堂文庫・校注日本文学大系一九・新釈日本文学叢書御伽草子集・雄山閣文庫等に翻刻がある。

松会刊絵入本二巻（赤木文庫旧蔵）

本書は未見。「室町時代物語集第三」の解題によれば、内題「びじんくらべ　上（下）」。尾題、上巻末にのみ「びじんそろへ上終」。刊記「松会開板」。板心「ひしん上（下）」。（上）一一丁半（下）一〇丁半。一四行、二四―三二字。挿絵、（上）六頁（下）五頁。本文は万治板によって複刻している。

C類

清水泰氏蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　二冊

鳥の子紙金泥草花模様金砂子散し表紙（一七・三×二四・五糎）。見返し布目金紙、料紙鳥の子。題簽「ふせや下」（上は剝落）。本文字面高さ約一四糎。（上）二六丁（下）二五丁、毎半葉一三行、各行一四字内外。挿絵（上）八頁（下）八頁。

右の類別は、物語中の和歌に視点をおいて試みたものである。これらの諸本の和歌は、数においてもそれぞれ著しい違いがあり、また同一の場面において詠まれた歌にも、詞句の出入異同が甚しい。まず数について言えば、尊経閣本は三五首（内長歌一首）――但し尊経閣本は前述のように大きな脱文があるが、その個所に、慶応本・多和本・清水本共に六首（内長歌二首）の和歌が存する。この前後の部分においては、尊経閣本とこの三本との和歌にはほとんど増減が無いので、尊経閣本にも、ここに六首が存在した可能性が大きい。そこで尊経閣本の祖本においては、四一首（内長歌三首）であったかと想像される――、慶応本は一〇六首（内長歌四首、また内一首は上句のみ）、多和本は七三首（内長歌四首）、万治板「美人くらべ」は五五首（内長歌二首）、清水本は三一首（内長歌二首）である。慶応本と、それについで多和本に特に和歌が多いが、その大部分は、男主人公の少将が、継母に遂われて行方の知れなくなった姫君を尋ねて信濃の伏屋へ下る、道行の場面における詠歌である。

次に、この五本の間で、詞句の共通した和歌がどのように現れているかを調べてみると、次のような結果が出た。（尊＝尊経閣本・慶＝慶応本・多＝多和本・美＝美人くらべ・清＝清水本）

（1）　尊・慶・多・美・清　に共通する和歌　一首

(2) 尊・慶・多・美　に共通する和歌　四首
(3) 尊・慶・多・清　〃　二首
(4) 尊・慶・美・清　〃　一首
(5) 尊・慶・多　〃　二首
(6) 尊・慶・美　〃　二首
(7) 慶・多・美　〃　二二首
(8) 慶・多・清　〃　三首
(9) 慶・多　〃　一七首
(10) 慶・美　〃　三首
(11) 慶・清　〃　三首
(12) 多・美　〃　一五首

(7)(9)(12)の場合がぬきん出て多いことが知られるが、これは、慶応本・多和本・「美人くらべ」の三本が一類をなすことを明らかに示すと共に、またその中で、慶応本と多和本、多和本と「美人くらべ」が、それぞれ直接に交渉をもつことを語っている如くである。そこでまず、B類としてまとめたこの三本の関係を検討してみる。

B類諸本の関係

慶応本と多和本とは、本文の大筋もほぼ一致している。一例を挙げれば、

（継母が武士に、にほひ姫を失うべしと命ずる条）

慶応本

そのゝちは、しのひ〳〵にかよひたまふを、まゝはゝまことにやすからすおほしめして、もゝふをよひたまひて、からあや五とらせて、きたのかたのたまふやう、身つからか申さんことかなへたまはんやとありけれは、ものゝふ申やう、いかてかおほせをそむきまいらせ候へき、なにことにて候とも、うけたまはり候はんと申せは、よろこひたまひて、にほひひめきみの、わか子のおつとにならむとするものを、おんなよはひをしてとりたるかむねんなり、いかにしてもうしなひたゝあるとのたまへは、このおほせこそ、さすかかなふましき御ことにて候へ、かつうは御一けのしうにておはします、さりなからおとこにてもおはしまさは、さも候へきに、いつくしきひめきみをいかにしてうしなひまいらせ候へきと申せは、きたのかた、めのとゆけいの、よにほいなきことをのたまふものかな、人のたいしをかなふるはさのみこそあれとのたまひて、身つからしやくとりて、さけをしゐて、おんそ一かさねぬきてとらせたまへは、いまもむかしもよくにふけるて申、さのみおほせをとかく申事のおそれにて候、さてもなにとしてうしなひまいらせんといひけれは、いとやすきことなり、せうしやうとのゝ、てんしやうへまいりたまはんゆふくれに、はなそのにいてたらんをかいつかみ、うみのへんたひ〳〵しのひ〳〵にかよはせ給ふほとに、まゝはゝこの事をきゝて、やすからすそおもひける、ゆけいのつほねにいひあはせて、ものゝふありけるをめして、からあや三つひきての給ふやう、わらはか申さん事きゝ給へとありけれは、ものゝふ申やう、いかてかおほせをそむきまいらせ候はんと申せは、いとやすきことはり、このにほひひめきみ、わらはかあひしのひめきみのおとこにならんする、せうしやうをとりたるかやすからす、うしなひてたひ給へとありけれは、このおほせをそむきまいらせ候はんと申せは、このおほこそ、ゆめ〳〵しきたいしにて候へ、かつうはせうしにておはします、さもやさしきひめきみ、いかゝしてうしなひまいらせ候へきと申けれは、まゝはゝいろうちへんしてよしなき事をの給ふ物かな、人のたいしをかなふ事はさのみこそあれとの給ひて、みつからしやくをして、さけをすゝめ、うへの御こそてを一かさねたひつゝ、むかしもいまもとくにふけ、又は人のかたらふ事につき、人にたのまるゝはさのみこそあれと、さま〳〵にかたらひ、おほせられけれは、きみのおほせをそむきまいらせん事もおそれなり、さてもいかゝしてうしなひまいらせんと申けれは、いとやすき事にてはんへるなり、ちうしやうとのゝてんしやうへまいり給はんするとき、ゆふくれ

か、やまのなかにしてかうしなひ候へしとのたまへは、うけたまはり候とやそく申て、かへりぬ　にはなそのへたち出たらんをかいつかみて、はまのほとり、山のおくにてうしなひ給へとの給へは、うけたまはりぬとてかへりぬ

の如くで、細部の語句には出入が多いが、筆の運び方はほぼ同じと言ってよい。全篇を通じて、これと同じような本文の関係が見られるが、後半になると、所々多和本の方に叙述の簡略な所が見える。特に著しい詳略の差のあるのは、少将の東下りの部分である。道すがら、少将は住吉明神の化身である翁と歌を詠み交しつつ下るのであるが、その歌を詠んだ場所を比較すると次のようになる。

桂川、逢坂、山科、大津、千本松原、美濃国関山、尾張国熱田、豊川、遠江国橋本、くしらおか（八幡社）、佐夜中山（多和本地名のみありて歌なし）、駿河国宇津の山（多和本駿河国しつはた山）、いつのこうの宿（多和本まへしまの宿）、清見ケ関、ふなこしの入江、ふしのこしにあほやき、信濃川原、人ある、もとす、しほへ、しまのてるさは、ふちゐのくか、しらすせ

傍線を附したのは両本に共通している場所で、他は慶応本にのみ見えるものである。多和本の方がかなり簡略なのであるが、ところが慶応本にのみ記されている地名の中には、何処をいうのか明確になし得ないものがあり、あるいは実在の地名であるかどうかも危ぶまれるものがある。そこで、あるいはこの道行の部分には、慶応本に恣意的な増補があるのではないかとも考えられる。書写の最も古い尊経閣本を見ると、少将の道行の間の歌は、逢坂山・大井浜・橋本・甲斐の四個所しか記されていないことに照しても、この場面は次第に増補されていったと見ることが出来るように思われる。

それと今一つ、多和本の方が古い形を存するのではないかと考えさせる個所がある。それは、にほひ姫が継母に語らわれた武士に琵琶湖に投げ入れられたが、生母の化身たる亀に助けられ、瀬田の橋で途方に暮れていた時、雁の鳴きわたるのを聞いて詠んだ歌である。慶応本は

ふるさとの、みやこへゆかは、かりかねの、わかありさまを、ものかたりせよ

の一首であるが、多和本は

かりかねよ、しはしとまりて、たひのそら、こしちのかたの、物かたりせよ

わかすみし、みやこへゆかは、かりかねも、このありさまを、ものかたりせよ

の二首を記している。多和本の後の方の一首が慶応本と共通している。ところが慶応本に無い前の一首は、風葉和歌集の巻八羇旅の部に載せられている

こゝろにもあらずふるさとをはなれてさすらへけるに初雁のなくをききて　ふせやの関白北方

雁かねよ、しはしとまりて、旅の空、こひなくかたの、物かたりせよ

とほとんど一致しているのである。すなわち、多和本は、現存「ふせや」の基となったと考えられる古本「ふせや」との関係において位置づける時、慶応本よりも嫡系であるということが出来そうなのである。

しかし、この点については、そう単純に考えることに疑問も生ずる。第一に、後述するように、B類の慶応本や多和本よりも古いと考えられるA類の尊経閣本にも

はつ雁よ、都へゆかは、たらちをに、我ありさまの、ものかたりせよ

と、慶応本の歌及び多和本の後の歌との類歌一首のみしか記されていない。そこで、もしかすると、多和本が風葉和歌集によって、「かりかねよしはしとまりて」の一首を補ったのかもしれないということを考慮する必要があろう。第二に、前記の風葉和歌集の詞書によると、この歌の詠まれたのは、現存「ふせや」の筋立で言えば、にほひ姫が都を遠く離れた伏屋で生活している時であるように思われ、歌の詞句もその場面にふさわしい。多和本のように瀬田の橋で詠んだとすると、歌の内容にそぐわない所が感じられる。これも多和本が風葉和歌集による考証的増補を行なった可能性を考えさせるのである。

以上によって、慶応本と多和本との間にはかなり密接な交渉のあることは認められるが、その先後関係は俄かに決定し難い。

次に刊本の「美人くらべ」は、前述のように和歌の上から見れば、多和本と最も近い関係にあることが否めない。ただ少数ながら、慶応本と一致し、多和本とは一致しない例も見られるので、多和本そのものを「美人くらべ」の祖本とはなし難いが、多和本系統の本が拠り所となったことは間違いないであろう。しかし、多和本と「美人くらべ」の本文は大分離れているし、内容にも異なる所が多々ある。つまり「美人くらべ」は多和本系の本に拠りながら、全く新に書き変えた改作本と言うのが適当のようである。筋立や叙述の上で主な違いを挙げると次の如くである。

（1）発端において、女主人公の姫君の両親についての記述、姫の出生、生母との死別、継母を迎えることなど、生い立ちについての記事が無く、男主人公の丹後少将が、五条宰相に美人の聞え高い姉妹のあることを聞き、それぞれの乳母の許へ一目見たき由を申し入れることから書き始め、直ちに清水にての美人くらべに入る。この書き方は、物語の題名を「美人くらべ」と改めた意図を示しているように思われる。

（2）少将が美人くらべの結果、継子ののもせ姫を迎えんと定めて、母にその事を話した所、「五でうのさいしやう殿のむすめは。事のしさいのあれはかなふまじきよし」を言われ、思いに沈むという記事がある。これは多和本をはじめ他本には見えない。

（3）少将がのもせ姫の許へ文を遣わした時に、

つかいかさねて参り。のもせひめの。めのとゆけいのつぼねに。かの玉づさを参らせけれは。ゆけいのつぼねは。のもせひめに此よしかくと申て。玉づさをまいらせければ。のもせひめ。めのとにおほせけるは。さてこれはなにとかあらんとの給へは。めのと申やう此程のびじんくらべに。かたせ給ふ事のめでたさよ。御きやうだいとは申ながら。けいぼの御事なれは。つねくにくませ給へは。わらはごときのものまで。はらのたつ事のみにておはせしに。少将殿へのえんのみち。思ひのまゝなる御事也。はやくく御返事あれとぞ申ける。

とあるが、多和本では傍線の部分に当る所は、

むかしより、かみほとけもうたをよみ、なさけをかけ、なうしうをたれ給ふなり、なさけのみちしらぬとは、うき事にこそ申つたへ候へ、はやくく御かへり事候へと申けれは

という風に、情の道を知る女のたしなみとして返歌すべきことを勧めている。（慶応本も多和本と同趣旨の言葉あり。尊経閣本はこの部分欠。）「美人くらべ」は、乳母の継母に対する反感、本子に対する競争意識を表面に打出しているのが特徴的である。

（4）継母が武士に命じて姫を掠奪させる前に、父の夢に、姫が風に巻かれて遙の空にとられてゆくと見る記事が無い。

（5）武士が瀬田の橋で姫を殺そうとする条を、

さてものゝふはひめ君をぐして。あふみの国せたへまいり。すでにはしの上より。水のそこにおとしたてまつらんとせし時。のもせひめおほせられけるは。いかにものゝふ共。しやうあらはものをきけ。まゝはゝごにたのまれ。いまみづからをうしなはん事。たうざのゑこなり。よこしまなるにいはされて。とがなきみづからがいのちをとらば。などか天ばつのがるへき。又たすくる事なんぢらがために。みづからはしうなれば。ぎをおもんずるにたるへし。しからば天たうのみやうりにかなふへきぞ。みつからいのちおしくてかくいふにはあらず。なんぢらあまりふとくしんなるもの共なれば。にんげんの五じやうをいひきかする也。此上はなんぢらが心にまかせよとて。たもとをかほにをしあて。さめ〳〵とぞなき給ふ。たけきものゝふも此ことはりを承り。なみだをながして申やう。げに〳〵あやまり申たり。此うへは御いのちたすけ参らせん。いづかたへもみえぬくにへ御しのび候へ。都へかへりまゝはゝごへは。せたのはしへしづめ申たるよしを申へしとぞいひける。

と叙べる。他本は、死を前にしての姫が諸仏に後世を祈り、髪を切って神仏や父母、少将に手向けることを叙べ、右のような武士を教訓する言葉は無い。また他本は、武士が姫を湖へ突き落したところ、亀が現れて姫を助けることを記している。

（6）巻末で、継母は事顕れて処罰される所を、のもせ姫のとりなしで助けられるが、一年たたぬうちに自害をして果てる。他本は自害のことを記さない。

全体として多和本よりは叙述をはしょっているが、巻頭の部分には大きな省略、改変があるのに対して、後半の少将東下りのくだりはさしたる省略はない。東下りの部分は歌の数も多和本とほぼ同じである。また右に挙げた相違点が示すように、「美人くらべ」には近世的な改訂が加えられているが、特に顕著なのは、宗教的色彩が薄くなって、道

徳的色彩が濃厚になっていることである。右の（5）の個所はその代表的なものであるが、なお巻末の結びの言葉を諸本と較べてみても、それがうかがわれる。

（尊）さてくわんはく後生にはくわんをんとそなり給とうけ給はる、大方むかしもいまも、住吉の明神のねかいおみて給事うたかいなし、又きたの方は後生にはちさうほさつとけんし給へり、又つみなからん物に夢にはらくろあるへからす、現世後生あら（ママ）き事なり、かやうの事いたつらになさんよりはとて、筆にまかせてかきとゝめをくなり

（慶）それよりはしめてこひをする人は、みな〳〵すみよしへまいらせたまひけり、これを見きかせたまはり候はんする人々は、御心になさけあるへきことなり、そのゝち、ちゝ、ひめきみ、くわんはくとのは、わかきみたちまても、あら人かみとなりて、いまもしゆしやうのねかひをみてたまふと申つたへたり

（多）これをみるきかん人〳〵は、かす〳〵御こゝろさしあるへし、又ねんふつを御申あるへく候

（清）これひとへに、すみよしみやうしんの御めくみとかや

（美）これをみ。かれをきく時は。たゞ人にはなさけあれ。此ものかたりをみん人は。よく〳〵こゝろへわけ、たゞじひなさけをかけ給ふへきなり〳〵

すなわち、宗教的な勧化から、道徳的教訓へとの変化が見られるのである。

A類とB類との関係

A類の尊経閣本はB類の慶応本・多和本と、筋立の上ではさして大きな違いはない。しかし本文はかなり離れていて、両類の間に直接の書承関係は認め難い。概して前半は叙述が詳しく、後半はかえって簡略になっている。前半と後半とから、一個所ずつをとり出して、B類の慶応本と対比してみる。

（にほひ姫が生母と死別する条）

A 尊経閣本

御さかりになり給はんまゝの御ゆくゑ、さこそはとおほしやられて、とく十はかりになしたてまつりて見まほしくなとかたらひつゝ、ひめきみのはゝきみ、れいならすなやみ給けるほとに、せうしやうにきこゆるやう、はかなくなり給なんのちは、このおさあひ物あわれみ給へ、なみ〳〵ならんありさませさせ給はて、みかとにたてまつり給へなんときこへ給けり

日にそへておもり給、御身もいとゝ心ほそけに思はれけれは、せうしやうにきこへ給やう、いかなるやらん、このたひはあちきなくおほゆる、さるにつけてもこのひめきみの事こそ、あわれにかなしうおほゆれ、我なからんあといかゝせんすらんと思ふに、のちの世のさわりともなりぬへし、かまへて〳〵おろかにあたり給なよ、それそ我けふやうと思ひたてまつらん、かはかりたくひなくうつくしけれは、よもあしからし、かまへてなみ〳〵ならんありさませさせ給ななんと、うちなけきつゝの給ふに、少将いとゝあさましくおほしまといつ、御なみたををしのこひて、あらよろしや、ふたりの中にてはこくみ給つるたに、あかぬ心ちし給つるに、ましていかはかりかは哀におもひきこゑん、我もおなしをやなれは、それをはなしか思しめしおく、さても御とし十三にてむかへたちゝこせん、いつかおとなしくならむ、おひいてなは、やうきひ、りふしんにもおとるましきとよろこひ、すきゆきたまふほとに、ひめきみ七つにならせたまふ御としの三月三日より、はゝこせんおもきやまふをうけさせたまへは、せうしやうおほきにおとろきたまひて、さま〳〵の御いのりありけれとも、ちやうこうにてやはんへりける、御きとうもかなはすして

B 慶応本

てまつりしより、心はかりはあさからす、十六ねんをすこしつるも夢にてありける物を、おくれさきたち給事もあらは、我身もいきてなんのかいあるへきと、せきかね給へり

このひめきみの御めのと、こたかきといふおんなは、もとより心さま人々しうあつて、しなよりゆるされてめしつかはれたてまつりしうへ、御ちにまいりてのちは、いとゝおほえある人にてはんへりけり、それも姫君の御ことのみうくそきこへおき給ふ

かくてなか月のすゑ比に、はかなきならひにて、昔かたりになり給ひぬ、姫君かなしさのあまりには、むなしき御くしにいたきつき給ひて、かくなん

うちたのむ葉は秋風にちりはてゝ、なにのかけにかこのみたまらん

これを見たてまつりに、わかれの泪にあわれをそへて、御前に候人々こゑもおしますなきあへり、とのゝ御なけき中〳〵にいふもおろかなり

おなしき十一日に、うゐむしやうのならひ、なけくへきにはあらねとも、ひめきみゆかすゑ、又かいらうとうけつのちきりむなしくなりけれは、せうしやう、ひめきみなけきたまふことかきりなし、いかなるいやしきしつのめにいたるまても、こゑををしますさけひけり、ひめきみむなしきはゝこせんの御くひにいたきつきたまふか、しはしありてかくなん

たらちめのはゝあきかせにちりてゆく、はなもろともにわれもとまらし

（多和本ニヨッテ補フ）となけきしつみ給ひける、さてちうしやうの御かへり事に

うきよをはあとをもとめてゆくあれは、われもろともにわれもとまらし

とはんへりて、御こしのものぬきて、しかひせんとしたまひけれは、人々おの〳〵申やう、ゆゝしき御事をせさせたまふや、きたの御かたこそういむしやうのならひなれは、ちから

なくならせたまへとも、ひめきみの御ゆくすゑ、たれやのものかあはれみまいらせ候へき、かゝる御はからいはいかゝと申なくさめまいらせけり

慶応本には、尊経閣本の、母が父の少将や乳母に姫の行末を言い置くことが欠けている。それに対して逆に、尊経閣本にはない父の歌や（慶応本には父の歌が無いが、右に補った多和本の如き文がないと文意が続かないので、慶応本の脱文と考える）、父が自害をしようとしてとめられることが記されている。いわば尊経閣本は母に焦点をあてこの場面を描写しているのに対して、慶応本は父の方が中心になっているという違いが見えるが、これは明らかに尊経閣本の書き方の方がまさっていると言うことができよう。また文章の上から見ても、尊経閣本の方がずっと整って描写力が認められる。たとえば「このひめきみの御めのと、こたかきといふおんなは、もとより心さま人々しうあつて、しなよりゆるされてめしつかはれたてまつりしうへ、御ちにまいりてのちは、いとゝおほえある人にてはんへりけり」の文などは、この種の室町物語の中にあっては、前代の物語に見られるような古雅な和文脈の匂いを感じさせる。母の死に際して詠んだ姫君の歌にしても、尊経閣本の方がすぐれているが、この歌は多和本では、

たらちめの、はゝうきかせに、ちりゆきて、なにのうきよに、この身とまらん

とあって、上句は慶応本に近く下句は尊経閣本に通う所があるという中間の形を示している。ここだけを見ると、尊経閣本の形が古くて、多和本、慶応本の順に変化していったといふ風に考えることができる。いずれにしても多和本や慶応本では、第一句の「うちたのむ」を「たらちめの」と変えたために、尊経閣本の如き譬喩の表現が一貫しなくなってしまっていることはいなめない。このようにどの面から見ても、A類の尊経閣本とB類の慶応本・多和本との

間には、作者に教養の差のあることが認められると思う。なお、この条の尊経閣本に出てくる乳母の「こたかき」という名を、慶応本と多和本は、別の場所であるが「こたかき三郎」としている。この場面の描写が父親中心になっていることと併せて、AB両類の伝本の作者の違いについて暗示を与えるようにも考えられるので附記しておく。

（住吉明神の化身である翁の導きで伏屋へ下った少将が姫と対面する条）

A 尊経閣本

第一段

さていひよるへき人もなし、見入給へは、そりはしなんとわたされて、なめてならぬさまなり、日くれけれは、忍やかに立入て、物の気色を見給うに、南面（みなみむき）に琴のねのほのかにきこへけるをよく〳〵きゝ給へは、恋しき人のつまをとゝ聞なして、胸うちさわきて、まかきにつたひよりてきゝ給へは、その人の声にて

夏ひきのいとよりはへてこし人の、思ひもいまはたえやしぬらん

とて、いみしくなくけしきなり、きくにたえ入こゝちして

夏ひきのいとこそはへてはる〳〵と、たつねてきつる思ひたえねは

B 慶応本

さてすみよしのをしへさせたまふことくたちいりて見たまへは、いゑのありさまことにいみしくたてゝありけり、つゐちにたちよりてきゝたまへは、ひめきみのひきたまへることの（マヽ）おほしくて、そらすみあらしわたりてのち、御こゑほのかにきこえて

なつひきのいとうちはへてしのふとも、くる人あらしひとりふせ屋に

これをせうしやうきゝたまひて、いよ〳〵あはれにおほえて、御ふゑをとりいたしてかくなん

なつひきのいとあはれなるこひなれは、こそよりいてゝことしこそくれ

ひめきみこれをきゝたまひて、ゆめうつゝかとおほしめして、御こゝろさはきてかくなむ

みやこにてありしわかやとたつねつゝ、うちへとみえしふゑのねかとよ

との給ふ御こゑ、姫君そらに聞給て、むねうちさわきて見給へは、せんさいにまきれて山伏たちたり、春のよのおほろなる月影にまきれなく少将と見給ふ、おそろしなから此人のさまにいかにしてまねふならんとおもへとも、たとい鬼神なりとも少将にてましまさはとられんと、ひころより思し事なれは、ちかう立よりて、あなゆゝし、いかてしり給ひけるそやとて

都をはいつから衣たつ（ママ）いてゝ、行めくりつゝはるきぬるらん

さて姫君うちへ入給て、都にてしりて候し山伏の尋きて候か、いかゝせんとの給へは、大にをとろき、いそき立いてゝ、内へ入たてまつりけり、少将はかきの衣にて、はかまなんともいたくやつれ給へ共、なめての人にはまかうへくもませうしやう、やかて御返事

みやこにてうちへと見えしふゑのねを（多和本　みやこにてこちくといひしふえのねよ、なく〳〵ふきてわれはたつねし）

これをひめきみきゝたまひて、又ことのねにて返事

見し人のきたるとふゑにさえつるは、きくはまことのゆめかうつゝか

せうしやう又ふゑにて

こひ〳〵てあふうれしさはゆめかとて、おもひにさはくこゝろなりけり

これをあまきみきゝて、されはこそひめきみこひたまひて、みやこよりたつねてわたりけるとおもひて、すいかきよりのそきたまへは、まことにけたかくいつくしきやまふしの、としのほと廿はかりにみへて、やさしきふせいなりけれは、あまきみおもふやう、いかさままことのやまふしにてはあらし、しやうらうなんとのこひにまよひて、かたちをやつしておはしますと心へて、ひめきみの御かたへまいりて、いかにやふゑふきたまふ人は、ひめきみをこひまいらせて、はる〳〵たつねきたりたまふ人と見えしなり、あら御やさしや、とく〳〵これへいりまらせたまへ、かやうにいやしきあまにて候へとも、御ふゑもことのねも、みなきゝわけまいらせて候なりと申せは、ひめきみのたまはりやう、そのうへはともかくもあまきみはからひたまへとありけれは、やかてさふら

しまさす、あまこせんまいりて、さま〳〵にもてなしまいらせけり、少将きこゆるやう、此君こまかに御物語候らん、はかなくより見そめたてまつりてのち、あさからす候しを、いかなる事や候けん、物にとられ給ぬと都にはひろうす、心なかく物まうてをし候て、住吉のしけんにまかせて是まて尋侍つる、明神のけんして道ひき給へる事、始よりをはりまてかきくとき語給ふを、あまこせん、されはこそ天上のきんたちにてをはしけると思ひし、いとをしの御ありさまやとて、ねり色の二へきぬの袖しほりけり、さて姫君御袖しほりかねてかくなん

山伏のこけの衣を見るからに、いとゝぬれそふ我たもとかな

いところへいれ□いらせけるを、ひめきみものすきまよりみたまへ□、はなのかうはせいろかはり、ゆきのはたへもくろくなり、すかたもおとろへはてゝ、かけのやうにおはしけるを御らむして、あはれいよ〳〵まさりて、ひめきみ

みやこをはいつからころもたちいてゝ、こひをしなのにけふはきつるそ

せうしやうきゝたまひて、御返事

しかなきしあきからころもたちいてゝ、ふゆうちかゝりけふはきつるそ

又ひめきみあそはしけるやう

やまふしのころもをみれはなにとてか、むねはこかれてそてはぬれけん

せうしやうとりあへす

やまふしのかたにかゝれるおい〳〵に、なきてきつれはそてはぬれけり

少将が伏屋へ下る道行の所から、尊経閣本は慶応本・多和本に比して、総じて叙述が簡略で、特に歌の数が著しく少ない。この場面における少将と姫とが詠み交す歌においてもそうであるが、両本を比較してみて、尊経閣本が歌を省略したと考えるべき痕跡は認められないし、歌の表現も、尊経閣本の方が整っていることは前例と同様である。慶応本における少将と姫との歌のやりとりはむしろくだくだしい感があって、増補したものと考えるのが妥当のようである。

なおこの外に、記事の上で尊経閣本が、慶応本・多和本と異なる顕著な個所として、次のような所がある。

（1）にほひ姫が武士に奪われた後、内裏から帰った父が嘆き悲しむくだりに、慶応本・多和本には継母に関する次の文があるが、尊経閣本はそれを全く欠いている。

これをまゝはゝみた□□けいのつほねにのたまふや、うれしき□□おとこまとひするものをは、かやうにこそた□□まり、みめよしとおもひて、せうしやうとのおとこにせんとて、いのちもしらすしつれとも、いまはかなしみたまふよと、御つほねとのたまひて、なきはれたると見らんとて、たてをぬりて、うつふしてありけれは、せうしやうまことゝおほしめして、むまぬこなれとも、あはれをしりてなけくよとおほして、のたまふやう、いたくなさのみなきたまふそとありけれは、きたのかたたてをぬりけれは、ものすさましくはれにけり、めをねふりてのたまふやう、身つからか申やうたかはすや、一ちやうこれは人にかとはされておはしますとおほゆるなり、われらはかほとなけきかなしめとも、いかなる人とかゑようたわふれておはすらん、かみならぬ身ほとつらきものあらしとのたまへは、うらめしくいふものかな、さりともまことのはゝならは、かやうにはよもいはし、これにつけても、みなしことなれるひめ君こそあはれなれ

（慶応本による。多和本も内容は同じ）

（2）父の少将は、にほひ姫をなくした悲しみに、出家して高野に籠る。帝がこれを憐み、高野へとぶらいの歌を贈る。慶応本・多和本は父君の出家遁世のことは無く、帝が父君の許に行幸あって歌を贈られる。

（3）伏屋にて、にほひ姫の夢に少将が現れて歌を詠む記事があるが、慶応本・多和本では、夢に現れるのは少将ではなく、亡き母君で、今二、三日のうちに目出度き事あるべしとて姫をはげますことになっている。

右はいずれも、慶応本・多和本系の新な増補改訂と見ることに支障をきたさない。以上の諸点からして、A類の尊経

閣本はB類の諸本に先立つ古態を有する伝本として位置づけることが可能であろう。

C類本

C類の清水本は、前半の少将から文を贈られたにほひ姫が、乳母の勧めで返事をする所までは、慶応本に非常に近く、特に、巻頭から姫の母が亡くなる所あたりまでは、文章の細部の語句に至るまでほとんど一致している。ところが、少将がにほひ姫の許へ通ひそめる辺から次第に離れ、後半は他のどの本とも、本文の上に直接の承接関係は認められなくなるほど変ってしまう。和歌も、全巻三十一首中、他本と共通するものは十首に過ぎない。後半の少将伏屋下りが簡略なことは尊経閣本と似ているが、清水本は、かつへのすけという伴を連れて行き、途中歌を詠む場所は、美濃国不破の関、三河国八橋、遠江国橋本、宇津の山、清見が関、富士で、かなり違っている。この清水本は慶応本系統の本に拠りながら、途中から新な改訂を施したものであろうかと思われる。なお、にほひ姫が失踪した後で、父君が博士に占わせると、年月隔てて後喜びあるべしとの卦が出るという記事が存するが、これは「秋月物語」に同様のことが見え、「秋月」と交渉のあることが考えられる。

以上を総括すれば、A類本が最も古躰をのこし、ついでB類本、C類本の順になると考えられる。ただA類とB類との間には、かなり大きな断層があって、B類本が直接にA類本を粉本として、改作増補したものかどうかは断定しがたい。あるいは、市古博士が「美人くらべ」について言われたことが、ここにあてはまるかもしれない。すなわち、AB両類ともに、風葉集所載の古本「ふせや」から岐れ出たものと考えることも可能であろう。しかし、いずれにせよ、内容、詞章の面から見れば、A類本は鎌倉期擬古物語の面影をなお残しているのに対して、B類本が典型的

な室町物語になっていることは明らかである。

岩屋の草紙

本作は伝本が相当に多く、刊本も四種を数える。題名としては、時代の下る刊本には、女主人公の呼び名をとって、「対の屋姫」あるいは「対の屋物語」と題したものがあるが、古い伝本は「岩屋」「岩屋物語」「岩屋の草紙」と題している。本作の諸本は、「伏屋」に較べると、異同の程度はやや小さいが、詞章の出入異同はいり組んでいて、系統の分類は簡単ではない。一応左の如き類別を試みてみた。

A類

第一種

(イ) 大東急記念文庫蔵〔江戸初〕写絵巻　三軸

紺地金泥花弁模様表紙（高さ三二糎）。見返し金紙。料紙、金泥草花模様下絵鳥の子紙。題簽、表紙左肩金泥霞引丹紙「岩屋　上（中下）」。内題なし。本文字面高さ約二八糎。一行一五―二一字。画図、（上中）各七面（下）六面、濃彩色。本書は「室町時代物語集第三」に翻刻されている。

続群書類従本

巻末に「右岩屋草紙堀田正敦朝臣蔵本ヲ以書写了」とある。堀田家本は所在を知ることができない。

実践女子大学図書館蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　三冊

紺地金泥草花模様表紙（一六・三×二四糎）。見返し金切箔散し。料紙、間似合紙。題簽、表紙中央「いはや　上（中下）」。本文字面高さ約一三糎。（上）三一丁半（中）三一丁（下）二七丁。毎半葉一三行、各行一二字内外。挿絵（上）六（中）四（下）三頁。

(ロ)〔寛永〕刊古活字絵入本二巻（慶應義塾図書館蔵下欠）

慶応本は上巻のみであるが、本書の下巻は未だ見ることを得ない。慶応本は黒行成表紙（二五・七×一七・五糎）。題簽欠、内題、柱刻なし。刊記なし。本文印面高さ約二一糎。二八丁半、毎半葉一〇行、各行約二〇字。挿絵、丹緑彩色、片面五図。連用活字を使用し、句点はなく、濁点はままある。

岩瀬文庫蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　二冊

金銀切箔散し鳥の子表紙（一七・五×二四・一糎）。見返し銀切箔散し。料紙鳥の子紙。題簽欠。本文字面高さ約一四糎。（上）三一丁半（下）二七丁半。毎半葉一五行、各行一五字内外。挿絵（上）一一（下）九頁。「岩瀬文庫目録」には「たいのや姫物語」と題してある。

第二種

学習院大学図書館蔵〔室町末江戸初間〕写本　一冊

本文共紙表紙（二六×一九糎）。外題、表紙中央に「いわ屋のさうし」とある。内題なし。本文字面高さ約二四・五糎。六六丁（巻末一丁欠）。毎半葉八行、各行二二字内外。巻頭に「子爵福羽逸人寄贈」の黒印。

第三種

天理図書館蔵慶長十三年写本　一冊

小豆色表紙（二六・八×一八・七糎）。題簽、表紙左肩「いわや物かたり」。内題なし。本文字面高さ約二四糎。四四丁、毎半葉一〇行、各行二三字内外。奥書「慶長十三／霜月中五日ニ書之」。奥書の後に和歌三首を記し、更に続けて「十一月十日あまりにかき候しほとにてのひへる事さむき事ごのうちたき事むつかしき事なか〳〵いや〳〵あらむつかし〳〵」とある。扉紙と巻末に「斑山文庫」の朱印。すなわち高野辰之博士旧蔵本で、「室町時代物語集第三」に解題が載せられている。

第四種

天理図書館蔵〔室町末江戸初間〕写奈良絵本　二冊

改装紺表紙（三一・五×二四・五糎）。見返し極彩色草花絵雲紙。料紙鳥の子。題簽剝落、下巻は題簽跡に「□□やものかたり下」と補筆。（上）三四丁半（下）三〇丁半。行数字数不等。挿絵（上）三五頁（下）三三頁。

第五種

慶應義塾図書館蔵〔江戸初〕写本　一冊

濃縹色表紙（二六・二×二一糎）。題簽、表紙左肩「いわやひめ」。内題なし。本文字面高さ約二二・五糎。四一丁、毎半葉一一行、各行二〇字内外。巻末に「幸田成友」の朱印。本文には振仮名、濁点を多く附す。又朱の句点及び朱引あり。

第六種

(イ)〔寛永〕刊絵入本二巻（国会図書館・京大図書館・教育大図書館・実践女子大図書館等蔵）

大形本。内題「いはやのさうし上（下）」。刊記なし。匡郭、三周単辺（二〇・五×一五・五糎）。板心「上（下）

（丁附）」。（上）二五丁（下）二〇丁。一〇行、二〇字内外。挿絵（上）五頁（下）三頁。本書はいわゆる流布本で、「室町時代物語集第三」の外、「続群書類従」「有朋堂文庫」「校注日本文学大系」等に翻刻されている。

〔宝永正徳〕鱗形屋刊絵入本二巻（教育大図書館蔵）

教育大本は合一冊。改装葡萄茶色地布目表紙（二六・五×一八・四糎）。題簽、表紙左肩子持罫「絵入たいの屋ひめ上」（中下は書題簽）。内題なし。匡郭、単辺（二二・三×一五・六糎）。板心、白口「いは　上（下）（丁付）」。刊記「鱗形屋新板」。（上）二一丁半（下）一七丁半。一二行、各行約二五―三〇字。本文は前掲〔寛永〕刊本と同じ。

細川家永青文庫蔵〔江戸前期〕写絵巻　三軸

鶯色錦繡表紙（高さ三二糎）。見返し金紙。料紙金泥下絵鳥の子。題簽「いはや物語上（中下）」。本文字面高さ約二七糎。各行一三字内外。

内閣文庫蔵〔江戸中期〕写本　一冊

淡香色表紙（二六・一×二〇糎）。外題、表紙左肩に「岩屋のさうし」と朱書。内題「岩屋のさうし」。字面高さ約二二糎。四三丁、一〇行、二〇字内外。

岩瀬文庫蔵〔江戸後期〕写本　二冊

香色表紙（二一・五×一五・五糎）。外題「岩屋双紙上（下）」。内題なし。字面高さ約一八・三糎。毎半葉一一行、各行二〇字内外。

(ロ)〔宝永正徳〕鱗形屋刊絵入本　（岩瀬文庫蔵）

岩瀬本は一冊。改装白表紙（二二・五×一五・二糎）。題簽、後筆で「菱川師宣筆／たいのや姫物語／元禄版」と

墨書。内題「たいのや物かたり」。板心、黒口「たいのや姫（丁付）」。刊記「鱗形屋開版」。匡郭、単辺（一七・三×一二糎）。二三丁、一四行、二六―三一字。挿絵、見開き七図。前掲(イ)の鱗形屋板とは別板で、本文も異なる。

第七種

天理図書館蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　三冊

紺地金泥秋草模様表紙（一六×二三糎）。見返し白地銀箔散し。題簽「いわや上（下）」（中欠）。本文字面高さ約一三糎。（上）二九丁（中）二七丁（下）二一丁。毎半葉一三行、各行一一字内外。挿絵、各冊五頁。果園文庫旧蔵。

第八種

国会図書館蔵〔江戸中期〕写本　一冊

淡茶色地草木模様鳥の子紙表紙（二九・五×二〇・五糎）。上に帝国図書館覆表紙。題簽、元表紙中央「岩屋物語」。内題なし。本文字面高さ約二二糎。四七丁半、毎半葉一〇行、各行一八―二三字。

B類

東北大学附属図書館狩野文庫蔵〔江戸中期〕写本　一冊

縹色表紙（二六・八×二〇糎）。外題「いはやもの語」。内題「岩屋物語上（中下）」。奥書なし。本文字面高さ約二二糎。三六丁、毎半葉一一行、各行二〇―二五字。

以上の外に「近古小説解題」「室町時代物語集第三」の解題に、伊達候爵家所蔵の絵巻三軸が挙げられている。この絵巻はA類第一種の大東急本と同系統らしく、それよりもやや古い由である。「近古小説解題」では伊達家本を「本

朝画史に『婦人一位、飛鳥井栄雅之女也、能レ畫、畫二岩屋物語事実一、書二此詞一』といへるは、この絵巻のことならじか。」と考えられている。また、「室町時代小説論」に野村八良博士架蔵の奈良絵本三冊が紹介されている。本文は第六種の刊本系の如くである。

A類本

右の分類におけるA類の諸本は、筋立てには全く変りはない。しかし詞章は、八種ともそれぞれに出入異同がはげしい。まずA類の八種の伝本の関係を考える前に、第一種本と第六種本とにおける、直接の関係を有することの明らかな各本について述べる。

第一種の諸本

(イ)の大東急本・続類従本・実践女子大本の三本は、ごく細部の字句の相違があるのみで、ほとんど同文である。また、(ロ)の古活字本と岩瀬文庫本とは、古活字本が下巻を欠いているが、上巻についてみれば全く同文である。従って、岩瀬文庫本は古活字本によって作製した奈良絵本と考えられ、岩瀬文庫本によって、古活字本の下巻の本文を補うことができるとしてよいであろう。ただ岩瀬文庫本の下巻の末尾に

たいのやのひめきみは、いはやのふとうけしんとそきこえける、ふるきものかたりもおほけれとも、いはやのひめきみほと、やさしき事、まことにあはれにめてたかりける事はなし

の一句があるが、対の屋姫が不動の化身であるとする記事は、他のいずれの本にも見えない。この一句のみは、古活字本にあったかどうか疑問で、あるいは本書のみの増補であるかもしれない。

(イ)の大東急本系と(ロ)の古活字本系との本文は、これも極めて近いが、(ロ)の方が部分的に簡略になっている個所が多い。相違の多い個所を一例挙げると

（対の屋姫の母が亡くなり、父中納言が後妻を迎える条）

(イ) 大東急本

第三ねんもすきぬれは、かくて有へきにもあらねはとて、A さる御かたをむかへ、すへたてまいらせ、御子の姫君にとしひとつあねなるひめきみを一人もち給へる人を、きゝいたして有けれは、我か子を思ひ給はんに付ても、姫君のためにもあしからと心得て、むかへ給ふ、B 我も一人の姫をもちたり、人もひとりの姫君おはします、わか子をおもはんにつけても、人の御たやすきさまにもてなし給はんと、中納言殿まめやかにうれしくおほしける

さて、きたのかた入せ給へは、にしのたいをしつらひて、たまのごとくかさりて、みやはらの姫君入参らせ給ひけり、それよりして、ひめきみをはたいのやの姫君とそ申ける

さて、C まちかくおはしける左大臣のひとりこに、D 四ゐ少将といふ人、たいやのかたを心にかけて、御めのとをかたらひて中納言殿に此よし申けれは、少将あたりまちかきうへ、御むこと名つけ給ひぬれは、あさゆふかよひて、あそひたまひける

(ロ) 古活字本

たい三ねんもはやすきぬ、かくてあるへきにあらねはとて、A あたらしききたのかたすへたてまいらせ、御このひめきみにとし一あねなるひめきみを一人もちたまへる人を、きゝいだしてありけり、わがこを思ひたまはんにつけても、ひめきみの御ためにもあしからしと心ゑて、ちうなこんとのまめやかにうれしくおほして、むかへける

さて、きたのかたいらせたまへば、にしのたいをしつらひて、たまのごとくかざりて、みやばらのひめきみをいれまいらせたまひけり、それよりして、此ひめきみをばたいのやとぞ申ける

さるほとに、そのころD せうしやう殿と申ける人をこゝろにかけて、御めのとをかたらひて、ちうなこんとのに此よし申けれは、E 中なこんとのことうけしておはしける、せうしやうあたりまちかきうへ、御むことなつけ給ひぬれば、あさゆふたいのやにかよひて、あそひ給ひけり

大きな相違は、傍線ＡＢＣＤＥの五個所を数えるが、その外の共通の部分の文章を見ると、細部までほとんど一致していて、両者が直接の承接関係をもつことは間違いない。そこで、どちらが先であるかが問題となるが、まずＤは古活字本の誤脱であり、Ｅは逆に大東急本の誤脱である。（Ｅの句は、大東急本系の続類従本には存する）両本とも全篇に亘って、このような誤脱の個所があるが、全体としては古活字本の方にそれが多く見られる。Ｃの句は、大東急本の方にのみ存するが、第二種以下第八種に至る諸本を見ると、いずれもＣと類似の句を有しているので、古活字本の省略と考えるのが妥当のようである。またＢの句も、大東急本にのみ見えるが、この方は、Ｂの中の「わか子をおもはんにつけても、人の御たやすきさまにもてなし給はんと」の句が、すぐその前の「我か子を思ひ給はんに付ても、姫君のためにもあしからと」の句と重複してくる。大東急本の文では、中納言が同じことを繰り返していることになる訳で、その意味ではＢの句が増補であることを思わせる。ところが、この部分を続類従本では、

御ためめやすきノ誤カ

あしからしとノ誤カ

わが子をおもひたまはんにつけても、姫君の御ためにあしからじとぞおぼしける、きたの御かたも中のへだてもあらじと、心うつくしくもてなし見え給ふを、中納言どのは御らんじて、めやすき事におぼしめし、御よろこびは限りなし

という風に、全く変えてしまっている。また第二種の学習院本では

わかこをおもわんにつけてもあしからしとおもひて、むかひ給ひけり、さてきたの御かたのたまひけるは、われも一人のひめをもちたり、人もひとりのひめきみおわします、わかこをおもわんにつけても、人の御ためつゆもおろかならすなんとのたまひて、めやすきさまにもてなし給へは、ちうなこんもこゝろうれしくおほへさせたまひける

第四種の天理本では

人のこをはこくみたまはゝ、わかこをおもふにつけて、ひめきみの御ためをろかにあるましとおほしめして、むかへ給ひけ

り、かくてすきゆき給ひけるほとに、きたの御かたおほせられけるは、われもひとりのひめきみ、人も一人のひめきみ、わかこをおもふにつけて、人の御ため露もをろかなるましと、めやすくもてなし給へは、中なこんとのよのつねうれしくおほしめしける

とあって、いずれも大東急本の形に近いが、Bの句に当る部分は、後妻に迎えられた北の方の言葉になっているので、前の句との重複が避けられている。その外、第六種の刊本は、

我ひめぎみ、人の姫君もへだてなく。おろかなるまじとて。むかへ給ひけり。扨北の方めやすくもてなし給へは。中納言よにうれしくぞおぼしける。

とし、第五種の慶応本、第七種の天理本もこれとほぼ同じである。ここでは、大東急本のBの句は、「扨北の方めやすくもてなし給へは」の短い句に要約せられている如くである。このように、大東急本と同系の続類従本や第二種以下の諸本において、Bの句に当る部分を、何らかの形で備えていることは、先のCの句の場合と同様に、Bのある大東急本の形の方が古いことを示しているのではなかろうか。残りのAの句における両本の違いは、両本の先後関係を考える上の資料とはならないであろう。第二種本以下の諸本も、Aに当る部分はまちまちである。こうしてみると、右に対照した一節からは、(ロ)の古活字本の本文の方が後出であるとすべきように思われるが、なお全篇を通じてみても、

こと、ひは、うたのみち、人にすくれさせ給ひけり、くわんげんのかたをろかならすして、うたもよみ、ゑかき、花むすひ、ようもんほうもん心にかけ――こと、びわ、うたのみちまでも人にすくれさせたまふ、ゑかき、はなむすび、ようもんほうもん心にかけ

さどうさへもん、かへにそむけるとほしびかきけちて、やをらよりて、こんでいの御きやうとみなすいしやうのしゆずをはふところに入て、さしよりていたき奉れは、姫君をとろき給ふ、やをらさしのきてありけれは、めのとやをこしけんと思召て、御手をのへて人をとしけるかたをさくり給ひける、またもとのことくね入給ふ——さとうさへもん、かへにそむけるともしひかきけちて、やはらよりていたきたてまつれば、ひめ君おとろき給ひぬ、やはらさしのきてありけれは、又もとのごとくねいり給ひぬ

さて姫君は、かるもみなになりけれは、さしくへで、火もきえにけり、其時人はひとことになこりなやと仰られて、よりふし給へは、そのとき中将殿は、いさやうちへ入なんとの給へは、さこんのせう申けるは、御覧じてうちすてんとおほさは入らせ給へ、しうの人と覚しめされは、よるは帰らせ給へと申せは、誠にさ有へしとてかへり給ひぬ——さてひめきみは、かるもゝみなになりけれは、さしくへてもたきたまはず、ひもきゑければ、ひめきみのすがたもみえわかず、そのとき中しやう殿は、いさやうちへいりなんとのたまへは、さこんのせう申けるは、まづかへらせ給へとありけれは、なこりおしうはおぼしめされけれとも、かへり給ひぬ

（以上、上が大東急本、下が古活字本）

の如く、古活字本が大東急本の本文を節略したと考えて差支えない例が多い。

以上によって、第一種本においては、(イ)の系統の本文が、(ロ)の古活字本系に先立つ古態のものと考えたい。なお附言すれば、古活字本は、(イ)の諸本の中大東急本と直接の関係を有していると言えそうである。それは、大東急本と古活字本とは一致しながら、続類従本、実践女子大本とは字句の異なる個所をかなり見出し得るからである。

第六種の諸本

(イ)の〔寛永〕刊本と〔宝永正徳〕鱗形屋刊本との本文はほとんど同じである。また永青文庫、内閣文庫、岩瀬文庫

の絵巻や写本は、いずれも〔寛永〕刊本に拠ったものと認められる。(ロ)の鱗形屋刊本は、(イ)の鱗形屋板とは別本で、所々本文を著しく節略している。一例を挙げておく。

(イ)〔寛永〕刊本

われもはらはに子を六人持たるが。一人見えぬだに心もとなくおもひつるに。まして此父たゞ一人もち給へる。姫君御すがた心ばへゆふにやさしくましませば。さこそはなげかせ給ふべきと思ひつゞけて申けるは。いかに姫君きこしめせ。北のかたさまの仰はそむきがたく候て。これまでぐし申て候へども。あまりに御いたはしくて。海へもいれ奉らず候。ともかくもみづから御はからい候へと申せば。左様に申され候事うれしくはさぶらへ共。じかいは罪ふかき事なれば。とにもかくにも汝がてにかゝらではとおもふなり。夜もあけ人もしらばまゝ母御前の御名もたちなんぞ。はやとく〳〵との給へは。まことに上らうの御心程いかめしき物はなし。下らうならば。かなはぬまでもたすけよとこそ云べけれ。かやうの仰られ事こそまことに有かだき御わざなれ。きこふるあかしのくまなき月も。泪にくれてさだかならず。松に時雨る風の音。汀の波にあらそひて。ことのしらべにことならず。とかくこがれゆくほどに。あわぢのゑじまが。礒へぞゆられ行。佐藤左衛門うみの面を見わたせば。大なる岩ほあり。うれしくおもひて。此岩あなのうへにいだきあげ奉り。是にてとも

(ロ)鱗形屋板

我六人の子をもちたれと、一人見えぬもかなしきに、まして此父たゝひとりの姫君、御すかた心はへゆふにやさしくましませは、さこそなけかせ給はんと思ひつゝけて申けるは、いかに姫君、海にしつめんもあまり痛はしく候へは、みつから御はからひ候へと申せは、かくの給ふもうれしくは候へ共、女の身なれはいかてじかいなしぬへき、汝かてにかゝらてはと思ふ也、夜もあけ人しらは人めもはつかし、はや〳〵との給へは誠に上らうそかし、下らうならはたすけよといふへきに、かやうに有かたき御わさなれ、あかしの月のくまなきも泪にくれておほろ也、松にしくるゝ風の音、ことのしらへにことならす、波にこかれゆくほとに、あはちのゑしまかいそへそゆられ行

左衛門海の面を見渡せは、大き成岩ほ有、爰へひめ君いたきあけ、心つよくもてなして、なみたと共にこきかへる、姫君

かくもみづから御はからひ候へ。御なごりおしくは候へ共、心づよくもてなし。泪と共にこぎてぞかへりける。姫君は岩ほの上に捨られて。天にあふき地にふしりうていこがれ給ひけり。はるかの波をへだてゝ。御こゑはかり聞えて。佐藤左衛門もなく〳〵舟さしもとりけり。

岩ほの上にすてられ、天にあふき地にふし、りうていこかれ給ひけり、波ちへたてゝ左衛門もなく〳〵こかれもとりけり

A類諸本の関係

さてここで、A類の第一種より第八種までの各本の関係について考察する。このうち、第八種の国会本は、第一種本に基づいて改訂を加えた本であることが明らかである。この本の本文には、第一種本に非常に近い所と、かなり離れている所とが交錯してあらわれてくる。全体として見れば、前半は第一種本とほとんど同文の所が多く、後半は離れている所が多くなってくる。本文の一例として、先に大東急本と古活字本とを対照させた部分を引いておこう。

かくて第三年もすきしかは、さてあるへきにあらされは、あたらしき北のかたをむかへ給ふ、ひめきみに御年ひとつましたる御むすめもち給ひたる人を聞いたし、わかこをも思はゝ、姫きみにもおろかあらしとおもひてむかへ給ふ、我もひとりのひめ君、わかこをおもふゆへなれは、人の御ためつゆおろかなるましと、めやすきさまにもてなし給へは、中納言もよにうれしくそおほしける

さてきたのかたいらせ給ひしその日より、にしのたいをみかきたてゝ、みやはらのひめきみをすへ奉り、それよりして御名をはたいの屋とそ申ける

かくてとなりまちかき左大臣にておはしますひとりこに、しいの少将と申ける人、たいの屋のめのとをかたらひて、中納言に申されける、御めのと申やうは、ねうこきさきよりもなか〳〵この御ことめてたかるへし、雲のうへの御すまゐは、御身も心

くるしくもやと申けれは、けにもとて、四位の少将もたゝ人ならす、左大臣とのゝ独子にてあるなれは然へしとて、中納言御請し給へは、少将御聟になり給ひぬゝへは、朝夕よひたてまつりて、あそひたまひけり

傍線を附した部分のように、この本独自の句もあるが、あとは第一種本とほぼ一致するところが多い。

なお、国会本には、さして大きなものではないが、この本のみに見える特有の記事が二つある。一つは、帥の中納言が筑紫へ着いた後、北の方に対の屋姫の亡母の霊がついて、怨み言を述べることがあるが、その後に、

かゝりけるところに、さふらひのしやうしちくせんのせんしといふものあり、まゝはゝの御むすめのもとへよなくかよひけるほとに、かくれなくして、大しん殿の御みゝにいりけれは、いかなる女御后といふとも、おやのしらさらんに何かせんとて、ふきやうありけれは、九こくのうちにはすみわひて、ひきくし都へのほりけり

という文がついている。この、継母の娘を筑前の前司が娶ったという記事は、他の諸本には見られない。これは、後に中将と対の屋姫との間に若君が生まれた時、継母の娘で筑前の前司の妻となっている女が乳母に参ったという記事がすべての本にあるが、それに照応させるために、ここに増補したのではないかと思われる。いま一つは、中将が海士の娘と同棲したというので、二人の仲を割くために嫁較べを催そうとして、対の屋姫を呼び寄せる所に

さて中将殿、二てうといふ御めのとをめして、いる事あり、女はうのしやうそく一かさねたつねてまいれとありしかは、二てう我か家にゆかすして、てんかの御所へまいりて、中将殿おもひ人のしやうそくたつぬるとそわらひける

とある文である。これも、中将の母が対の屋姫を嫁較べの席に呼ぶに際して、白の装束を送ったとある諸本の記事に合わせたのであろうが、この文は前後と全く遊離していて、いかにも思いつきで挿入したという感を免れない。これによっても、第八種の国会本は、第一種本に拠って独自の改訂を行なった伝本であることが考えられよう。

そこで、残りの第二種から第七種までの伝本の考察に入る。まず物語中の和歌について、第一種本をも含めて対照してみると左の如くになる。本作には和歌が少なく、左に掲げるものが全部である。

(中将が明石の海士の岩屋を覗き見している時、対の屋姫の詠んだ歌)

	(一)大東急本	(二)学習院本	(三)慶長本	(四)天理本	(五)慶応本	(六)刊　本	(七)天理別本
A	おもひきや身をあま人になしはてゝ、かるもとひとりあかすへしとは	おもはすよ身をあま人になしはてゝ、よりもたくもをとほすへしとは	おもひきや身をあま人になしはてゝ、もくつをひとりあかすへしとは	おもひきやみをあま人になしはてゝ、かるもをひとりあかす□しとは	おもひきや身をあま人になしはてゝ、かるもをひとりあかすへしとは	おもひきや身をあま人になしはてゝ、もくすひとりあかすへしとは	おもひきや身はあま人になしはてゝ、かるもおひとりあかすへしとは

(岩屋の中に書きつけてあった姫君の歌)

B	月はさすなみはよせきてたゝくとも、あかしかほにもあくるしのゝめ	月はさすなみはよせきてたゝくとを、あるしかほにもあくるしのゝめ	月はさしなみはよせきてたゝくとも、あるしかほにもたゝくしのゝめ	月はさしなみはよせきてたゝくとも、あるしかほにてあくるしのゝめ	月はさし浪はよせきてたゝく戸を、あるじかほにもあくるしのゝめ	月はさし波はよせきてたゝく戸を、あるじかほにもあくるしのゝめ	月はさしなみはよせきてたゝとをく、あるしかほにもあくるしのゝめ
C	われゐたるいはやのうちにとまりして、	あかしかたおかのいわやにすみわひて、	わかいたるいわやのうへにまろねして、				

すみつきぬへ　なみなれころ　こひしき人を
きこゝちこそ　もほすひまも　またやあふへ
せね　なし　き

D

たらちねにい　たらちおにい　たらちおにい　たらちねにい
かてしらせん　かにしらせん　かにしらせん　かてしらせん
うらなみの、　こゝにきて、　浦にきて、　うらにきて、
かゝるうきよ　ちいろのそこ　いろのそこを　ちいろのそこ
をのかれぬる　をのかれつる　のがれたる身　をのかれたる
みを　身を　そ　身そ

E

月かけはあま　月かけはあま　月かけはあま　月かけはあま
のいはやにや　のいわやにや　の岩屋にやど　のいわやにや
とれとも、な　どれども、な　れども、なが　とれともなか
からへすまむ　がらへはてん　らへはてんこ　らへすまんこ
事そかなしき　事ぞかなしき　とぞかなしき　とそかなしき

F

いかにせんう　いかにせんう　いかにせんう　いかにせんう
らのあま人な　らのあま人な　らのあま人な　らのあま人な
かりせば、な　かりせば、な　かりせば、な　かりせは、な
みのそこにて　みのそこにて　みのそこにて　みのそこにて
くちやはてな　くちやはてな　くちやはてな　くちやはてな
ん　ん　ん　ん

（中将が姫を都へ伴ない帰った時、中将の正妻北の方が里へ去るとて詠んだ歌）

G　世の中にうつ

ろふ花もある
ものを、おも
ひなからもぬ
るゝそてかな

H　かくはかりち　かくしもはち
きらさりしを　きらさりしを
いつのまに、　いつのまに、
つゆをきかへ　つゆおきかへ
てそてぬらす　てそてぬらす
らん　らん

右の和歌における異同によると、まず第五・六・七の三種の本が一類をなすことは明らかである。そして、第二・三・四種の三本はいずれも慶長前後の書写にかかるもので、第五・六・七種の三本よりも古い所からして、第五・六・七の三種は後出の形態を示すものと考えるのが自然であろう。すなわち、DEFの三首は後の増補によるものとすることが出来る。次に第四種本は、Cの一首を欠きDEの二首を含む点において、第五・六・七種本に非常に近い。従ってこの本は、第五・六・七種に次いで新しい形の伝本と言えよう。残りの第一・二・三種の三本の関係については、第二種本はCの一種が全く異なり、Aの歌も他の六本と語句にかなり相違をもつところから、傍系の本ではないかと考えられるが、それ以上に明確なことを言うのは無理のようである。この三本の間で段階的に欠けているGHの二首は、それを考える目安となり得そうでいて、そう簡単ではない。この二首を詠んだ中将の正妻である北の方は、この物語の中では何の役割も演じていない人物であるから、第一・二種本が増補したものと考えることもできる

が、逆に第一種本が先で、後の本がその歌を省略することも容易であったと考え得る。そこで次に、和歌以外の本文を何個所か比較して、これら諸本の本文の関係を検討してみよう。

（1）巻　頭

第一段

㈠大東急本

清和天皇の御とき、三条ほり川にすむ人おはしけり、Aほり川のちうなごんこれなかのきやうと申、いゑとみさかへて、Bなに事も心にまかせ給ひけりされはほり川の中納言、此秋の比よりしら川の姫みやにいひより給ふ、おとこを

㈡学習院本

せいはてんわうの御とき、三ちやうほりかわにすむ人おわしけり、Aほりかわのちうなこんこれなか、いへとひさかへて、Bなにこともこゝろにまかせたまひけり、されはにやけふこのころ、しらかわのひめみやといゝよりたまふ、いわきならぬ御身なれは、Dこちふくか

㈢慶長本

中ころみかとおはします、御なをはせひくわてんわうとそ申ける、その三てうほりかはに、Aそつのちうなこんと申人おはします、Bなに事もこゝろにかなはすといふ事なし、よろつおほしめすまゝにして、みかとの御おほへいみしくはんへりける、さるほとに、いかな

㈣天理本

せいわてんわうの御とき、三てうほり河に、Aなこん殿ときこえさせ給ふ人おはしけり、Bなにことにつけてもとほしきことのなきまゝに、よろつ御心にまかせけるほとに、みかとのみや、しら川のひめきみと申に、いかなるたよ

㈤慶応本

せいわてんわうの御時、三でうほり川にAなこん中納言有季の卿とて、公卿一人おはしける、家とみさかへて、Bなに事につけてもとほしき事なければ、よろづ御心にまかせ給ひける、さればにや大田の帝の二の宮白川の姫君と申に御心をか

㈥刊　本

そも〳〵清和天皇の御時。三条ほり河にAなこん中納言有末のきやうと申人おはしけるが。家とみさかへ。Bなに事につけてもともしき事ましまさねば。よろづ御心に叶はぬといふ事なし。しかるに大田の御門の宮。しら河の姫君と申をみ給ひしよ

㈦天理別本

せいはてんわうの御とき、三てうほり河に、Aなこん中納言ありすゑのきやうと申人おはしけり、いへとみさかへたまひて、Bなに事につけてもとほしき事なけれは、よろつ御こゝろにまかせ給ひけりこれはあふたの御かとのみや、しら川の

んなのならひ
そらふくかせ[D]
の心ちして、
つゐになひか
せ給ふ、たひ
かさなれは人
もしられにけ
り、されはそ
つゝます、く
ものうへもて
なしかしつき
奉る

せのひなみへて
つゐにはなひき
たまひけり、た
ひかさなれは人
めにももれつら
んに、もるゝ御
けしきあらわれ
けれは、くもの
うへ人もてなし
かしつきたてま
つら[マ]

る御ちきりなり
けん、ひめをみ
やゐしのひ〳〵
に参り給ふ、さ
るほとに、よな
〳〵かさなりつ
れは、きみもき
こしめしけれと
も、このうゐは
ちからおよはす
うちすきたまひ
□されはくも
よりはしめて、
もてなし給ふ事
かきりなし

りにや申より
給ひけむ、な
さけをかけさ
せ給ふほとに
うらふく風[D]の
心ちして、つ
ゐになひき給
ひけり、たひ
かさなれは人
みなしりぬ、
つゝまされは
雲のうへ人と
もてなしかし
つき給ふ、[E]さ
てこそほり河
のみやと申け
る

け給へり、[C]さ
れどもなびく
けしきもわた
らせ給わず、
とかくあかし
くらさせ給ひ
しかども、御
心ざしの色い
よ〳〵ふかく
みえさせ給ひ
しかば、なん
によのならひ
のわりなさは[D]
うらふく風の
心地して、つ
いになびき給
ひけり、たび
かさなれば人
しりて、雲の
上人もてなし
かしづき奉る

り。御こゝろ
あくがれ。さ
ま〳〵御心を
つくさせ給へ
ども。[C]なびか
せ給ふけしき
もおはしまさ
で。あかし暮
し給ふ所に。
御心ざしの色
ふかくありし
かば。男女の
ならひのわり
なさは。[D]浦吹
風と終になび
かせ給ひけり。
たびかさなれ
ば人しりて。
まことに雲の
上人ももてな
しかしづき奉
る。

姫きみと申□
御こゝろをよ
せたまひて、
おり〳〵うか
ゝひ給へとも
なひくけしき[C]
もおはしまさ
す、あかしく
らし給ふとこ
ろに、御心さ
しのいろもふ
かくありしか
と、なんによ
のならひのは
りなきは、[D]ふ
くかせの心地
して、つゐに
はなひきたま
ひけり、たひ
かさなりて人
しりて、くも
のうへ人もて
なしかしつき

かゝる程に、はやほとなくくわいにんならせ給ひけり月かさなりて日さたまり、御さんやすらかにならせ給ひぬ、かゝやく程のうつくしき姫宮出き給ひけり、中納言ありかたき事におほしめして、かしつきそたて給ふ

さるほとに、みやほとなくたゝならぬ御身にみゑさせたまひ、月日もいたりぬれは、御さんたいらかに、かゝやくひめみやまふけたまふ、ちうなこんもありかたきことにおほしめし、いつきかしつきたまふことかきりなし

かくて月日もかさなりけれは、みやはたゝならすわたらせたまひけれは、いまはしのふへきにあらすとて、三てうほりかはとのへうつしまいらせられけり、さるほとに、のちにはほりかはのみやとそ申ける、月日すきゆくほとに御さんありける、ひかるほとのひめきみにておはしまし、ちうなこんとのはかたしけなくおもひ給ひて、いにうかし

かくてすきゆきたまふほとに、御くはいにむありて、月まちかさなりて、御さんたいらかなりかゝやくほとの御ひめきみにてそおはしましける、中なこんとのはありかたきことにおほしめし、いつきかしつきたまふことかきりなし

ちぎりはくちせぬならひにて、みやくわいにんし給ひぬ、それよりしてこそ堀川のみやとは申けれ、月日かさなれば、御さんたいらかにせさせ給ふあたりもかゝやくほどのひめぎみにてぞおはしける、中納言世にうれしく思召。ゐつきかしづき給ふことかぎりなし。

たてまつる

ちきりはくちせぬならひにて、ほとなくくわいにんし給ひぬ、ほり川のみやとそ申ける、月日かさなれは、御さんたいらかにせさせ給ふ、あたりもかゝやくほとのひめきみにてそおはします、中なこんはめてたきことにおほしめして、いつきかしつき給ふことかきり無し

かくてすきゆけは、姫君の御みめかたちなのめならすちゑさいかく世にすくれ、大しやうもんじゆともいひつへし、ことひは、うたのみち、人にすくれさせ給ひけり、くわんげんのかたをろかならすして、うたもよみ、ゑかき花むすひ、ようもんほうもん心にかけ、人にすくれてむ

かくてあかしくらしたまふに、ひめみやの御みめかたちなのめならす、ちへさいかくよにすくれ、ひわことひかせたまふ、しらへなともいとけなきところもおわしまさす、よみかききやうろん、ようもんの心にかけ、つねにほんそんにむかひこゝろをすまし、むしやうをくわんしたまふほとの御こゝろあてなりけれは、ちゝはゝ

つきたまふ事かきりなし

かくてくらし給ふほとに、ひめきみいまたいとけなくおはしますより、なに事につけてもかしこくして、しをむかはすにかたみをかけたることくにて、しいかくわけんよりはしめて、よろつのきやうもんほうもんのみちにくらからすましませは、大しやうもんしゆのけけんともうたかはれる、つねはよのならひさためなき事を

かくてひめきみ、日にそへてひかりさしそふ心ちしてみめかたちさいかく人にすくれ、大しやうもんしゆのけしむかとうたかはれ、七のとしより、ひわことわこんほうきやうすくれて、ゑかきもとをきはめ給ふ、哥をよみしをつくり、ゑかき花むすひ、御てのいつくしきことならひ

御としのゆくにしたがひてあいきやういよ〳〵まさり給ふ、又びわことをも十歳よりうちにしてそのみなもとをきわめ、要文法問心にかけて、常は御本尊の御まへにしんをとり、あわれみをなし給ふ、されば文殊のけしんと皆人申あひけり

御としのゆくにしたがひて。いよ〳〵ねひまさり。又びわことなどをも。十さいより内にて。其みなもとをきわめ。ようもんほうもんこゝろにかけて常は御本尊の御前に参り。無常をくわんじ。あはれみをなし給ふ。さればもんじゆのけげんと皆人申あひけり。

じやうをくわんじ給ひけり

もふしきのことにおほしめし、そたてたてまつりたまひけるほとに

おもひ、御きやうをのみこゝろにいれさせ給ひけり

なし、ようもんほうもんを心にかけさせ給ふ、人にすくれ給ひてうゐむしやうをくはんし給ひけり

第四段

さるほとに、この姫君の御とし十二に成給ふ、二月中の五日のあかつき、はゝみやかりのますまにとちこもり、御かせの心ちとて、[G]あくる日はびやうどう大ゐの水すまでにごれる心ちしてよのつねのかゝるほとに、御とし十になりたまふ、やよひなかはのやはんのあけかたよりはゝみやかせの御こゝちときこへさせたまふ、[H]あけぬる日も御くすりなといろ〳〵とりつくろひたてまつらせたまふ、御きたうなんと、さま〳〵にかなたこなたおほせおくさるほとに、ひめきみやつと申三月のなかの五日より、はゝみやれひならすなやみ給ふ、たゝよのつねのかせのこゝちかとおほしめしけれはいとゝおもれたまひて、十七日のくれほとに、ついにはかなくならせ給ふ、御としいまた廿七

さるほとに、ひめきみ八の御とし、三月十五日のあかつきより、はゝみやかせの心ちとてなやみ給ふ、たゝよのつねの御心ちとかくためらひたまふところに、十七日のゆふへよりたいしにならせ給ふ、

此姫君八の御とし、三月十五日のあかつきより、御母みや風の心ちとて、やまふのゆかにふさせ給ふ、しだひにおもらせ給ひて、おなじき十八日の暁に終にはかなくならせ給ふ、御とし廿八、おしきか

さるあひだ此姫君。十の御とし三月十五日のあかつきより。母宮風のこゝちとてなやみ給ふが。しだひにおもりて。十八日のあかつき終にはかなく成給ふ。御とし廿八、おしかるべき御よはひ也。中納言

このひめきみ八つの御とし三月十五日のあかつきより母みやかせの御心地とてとこにふさせ給ふ、[J]中なこんはあふきにおとろきたまひて、やま〳〵てら〳〵のきそうかうそをしやうしくたしていろ〳〵

せの心ちかとためらひ給ひてやみぬへきに、十七日のゆふへより、なのめならす大事にならせ給ひて、十八日のあかつき終にはかなく成給ふ、御とし廿七、いまた三十にもならせ給はす、をしかるへき御よはひかなしやうしむしやうのならひとそよのつねにおもへともきのふのことなれは、あへなさかきりならせたまひけりしかれともいよ〳〵なむきに見えさせたまふ、十八日のよあかつき、むしやうのかせにさそはれて、むなしくならせたまひけり、おしかるへき御とし廿七、いまた三十にもなら せ給はす、をしかるへきに、なけきかなしみたまふことよのつねならすちうなこんとのもおなしみちにとなけきかなしみたまへとも、わかれのみちのならいはおもふになり給ひけれは、ゆくすゑはる〳〵の事なりしやうしむしやうのならひと申なから、あへなしとも申はかりはなし、ちうなこんおなしみちにとなけきたまへともかいそなき、ひめきみの御なけきたとゑんかたもなし、ちうなこん、おもひのやるかたなきにつけてもひめきみをかたときとはなしたてまつらす、へんしもはなれたまはす、なけきかなしみ給ひけ御とし廿七にてはかなくならせ給ひけりしやうしむしやうのならひそとおもひなからも、きのふけふのことなれは、あへなくおほしめし、御なけきかきりなし、ひめきみもたえかね、こかれかなしひ給ふこと中〳〵申せはをろかなり、ちうなこんとの、たゝおなしみちにとなけきかなしひ給ふ、せめての御なやかなしきかなや、しやうじむじやうの慣ひちからおよばぬ御事なり、中納言の御心のうちおしはかられて哀なり、御跡のいとなみさま〴〵とりおこなわせ給ふ、御形見にはひめぎみをあけくれまぼり給ふ

おなじみちにとかなしみ給へども。姫君の御ゆくゑおぼつかなくて。ちからをよばす。生死無常のならひ。とり辺野のほとりにをくり。御跡のいとなみさま〴〵とりおこなひ給ふ。御かたみには姫君を。明暮まほり給ふ。

さま〴〵の御いのりともありけれとも、さらにそのしるしもなくして、したいにおもらせ給ひて、おなしき十八日のあかつきにはつゐにかくれさせ給ふ、御とし廿八なり、なかかるへき御よはひか、しやうしむしやうのならひ、ちからおよはぬ御事とは申なから、中なこんの御心のうちをしはかられてあわれ

くおほしける　にかひなきこと　る　こりには、ひ　なり、御あと
中納言殿おな　なれは、御かた　めきみをあの　のいとなみさ
しみちにとか　みとも、ひめみ　かたみと、あ　まくにとり
なし給ふ、さ　やをこそ月日の　さゆふ御らん　おこなわせ給
れともわかれ　たつにしたかひ　してなくさひ　ふ、御かたみ
のみち、なけ　て、あひしもて　給ふ　には姫きみを
くともゆく事　なしたまひけり　　そまほり給ふ
もなけれとも
月日のたつに
も、其かたみ
に姫君にあさ
夕はなれもや
らせ給はす、
あひしもてな
し給ひけり

（第一段）　Aの対の屋姫の父親の名前が一致すること、Cのかなり長い句が存することによって、第五・六・七種の三本が一類をなすことは、前掲の和歌の場合と同様に明らかである。その他は、ABにおいては第一・二種本が一致し、この段全体の詞章もこの二本は非常に近いが、第二種本にはDの如く、第一・四・五・六・七種の諸本の一致する部分において、この本のみが異なるという特徴も認められる。第三種本はABをはじめとして、全体としても、他のどの本とも一致しない特異な本文を有している。第四種本は、そうじて言えば第一・二種本に近いが、Bの句は

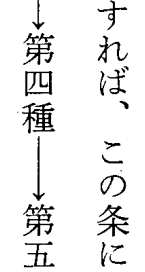
第五・六・七種の三本に一致していて、いわば両者の中間に位置するということができる。

（第二段）　この段も、第五・六・七種の三本の本文が特に近い関係を示しているが、ただ第六種本にはEの句が欠けている。このEは第三種本にもあり、また第四種本では第一段の末尾に見える。従って、第六種本はEを省略したものと考え得るが、第一・二種本にもEは欠けているので、一概にそうとも言い切れない疑問が残る。また第三種本にのみ存するFの句は増補の如くであるが、この句によってEの句の意味が明瞭になるので、これも簡単には判定しかねる。

（第三段）　この段の本文は、第一種と第四種、第五種と第六種とがそれぞれほぼ一致し、前者と後者とも、叙述の運び方はかなり近い。この段のみについて言えば、第一・四種の系統の本文をより整えたのが、第五・六種の本文であるとも見ることができよう。それに対して、第二・三種の二本は本文がやや離れている。また第七種はこの段全部を欠いているが、省略したものであることは間違いない。

（第四段）　この段は七本ともに出入異同がかなり甚しい。GHIJの句などはそれぞれの一本のみに見られる句である。しかし全体としてみれば、第四種本は第一種本をやや簡略にした形で、両者の文章はほぼ近い。また第五・六・七種の三本も、第六種本のI、第七種本のJの部分を除けば、残りの部分の詞章は大体一致している。この段について言えば、第六種本は第五種本の一部をIの如くに改め、第七種本は第五種本にJの部分を増補したものと考えると、最も自然に説明できるように思われる。

以上を総合すれば、この条に関しては諸本の関係を次のように示すことができようか。



第二種
第三種

（2）明石にて対の屋姫の姿が見えぬとて人々の騒ぐ条。

第一段

㈠大東急本

さるほとにあかしには、いつくしき上らふの波なみにいりぬとさはけは、いそきのりうつりてやかたのうちをさくり給へは、Aふすまのうちもあたゝかに、いまゝてもおはしけるとおほえて御めのとの女房なんと手こ

㈡学習院本

さるほとにあかしには、しやうほんなうみへ入とてさわきけれは、そつとのはいそきたいのやの御ふねにのりうつり、こゝかしこを見たまへとも、ひめきみは見ゑたまはす御しとねのうちをさくりたまへは、Aふすまのなかはあたゝかにいま〳〵ておは

㈢慶長本

さるほとにふねのうちには、ひめきみうせ給ふとて、めのとをはしめて、かす〳〵のにうはうたちさはきのゝしりけり、ちうなこん殿いそきたいの御ふねにのりうつり、しとねさくり給へは、Aふすまのとこもあたゝかに、いままておはしけるとおほえて、そつ殿女はう

㈣天理本

さるほとにあかしには、ひめきみうみへおち入給ひぬとさはけは、そつ殿いそきのりうつり、やかたのうちへいり、しとねさくり給へは、Aふすまのとこもあたゝかに、いままておはしけるとおほえて、そつ殿女はう

㈤慶応本

去程にあかしには、姫君海へ入給ぬとてさはぎければそつどの驚、いそき姫君の御船にのりうつり、やかたのうちをみ給へば、Aたゞいま迄おわしけるよとおぼえて、ふすまのとこもあたゝかなり、いそぎ女房たちを

㈥刊本

さるほどに明石には。上郎海へ入給ひぬとてさはぎけれは。そつ殿おどろき、急ひめきみの御舟に乗うつり。やかたの内を見給へは。Aたゝいま迄おはしけるとおぼえて。ふすまの床もあたゝかなり。いそぎ女房たちを

㈦天理別本

あかしには、上らふ女はうのうみへいりたまひぬとてさわきけれはそつとのいそきひめきみの御ふねにのりうつりて、やかたのうちを御らんすれはAふすまのとみもあたゝかにたゝいままてはおはしけるとおほへたり

とに火をとほして、姫君よとおめきさけぶこゑ、ありさま、たとへんかたなかりけり、されとも終に見え給はねは、はりまのかみすなはち百ちやうのあみをおろして、そのあたりを引けれと、此かたにきよくいも得給はす

しけるとおほしくて、御めのとにようほうたちてことにひをとほして、ひめきみよとなきかなしむこゑ〳〵ありさま、なにゝたとへんかたもなし、されともつゐひに見へたまはねは、はりまのかみひやくちやうのあみをおろし、そのあたりひきけれとも、さらに見へたまはす

つりかもかはらぬはいとゝおもひそましにけるにうはうたちはゝこせんにいたるまてひをともし、いつくをたつねたまへとも御ゆくへもしらすうせ給ふ、さるほとにはりまのかみ一ちやうのあみをおろして、あかしのうらをさかせとも見へ給はす

そのほか人〳〵てことにひをともし、おめきさけふありさま、たとへんかたもなかりけり、Bそつ殿とやかくやと御心のうちおほしめしわつらひ、さはき給ふも御ことはりとそ、人々おもひあへりけり、たつね申せともつゐに見つけ申さねは、あみを百ちやういれてそのあたりをひきけれとも、さらにみえたまはおこして、姫君はいかに、まつ火をかきたてよとありけれは、めのとにうばうたちみな〳〵あわてやう〳〵しそく一つもちきたり、かなたこなたとたつねけれどもみへ給はねば、一度にわつとなきあげけれは、そのこゑ何にたとへんかたもなし、はりまのかみあみを百ちやうおろし、そのあたりをひかせけれど

おこし。姫君はいかに。まづともしびをかきたてよと有けれは。めのと女房たち。皆々あはてまとひやう〳〵しそく一つもち来て。かなたこなたと尋けれ共見え給はねば。一度にわつとなきあげけれは。そのこゑ何にたとへんかたもなし。播磨守あみを百ちやうおろし。其あたりをひかせけれどもしがいもなし御めのとのねうはう、そのほかの人〳〵てことにひをとほして、おめきさふこゑ〳〵たとへんかたそなかりける、つゐに見えさせたまはねは、はりまのかみすなはち百よちやうのあみをおろして、あたりをひかせられけれとも見えたまはす

師殿おほつかなさのあまりに、四位の少将淀にてとゝむべきよしひしかとも、ぐしてくたりをぬすみてや有らんと、いそきみやこへはや馬をたてられけり、少将きゝもあへすみすをあけて、かくときゝつるより物もの給はす、きも心もまとひ、なみたせきあへす、その夜は姫君のそつとのあまりのふしきさに、あはれしいのしようく〳〵かよとにてとゝむへしといふしかともかなうましきとてくしてくたりしほうにぬすみてあるらんとていそきみやこへはやむまをこそたてられける、しやうく〳〵きゝもあへす、むちをあけ、馬をはやめてをわしつゝ、かくときゝ給ふより物をものたまはす、きもこゝろもまとすいしんそとりたまふらんとてなきふしたまふちうなこん殿あまりにふしところとやおほしけん、はりはまのしよしやにこもりて、おこなひすましておはしける

す

そつ殿あまりのかなしさにしゐのせうしやういろ〳〵とゝむへきよしつねにいひしかとも、くしてくたりけるをぬすみてやあるらんとて、いそきみやこへむまをたてられけるせうしやうきゝもあへす、むちをあけてはせくたり御らんすれとも めもくれ心もつき、なみたしきりにおちも見えさせ給ず

そつどのあまりのかなしさに、四位の少将にやくそくして、よどまでくだりとゞめしをきゝいれず、ぐしてくだりたり、もしぬすみてもやあるらんとて、いそぎ都へ人をのぼせられける、さる事なければ、少将どのは此事をきゝ給ひ、せんかたなさのあまりに、みとりのたぶさを切

そつ殿の給ひけるは。少将淀まで来てとゞめしをきかずして、つれて下りたれば。もしぬすみとりてやのぼるらんとて。急都へ人を上せらる。少将かくと聞てりうていこがれ給ひて。みどりのかみをきり。御年廿五と申にとんせい修行に出給ふ。

そつとのあまりのかなしさに、しゐのせうしやうにやくそくしたりしにより、よとまてきたりてとゝむへきよしやうく〳〵にいゝしかとも、くしてくたりつるに、もしやぬすみてありけんとて、いそきみやこへ人をそのほせられける、さることもなけれは、せうしやうとのこの事をき

おち給ひぬといふなみのうへをまほり給ひて、みきはの松のしたにてよをあかす夜もほの〳〵と成しかは、たえぬおもひのかなしさにみとりたぶさおしきりて、御とし廿五、いまた三十にもならせ給はねば、をしかるへきよはひかな

い、なみたもせきあへす、そのよはひめきみの入せたまひたるといふところのなみのうへをまほりたまひて、夜をあかさせ給ふ、ほの〳〵とあかしかわ、たへぬおもひのかなしさに、みとりのたふさをおしきり給ふ、をしかるへき御よわひ、廿五と申におしやうしんのおこし給ふ、あわれなる御こゝろのうち、なにたとゑんかたもなし

けれは、そのよはひめきみのり□ひけるふねにの□まふ、よもほの〳〵とあけしかは、おもひのせんかたなきまゝに、みとりのたふさをそりたまふ、御とし廿五、いまた卅にさへたらすおしかるへきよはひかな

給ひて、御年廿五と申に、いまだあいみぬきたの御かたゆへに、しよしやの山へぞのぼられけるをば、ためしすくなふやさしき事にぞ申ける

ゝたまひて、せんかたなさのあまりに、みとりのたふさおしきり給ひて、御とし廿五にて、あひみぬきたの御かたゆへに御やまへそのほられける、ためしすくなくやさしきことにそ申あへり

（第一段）第三種本のみは本文全体に違いが多いが、他の六本は、第四種本にBの如き独自の句があるのを除いて、類似している。ただその中でも、第五・六種の二本は語句の末までほとんど一致している上、Aの部分のように、この二本のみが他の五本と異なる対照的な特徴を有している。すなわち、ここでは第七種本が第一・二・四種本と一類をなしていて、いままでに見てきた諸本の関係とはやや異なった現象を呈している。

（第二段）この段は本によって叙述内容に違いがある。すなわち第五・六・七種の三本には、少将が姫の変事を聞いて明石へ下ることが叙べられていない。なお第一種の大東急本も、少将の明石へ下ることを記した文がないが、「その夜は姫君のおち給ひぬといふなみのうへをまほり給ひて、みきはの松のしたにてよをあかす」という一文がある所からみて、前に誤脱のあることが明らかである。大東急本のCの句を、同じ第一種の続類従本は「こまにぶちをあげておはして」古活字本は「むちをあけておはして」としていて、いずれも明石へ下ったことを記している。また第三種本は少将のことを全く記さず、父の中納言が書写山に籠ったと叙べているが、その後は諸本と同様に中納言の筑紫下りに続いているので、これも大きな誤脱があるものと思われる。そこで一応第三種本は除外しても、この段は筋の上で、第一・二・四種と第五・六・七種との二類に分かれてくる。更に文章の上からみると、前者では第一・四種の二本はおおよそ類似し、第二種本はやや叙述の詳しい所がある。後者では第五・七種の二本はほとんど一致するが、第六種本はかなり簡略で、これは第五・七種本の形を縮めたものと見ることができる。

（3）中納言都上りの途中、明石の浦にて対の屋姫の第三年を営む条。

	(一)大東急本	(二)学習院本	(三)慶長本	(四)天理本	(五)慶応本	(六)刊本	(七)天理別本
第一段	さるほとにそ	さるほとにそつ	そつとのもうさ	さるほとにそ	さてそつどの	扨そつ殿は三	そつとのは三

つ殿三とせもすきけれは、京へのほり給ひけり、第三ねんをはあかしにてそとふらひ給ひけるをのへたかさこのおきをこきゆくとて見給へは、大なるはたそ見えける、四ゐの少将のかいのほういんをしやうして、しやうこんのだうぢやうをこしらへて、八ぢくのめうきやうをかゝれける、そのはたとそ申ける

殿三とせもすきけれは、きやうゐのほり給ふ、たい三ねんをはあかしにてそとふらい給ふ、をのゐたかさこのをきをこきゆくとて見たまへは大きなるはたそ見へける、これはいかにとたつねたまへは、あれはしいのしやうくしよしやより出させたまい、たいのやのたい三ねん御ついせんに、そまはんちやうをあつめてこんくるりにたうちやうをたてす申、

よりのほらせ給ふ、あかしのうらにてたいのきみの御ふつちをしたまふ、おのへたかさこのうらをとをるとて御らんすれは、おゝきなるはた見へにける、いかなるはたやらんとたつねたまへは、あれにせうしやうにうたうとのゝたつときそうをしやうし、いへにほつけのによほうきやうをかゝせ給ふ、そのはたなりと申、たいのきみはおちいりたまふといゝけ

つ殿三ねんもすきけれは、みやこへのほりたまひぬ、たい三ねんをはあかしにていとなみ給ふへきとて、をのくたかさこのおきなかをとをるとて見給へは、大なるはたそみえける、四ゐのせうしやう上人をかたらひて、しやうこんたうをこしらへて、八ぢくのによほうきやうをかゝれけり、あはれたいのや

は第三年をも明石のうらにてと思召、いそぎのほらせ給ひけり、尾上高砂の沖をすぐるに、うみのなかに大なるはたそ見えけり、あれは何ばたそとひ給へば、四位の少将殿ちかきあたりの上人をかたらいて、粧金（しやうこんの）道場をこしらへて、八軸の法華経をかゝれけるみせばたとそ申けるたいのやをば此あたりへそ

とせにも成ぬれは。姫君の第三年をも明石の浦にてと。急のぼらせたまひけり。尾上高砂の沖をとをらせ給へは。海中に大きなるはたそ見えける。あれは何ばたぞととひ給へは。四位の少将ちかきあたりの上人たちをしやうじて。しやうごむだうぢやうをこしらへて。八ぢくのほけきやうをかゝれけるみせばたとそ申けるたいのやをは

ねんもすきけれは、みやこへのほり給ひけり、おのゐたかさこのおきをこき給ふに、うみの中に大きなるはたそ見えにけり、しゐのせうしやうにうたう殿の、きんりのしやう人たちをしやうして、しやうこんたうちやうをこしらへて、八ちくのめうほつけきやうをかゝれけるそのはたとそ申けるたいのやをは

たいのやをち入給ひたりしうみの中へそほうなうせさせ給ひける、なみにもぬるゝ袖のうへ、さらぬたによそのたもとまてしほりそかねける

ほけきやうをかきとらふらひ、のちうせ給ふなみのうへにうかめんとの御ことにて候と申けれは

るへんにて、おこなひたまひける、そのほとのしきあわれともいふもおろかなり、すみそめの御そてのかはくまもなくてとふらひたまへは、しらぬ人まてもみなそてをしほりける

のこゝほとへおち入給ふそやとて、ほうなふし給ひけり、なみにもまるゝ袖のうへ、さらぬたによそのそてまてしほりかねける

しづめ申つらんとおぼしめし、うみのなかへ御ほうらくし給ける

そつどのもおぼしめしあたりて、はづかしながら御対面有ければ、少将見るより涙はらく〳〵とながし、恋しき人の形見ぞと思ひ、つく〳〵と詠(ながめ)てお

そ申ける。たいのや此辺へこそしづませ給ふらんとて海の中へ御ほうらくし給へりける。

たのあたりへこそしつめつらんとおほしめして、うみの中へ御ほうらくし給へりなみにもぬるゝそてのうへよそのたもとまてしほりかねたるふせいなり

そつ殿さてはとてはづかしながら。御たいめんありけれは。少将みるより涙はらく〳〵とながし。こひしき人のかたみと思ひ。つく〳〵とながめておはし

わします、そつどの宣ひけるは、筑紫へくだりし時、さまぐ姫を御とゞめありしに、つれて下りし事、かゝるなんにあわんためかや今さら後悔千万なり、よしそれとても前世の事、帰らさる身とは思へども、はかなき親のならひにて候、姫うせにし時、とにもかくにもならばやとちたび百たびおもひ候へどの給ひけるは。つくしへくだりし時。さまぐ姫を御とめありしに。つれて下りし事、かゝるなんにあはんためかや。今さらこうくわいせんばんなり。よしそれとても前世の事、帰らざる身とは思へども。はかなき親のまよひにて候。姫うせにし時、とにもかくにもならばやと。千たびもゝた

も、我さへむなしく成ならば、草ばのかけにて姫がおもひ、重かうへのさよ衣、かさねてうきめを三瀬川にしづみはてんもかなしければ、せめては残り、跡のいとなみをもし侍らんと、かいなき此身はとゞまりぬとの給へば、少将はたゝなくより外の事ましまさず

び思ひしかども。我さへむなしく成ならは。くさ葉のかけにて姫かおもひ。おもきがうへのさよ衣。かさねてうき目を三瀬川に。しづみはてんもかなしけれは。せめてのこり跡のいとなみし侍らんと。かいなき此身はとゞまりぬとの給へは。少将はたゞなくより外の事ましまさす。

第三段

そつ殿御けう　いまたあひ見ぬ　ちうなこん殿も　そつ殿も御けう　そつどの御孝養様々し給ふ　そつとのゝ御けふやうはたやうもたゝな　なかなるに、かさま〳〵御とふ　うやうのためうやう、さま

らすおはしけり、いまたあひみぬきみのかたのゆへにかへし給ひける、四ゐの少将の心のうちこそあはれなれ

くねんころにとらひ給ふことありかたさよと、そつとのゝ御心いとゝあわれさかきりなし

らひしたまへとも、いまたにうはうきやうをかきたまはぬに、いまたうちとけそひもしたまはす御なか、かやうに御さまをやつし、御けうやうをおもひいりてしたまう事、まことにむかしにもまれなる御こゝろのうち、あはれにおほへはんへるなり

さてそつとのはみやこゐのほらせたまふか、わかれしあとさへなこりおしくおほしめし、又いつのよにかは見

におはしけれは、いまたちきりこめさるに、せうしやうのにうたうとのこそやさしけれ

は理りなり、少将はいまだあいみぬ御かた故に、かく訪はせ給ふ、哀なりし御事ども、Bよその袂もしぼりかねたる有様なり

〳〵し給へ共。少将はいまだあひみぬ御かたゆへに。かくとふらはせ給ふ、あはれなりし御事共。Bよそのたもともしぼりかねたるありさまなり。

人ならすおはしけれとも、これはいまたせうしやうとのは見ぬきたのかたゆへにかやうにつとめられけるこそ返〳〵もやさしけれ

第四段

さて少将入道殿はそつ殿にいとま申てこきもとる、つくしへのときは、Cのほりにともちきらね

さてせうしやうにうたうはそつ殿にいとまこい申てかへり給ふつくしゐのときは、Cは上にともちきり給ひしに、

そつ殿にいとま申こきもとり、つくしのときは、Cのほりのときをもちきりしに、こん日はなれ

扨御いとまこひ給ひて、立別れ給ひけりつくしへ御下りの時は、Cのぼりの時ぞとちぎり給ひし

扨いとまごひして立別れ給ふ。つくしへ御くだりの時は。Cのぼりの時とちぎりしに、けふはな

さてそつとのに御いとまこひ給いてかへり給ひけり、つくしへの御ときは、Cのほりたまはん御

は、こひしき人のかたみとたかひに思ふにこそことはりなれ、をつるなみたとかいのしつくもわきかねて、いまをかきりとおもへは、りんゑしやうじのふかき、このたひなかくへたてぬとこきわかれ給ひけり、少将はなをしよしやの山へそのほられける

いまはいつともさためねは、こひしき人のかたみと、たかいにそてをしほりつゝ、しやうしやうはまたしよしやの山ゑそのほられける

るへきとかへりみたまふこゝろのうち、さこそはおほしけんとおもひやるさへあはれなれ、御くたりのとき、のほりのとき、なきあとなりとみへ御なくさまんとまちつるにいまのほりてのち、又いつか見るへきとて、ふしたまふ事こそまことにあはれなり、御ありさまみまいらせける人はみな、身におもひのある人もなきものもみなそてしほりける、せうしやなむのちは、又いつれともちきらぬは、こひしき人のかたみにも、たかひにおもふことなる、おつるなみたもかひのしつくもわきかねて、今をかきりとおもへはなこりおしさはかきりなし四ゑのせうしやうなく〳〵こきわかれ給ひけり、それよりしよしやさむにのほり給ひけり

に、けふはなれて其のちは又いつの世ともちぎらねばこひしき人のかたみのいとまごひ、たがひにぬるゝ袂かな、おつるなみだもかいのしづくもわきかねたる風情なり、今をかぎりとおもへば、りんゑしやうじの道の故郷を此たびながくへだてぬる心地して、こきわかれ給ひける、少将はしよしやの山へぞの

れての其後は。又いつの世にめぐりあふべき。こひしき人の形見のいとま。たがひにぬるゝたもとかな。おつる涙もかいのしづくも。わきまへかねたるふぜいなり。今をかぎりとおもへは。りんゑしやうじの道の古郷を此たびながくへだてぬる心ちして。うきて別れ給ひけり。少将は書写山へのぼり給ふ。

ときとこそちきり給ひしそけふはなれてよりのちは、またいつともさためねは、こひしき人のかたみのいとまをたかいにおもひ給ふもことはりなりおつるなみたもかひのしつくもわきかねて、いまをかきりとおもへは、りんゑしやうしのふるさとをこのたひなかくやへたてぬると、こきわかれけるそあわれな

うにうとうはし
よしやの山への
ほり給ひて、い
よ〳〵おこなひ
すましておはし
ける

ほり給ふ

る、せうしや
うはしよしや
の山へのほり
給ふ

（第一段）第一種本と第四種本とはほとんど一致する。第二種本も第一種本と前半は語句の末に至るまできわめて似ているが、後半は急に離れてくる。第三種本は、叙述内容は変らないが、文章は他のいずれとも異なる。第五・六・七種の三本は、ここでも一類をなしていて、しかもその本文の大筋は、第一・四種本と近い。ただここで注意をひくのは、第一・四種本の末尾にあるAの句が、第五・六・七種の三本のうちでは、第七種本のみに見えることである。従って、第一・四種本が第五・六・七種本より古い形であるという前提に立てば、

第一・四種――第七種――第五・六種

の順に本文が継承されたという過程を想像せしめる。そして第二種本と第三種本とは、この流れからははずれる傍系に位置するということになる。

（第二段）この段は第五・六種の二本のみにあって、しかも文章も全く同じと言ってよい。この中納言と、出家した少将との対面の記事は、この後の第四段のはじめに、諸本とも少将が中納言に暇乞いをして立別れたと記していることに照すと、ある方が叙述の形が整ってくる。おそらく第五・六種本が増補したのであろうと思われる。すなわち、この段も第一段と同じ諸本の関係を考えさせる。

（第三段）第二・三種本が異なる外は、おおよそ類似した本文であるが、ここも第一・二段に引き続き、第五・六種の二本は全く一致する。特にこの二本の末尾にあるBの句は、他の諸本には欠けている。この句は第一段末のAの句と一部類似していて、Aが第五・六種本では省かれていることと関係がありそうである。つまり第五・六種本は、第二段の増補に伴なって、Aをこの段の末に移したのがBとなったのではないかと考えられる訳である。

（第四段）第二・三種本は、簡略と詳密の相違はあるが、どちらも他の諸本とは別系の本文を有している。第一種本は、Cの句が他本と較べて著しく短いが、この形では前後との意味の続きが悪いので、おそらく誤脱ではないかと思われる。しかし第一種に属する本は、大東急本の外もみなこの形である。その外、この段で注意をひくのは、Dの句が第一・五・六・七種本にあって、第四種本に欠けていることである。そしてDの詞章は、第一種本と第七種本とが近い。従って、第一・二段において想定した諸本の系譜の中で、第四種本は傍系に位置するとしなければならない。すなわち、

第一種 ─┬─ 第七種 ── 第五・六種
　　└─ 第四種

の如き形になってくる。

（4）姫君の住む岩屋を覗き見る条。

	㈠大東急本	㈡学習院本	㈢慶長本	㈣天理本	㈤慶応本	㈥刊　本	㈦天理別本
第一段	そのあたりを見れは、きた	そのあたりを見れは、きたとに	みなみのかたに はしちくのさほ	あたりをみれは、きたとみ	いわやのうちをよく〳〵御	いわやの内を能々見給へは。	いわやをよく〳〵御らんす

とにしとはいはやなり、南の山きはにしちくのさほをつり、うらやまふきの十三うはかさね七もよきのうちき、くれなゐの御はかまくしてかけられたり

第二段

岩屋のかたには、ようもんほうもんをかけられたり、大りのとうくわてんのほそとの〻、せいりやうてんのびやうふの心より、なをうつくしくか〻

しとはいわなりみなみのやまのきわ、しちくのさをつくり、うらやまふきの十三、うわかさね七、もへきのうちきぬとくれなひの御はかまとりくしてかけられたり

たいりのとうくわうてんほそとの、せいりやうてんの御たてもの〻しゆせきより、なをいつくしくけられたり、にしのはうにはらひかうのあみたを三そんかけたてまつり

〻つり、山ふきの十二かさねにあやの一ゑに、くれなひのはかまをかけておかれたり

いはやのはしらには、□のようもんしるきかた、こ〻ろもことはもおよはす、ひともしにか〻れたり、せいやうてんのか〻れたるよりいつくしくそ見えたり、らひかう

なみとはいはやなるに、さほをつり、うらやまふきの十三のうはかさね、くれなゐの御はかまそへてかけをかれたり

らんずれは、きたとにしとはいわやなりみなみのかたにさほ〻つりて、うらやまぶきの十三にうはがさね、くれないのはかまをそへてかけられたり

いわのうへには来迎のあみだの三尊すみゑにか〻れたり、御まへにはあさの糸にて四季のはなをむすびてたてられたり、こんでいの法花経、みなす

北と西は岩屋なり。南の方にさほをつり。うら山吹の十三に。うはがさね、くれなゐの袴そへてかけられたり。

岩の上には来迎のあみだの三尊すみ絵にか〻れたり。御前にはあさの糸にて四季の花をむすひてたてられたり。こんでいの法花経、皆すいしやうの

れは、きたにしはいわやなり、みなみのかたはさほをつりて、うらやまふきの十三に、うはかさねのくれなひのはかまそへてかけられたり

いわやのうへには、ようもんかゝれたり

れたり、にしのかたには来迎のあみたの三そんをかけ奉りて、御前には竹の花たてに、梅さくら、やまふきとこなつ、かきつはた、きゝやう、をみなへし、ませのうちのしらきくいろ〳〵の花とも、あさのいとにてむすひたるをたけの花たてに立られけるほんそんの御まへのつくゑには、こんていの御きやうて、御まへにはたけのはなたてに、しきひ一ゑたおりたて、あさのいとにて、ときならねとも御てすさみかと見へて、うめさくら、あききくのはないろ〳〵にくゝりてそ、しようきやうにすいしやうのしゆすとりそへてかうろにはひをきすましてそ見へけり

のあみた三そんこころもおよはぬをかけたり、御まへにはたけのふしのはなたてに、はるのはなより、なつあきふゆにいたるまて、いろ〳〵をあけのいとにてむすひてたてられたり、きくのこたちこゝろはへ、めもおとろかすはかりにて、むすひておかれたり、ほそんの御まへに、くわんをんきやうにしゆすをとりそへておかれたり

いしやうのじゆず置給へりあるかなきかのうすずみにて、ようもんはうもん、きやうろんかゝれたり、かき残せる字もなし、すみゑおかしげにいろ〳〵かゝれたり、こうきでんのほそどのかゝれし、せいりやうでんのびやうぶも、かくやとおもひしられたり

じゆずも置給へり。あるかなきかのうすゝみにて、ようもん法文、きやうろんかゝれたり。かき残せるしもなし。墨絵おかしけに色々かゝれたるふぜい。こうき殿のほそ殿のかゝれし。せいりやうでんの屏風もかくやと思ひしられたり。

をおかれたり
みなすいしや
うのじゆすあ
り

第三段

是を見給ふに
中将殿ふしき
にそおほしめ
す、さこんの
せう御らんす
るよと申せは
うちみつるよ
りなとやらん
ゆかしくて、
A一はちすの身
とそおもふな
りとおほせら
れける

これを見たまふ
に、ちうしやう
殿ふしきにおほ
しめす、さへも
んのせうはよく
御らんしつるか
と申せは、見つ
るな、うちみつ
るよりもなとや
らん、この人を
A ひとはちすの身
とおもふなりと
おほせられける

ふしきなる事の
ありさまかなと
おほしめして、
御らんするに、
六いのしん、さ
へもんもふしき
におもひて、御
てをひいて、御
らんしさせ給ふ
かと申は、見る
事あり、むねう
ちさはき、こゝ
ろもさたかなら
すとの給ふ、御
ことはりとおも
ひける

中しやうふし
きにおほしめ
し、さこんの
せうにおほせ
ありけるは、
この人ゆかし
くおほゆる、
A一つはちすの
身ともならは
やとおもふな
りとありけり

中将ふしぎの
事に思召ける
に、さこんの
ぜう申けるは
よく御らんじ
候かと申せば
よくみてはべ
るなり、かゝ
るふしぎなし
うちみるより
なにとやらん
むねうちさわ
ぎ、あわれ此
人とA ひとつは
ちすとならば
やと思ふなり
との給へば

中将ふしぎに
おぼしめす。
左近の丞申け
るは。よく御
らんじつるか
と申せは。よ
くく見つる
なり。此人を
見るよりむね
うちさはぎ、
あはれA一つ蓮
とも生ばやと
心ちもうか
くしう成ぞ
や。

中しやうふし
きのことにお
ほしめす、さ
こんのせう申
やう、よく御
らんし候や、
かゝるふしき
のことなし。
うち見るかも
この人のゆか
しくおもふな
りとの給へは

第四段

さて姫君はか
るもみなにな
ひめきみはかる
もゝみなになり
もくつみなにな
りけれは、ひめ
ひもきえにけ
り、B なこりな

りけれは、さしくへで火もきえにけり、

B其時人はひとことになこりなやと仰られて、よりふし給へは

第五段

そのとき中将殿は、いさやうちへ入なんとの給へは、さこんのせう申けるは、御覧じてうちすてんとおほさは、入らせ給へ、しうの人と覚しめされは、よるは帰らせ給へと申せは、誠にさ有へしとてかけれは、ひもきへにけり、Bそのとき人のなこりなしやとおほせられて、よりふし給ふ

そのときさへもんのせうも、御ことわりとそ申ける、このことはにちからをゑちうしやうとのは、いさやうちへいりなんとのたまひければ、さへもんのせう申やう、御らんしてすてられんとおほしめし候はゝ、ママいまはかへらせたまへときみ又もたき給ひ候はて、Bなこりとやとて、うちふしたまふ

ちうしやう殿はいわやのうちへいらんとおほせありけれは、六いのしん、さへもん申けるは、たゝかりそめにてうちすてんとおほしめし候はゝ御いり候へ、またかりみやこへもいさなひ参らせぬとおほしめし候はゝ、こよひは御かへりやとおほせられ、ふし給ひけり

そのとき中しやう、うちへいらんとの給へは、さこんのせう申けるは、御らむしてうちすてんとおほしめさはいらせ給へもし□くすゑまてもとおほしめさは、こよひはかへり給へと申せはまことにさあ

左近の丞申けるは、御らんじてうちすてんとおぼしめさば、いらせ給へ、もし始終の事ども思しめさば、いまはまづ御かへり候へと申されければ、けにもとて御かへりありける

いざや内へいらむとの給へは。御らんじてうちすてんとおぼしめさば、いらせ給へ。もししうの人におぼしめさば。まづたゝいまは帰らせ給ひて。あけてともかくも御はからい候へと申せば。けにもと

さこんのせう申けるは、御らんしてたたうちすてたまはんには、いまいわやへいらせ給へ、もしまたしゝうの御事ともおほしめし候はゝ、まつ御かへり候て、あすは御いて候へと申けれは、いまはけ

へり給ひぬ　申せは、まことさるへしとてかへりたまいぬ　候て、ことのさまをよくく御しあん候へと申けれは、さらは御かへりあり給ひて　るへしとて、かへり給ひけり　て帰り給ふ。にもとおほしめして、御かへりありけり

（第一段）第三種本が前半を欠いて短かくなっている外はさして変らないが、なおこまかに見れば、第一・二種本と、第五・六・七種本とがそれぞれ一致し、第四種本は後者の方にやや近い。

（第二段）第四種本がこの段全部を欠くのは、前条と同じく傍系の本として理解することができるが、第七種本の非常に簡略な本文の形態は、前条で考えた如き諸本の系譜にはあてはまらない。本文の全く一致する第五・六種本を第一種本と比較すると、叙述の順序は前後しているが、細部の語句には類似している所が多い所から見て、第五・六種本は第一種本の如き本文を改めて、整った形に直したもののように感ぜられる。しかし、それが第七種本を介したものとは解釈できないのである。

（第三段）この段は第三種本を除いては、同じ本文の系列の中にあるが、第七種本のみはAの句を欠いている。ここでも第七種本が、第五・六種本の元とは言い得ないのである。

（第四段）第一・二・三・四種本と第五・六・七種本とが、はっきりと対照をなしている。前者の四本の中にあっては、Bの句にそれぞれ異同が見られるが、それを対比してみると、第一・二種本の形が意味は明確に解し得ないけれども、元のように思われる。それは第一種本の中でも、続類従本と古活字本は、このBの部分が次のようになって

いる。

その時人ことに名残なやとおほせられてよりふし給へば　（続類従本）

ひめきみのすがたもみえわかず　（古活字本）

続類従本は大東急本の「人は」の二字を欠くだけでほとんど変らないが、古活字本は全く別の事を記している。また第一種本に拠ったと推定される第八種の国会本は

なこりなやとひとりことをおほせられてそふし給ふ

としていて、大東急本や続類従本で意味のはっきりしない「ひとことに」の句を合理化した跡が認められる。つまりこのBの句は、第一種の中でも大東急本の如き形が元で、その意味を通そうとして、諸本が種々に改めたのではないかと考えられるのである。

（第五段）　第一種本と第四種本とはほとんど一致する。第二種本も一部の誤脱を除いては第一種本に近い。第五・六・七種本はやはり一類をなしているが、細部の異同は、第五種と第六種、第五種と第七種、第六種と第七種という風に三様にいりくんでいる。しかし三本の関係に何らかの想定をなし得るほど重要な異同は見出せない。

（5）　中将が対の屋姫を伴なって都へ上る条。

第一段

㈠大東急本	㈡学習院本	㈢慶長本	㈣天理本	㈤慶応本	㈥刊　本	㈦天理別本
すてによとへ	すてによとへも	かくてよとへつ	御ふねすてに	扨御船よどへ	月日にせきも	さてとかくす
つきにけれは	つかせたまへは	きたまひけり、	よとにそつき	つきければ、	りすはらす。	きゆくほとに
御くるまま い	御むかいのくる	御むかひのくる	にける、御む	御迎のくるま	とかくしづら	よとへつき給

りたり、A ゐ中女房は車にはならはしとてむまにそのせ奉りけり、すこしもたまり給はす、さきやうのごんの大夫、六ゐのしん、さこんのせう、ひたのせんしなんど御馬そひに参りけり、されともたまり給はねは、こがといふ所にて、御くるまをたてゝ姫君をのせ奉る、B 御うしをとろきて、御くるまとはするやままいりて、ちうしやうめされけり、A いなかのにようほうにてくるまはならわせたまはしとてさきやうのこんの大ふ、六いのしん、さへもんのほう、ひたのせんしなとそいたてまつりて、御むにめさせたてまつれは、たまりたまはす、こかにてさらは御くるまにのせまいらせてみよとて、御くるまをたてゝ姫君をのせたてまつりけり、B 御うしをとろきて、ま参りけり、A いなかの人はよもくるまにはのりたまはすとて、御むまにのせまいらせける、御むまそへには、六いのしん、さへもんのせう、ひたりのせんしそまいりける、むまにすこしもたまりへす、いかゝせん、さらはくるまにのせたてまつるへきとて、のせ申ける、B うしかいくるまをとはせけれは、ちうしやう殿はあやなくおほしめしけるに、すこしもおかひのくるまとてまいりたり、A いかなる女はうにておはすらん、くるまにならはぬ人にてやあるらんとて、御こしをまいらせける、御ともにさきやうのたゆふ、六ゐのしん、さこんのせうひたのせんしそまいられける、これよりこかといふところにて、みやこいりは御くるましてそありける、B さうしき、うし参りけり、A さすが田舎女房は車にならい給はじとて、御馬をぞ参らせけり、御ともには、さきやうの大六、六ゐのしん、ひたのぜんじまいりけり、御むまにはすこしもたまり給はねば、こがといふ所より御車にのせ奉り、B ざうしき牛飼くるまをとばせひ行程に。淀へぞ付せ給ひける。人々我もく〳〵と御迎に参る。A 田舎女房は車にはならはじとて。御馬にのせ給ふ。御供には左京大夫、六位のしん、左近の丞、せんぢんにそ参りける。御馬にはすこしもたまり給はねば。こかと云所にて御車にのせ奉りて。ひぬ、御むかへのくるまゝいりけり、御ともにはさきやうの大ふ、六ゐのしん、さこんのせうひたのせんしそまいりける御むまにはすこしもたまりたまはねは、こかといふところより、姫きみをは御くるまにのせたてまつり、B としきうしかいくるまをこはせ

うになと有けれ共、さるへきしきの人なれは、すこしもをとろくけしきもなし

御くるまあらけなくとひけれとも、さるへきみやの人なれは、すこしもおとろきたまはす

とろきたまはすあやしとおほしける

かひよりくるまをとはせ、うしをはやむれとも、さある人なれは、おとろき給ふけしきもさらになし

第二段

つくりみちをのほりに、らいせんもんへそいりける、いなりのかたふしおかみ、はしのもとにて姫君車の物見をかきあけて、いなりのかたにむかひてねんしゆして、とをしなくもあやしくそ覚る

つくりみちをのほりに、らいせかとへそやりいれける、いなりのやしろふしをかみ、のもとにて、ひめきみ御くるまの物見あけて、いなりのほうをふしをかみ、ねんしゆしてとほらせたまひけるも、あやしくそをほへける

つくりみちをのほりに、らいせんもんへいりけるに、ひめきみくるまの物みあけさせ給ひて、いなりのかたをふしおかみ、ねんしゆしたまひけれは、あゝやさしくめしける

作道(さくたう)をらせい門へとはやめける。姫君いなりをふしおがみ。御前にて車の物見をあげてねんじゆし給ふ。人々あやしくぞぼえける。

ひろみちをのほりに、てんか御所へ入奉るへかりけるそれに大ふ殿の姫君を此三とせむかへまいらせ給ひけり、ゑもんのせうと申さふらひのいゑをしつらひて入奉りぬ

ひろこうちをのほりに、てんかの御ところゑそやりいれぬへかりしを、それには大しんとのゝひめきみをこの三とせむかへまいらせさせ給ひけれは、まつさへもんのてうかしゆくしよへしつらいて入たてまつる

すくにしよしやへいれまいらせたくおほしけれとも、うたひしんの御むすめをむかへ参らせてこの三とせおはしましけれは、ひたりのせんしかやとへそいれまいらせたまふひたりのせんしさへもんのせうといふさならひのしゆくしよへかへり給ひけり

大みやをのほりに、てんかの御しよへやりぬへけれとも、それしは大しん殿のひめきみをみとせかあひたむかへましまさねは、はゝかりて、ひたのせんしかもとをにはかにこしらへていらせ給ふ、ゑもんのせうといふさふらひのいへにいらせ給ふ

ひろかうぢをのほりに、でんがの御所へやりぬべけれども、それには大臣とのゝひめぎみ此三年むかへまいらせしませば、ひだのせ、からせ給ひて、ひだのせんじか家に入たてまつるべきとありければ、せんじは右エ門督といふさふらいの家に移りて、わかいへをばゆづりまいらせけり

扨天下の御前へ入奉るべけれ共。それには大臣殿の姫君。此三年むかへ置ましませば。ひだのぜんじか家に入奉るべきと有ければ。ぜんしはゑもんのかみといふ侍の家にうつりて。我家をはゆづりまいらせけり。

ひろこうちをのほりに、てんかの御しよへやりぬへけれとも、それには大臣とのゝひめきみこの三とせむかへまいらせたまへは、はゝかりにおほしめして、ひたのせんしかいへにいらせ給ひけり、ゑもんのかみといふさふらいのいゑにうつりて、わかところをあけ申けり

（第一段）　AとBの句に諸本間の異同が見られる。Aの場合、第四種本の「いかなる女はう」は他の諸本の「田舎女房」を読み誤ったか、故意に改めたかであろう。第七種本がこの句を欠いているのには、前条の第二・三段におけるのと同じ性質が認められる。Bの場合は、第五・七種本は第一・二・三・四種本を簡略にした形であるが、特に第四種本のはじめの句を採ったように見える。ここで第六種本がこの句を欠いていることは、この本が最も近い関係をもつ第五種本より後出であることを考えさせる。

（第二段）　ここは、第六種本のみが第一・二・三種本と一致する記事を有していて、今までに見てきた諸本の関係とまた異なった現象を呈している。すなわち、第五・六・七種本の中にあっては、第六種本が最も古い形をのこしているとしなくてはならなくなり、この条の第一段のBの句についての結論とは逆になってくる。

（第三段）　Cの部分を見ると、第一・二種本と、第三種以下の五本とに分かれてくる。前者は、明石から連れ上った対の屋姫を右衛門尉の家に入れたとし、後者は飛騨の前司の家に入れ、飛騨の前司は右衛門尉（督）の家に移ったと叙べている。一見後者の如き形が元のようにも考えられるが、ここで飛騨の前司の転居先まで書く必要はなさそうである。第一・二種本では、右衛門尉という人物が突然出てくるので、第三種本以下は、前から中将の供として名の出てくる飛騨の前司に改め、なお右衛門尉という名も残そうとして、このような書き方になったと考えても良いのではないか。今一つここで問題となるのは第三種本の位置である。これまでの例では、第三種本は第一・二種本と同列にありながら、本文はその二本とは非常に離れた傍系の本であって、第四種本以下とは直接の交渉が認められなかった。しかし、このCの句の場合には、第三種本と第四種本以下とを何らかの形で関係づけなければならない事実が見られるのである。

以上に掲げた五個所の例文によって、七種の伝本の本文の間に見られる異同の種類は、おおよそ指摘し得たつもりである。しかしその結果は、相互に矛盾する個所があって、この七種の本を截然と系統づけることは非常に困難と言わなければならない。それは、これら七種の外に、なお数多くの伝本の介在したことを想像せしめるが、ここで仮定の本を幾つも設けて、七種の系譜を作成してみても、どれだけ意味があるか疑問であるので、これまでに比較してきたところの大筋によって、概略の分類を試みてみる。

はじめに物語中の和歌の異同によって考えた（第一・二・三種本）（第四種本）（第五・六・七種本）の三つの分類と、その各類の成立順序とを、根底からくつがえすような資料は、和歌以外の本文の異同関係からも見出すことはできない。ただ、第一・二・三種本→第四種本→第五・六・七種本といった直線的な承接関係でないことには注意しておかねばならない。

第一・二・三種本の中で、第四種本以下と直接の交渉を有するのは第一種本であることは明らかである。つまり第四種本以下は、第一グループの三本の中で第一種本の本文の系統を引いている訳である。このことは、第一種本が第二・三種本より古いということにはかならずしもならないが、少なくとも主流をなす伝本の最も上位に位するということはできる。従って、この作品の諸本を代表せしめる伝本を選ぶとすれば、第一種本、特にその中で大東急本を挙げるのが妥当であろうと考える。大東急本の本文も所々誤脱があって完全とは言えないが、第二種の学習院本、第三種の慶長本よりは整っている。右の外、たとえば嫁較べの場面で、対の屋姫が蓬莱の作り物を見て、費長房の故事を説くことがある。この話は後漢書方術伝・神仙伝五にあり、蒙求巻中の「壺公謫天」に引かれている。流布本系曾我物語の巻一にも捜入されている話であるが、それを諸本によって見ると、第一種本が最も正確で、出典も漢書として

いるのに対して、第二種本以下は出典を倶舎とする上に、話も大分くずれてしまっている。これなどは第一種本が最もしっかりした本文を有する本であることを示している一例である。

第二種の学習院本は、第一種本に非常に近い詞章と離れている詞章とが交錯している本文を有する。第一種本との先後関係は断定的には言い得ないとしても、この系統の本文を承けた伝本が他に見られないところからすれば、第一種本の系統から岐れ出た傍系の本とするのが常識的であろう。

第三種の慶長本は、叙述の運びは第一・二種本とほぼ正確に対応するが、詞章はどちらともかなり離れているし、この本を承けたと明らかに認められる伝本も見出せない孤立した本である。僅かに第四種本と交渉があるのではないかと思わせる個所の存することは先に指摘したが、それも確実とは言い得ない。慶長十三年の年記を有することには価値を認め得るとしても、本書の本文には誤脱がきわめて多く、書写態度が杜撰であって、善本とはなしがたい。

第四種の天理本は、第一種本の系統より出て、やや変化した本文を有し、第五・六・七種本にも影響を与えている点が認められる。本書は奈良絵本としては初期のものに属し、挿絵が非常に豊富で、絵柄も詳密である。毎半葉毎の行数も不等で、所々挿絵の面に本文がはみ出している個所もあって、江戸前期の奈良絵本のように形式が定型化していない。また挿絵の中の人物の言葉が多く記されていることは、絵巻物における絵詞の形式を承けていると思われ、奈良絵本としては珍しい。なお数年前、東京の白木屋で開かれた古典籍即売会に、本書と同型の大形奈良絵本「岩屋」が出品された。全巻に亘って精査はなし得なかったが、本文挿絵ともに本書と全く同時代でかつ同系の本と見受けた。本書と一類をなす伝本はなお幾つか存在したのではないかと想像される。

第五・六・七種の三本は、以上の第一種乃至第四種の諸本に対して一類をなす本文を有している。おそらく第一種

本から、第四種本に近い本文を経て形成された伝本であろうと思われる。この中、第五種の慶応本と第六種の刊本とは非常に密接な交渉をもっている。全体としては慶応本の方が元であるように感ぜられるが、それを否定すべき個所も見出されるので、一概には決め難い。一応きわめて近い兄弟関係にあるものと言っておくのが無難であろうか。慶応本の本文は漢字を用いることが多く、かつ振仮名が多く附されている。その書写態度はこの種の物語にあっては非常に丁寧で誤りも少ない。第六種の刊本系の本文の参考資料としては価値のある伝本である。

第七種の天理本は、書写の年代から言えば、第六種までの諸本よりも更にやや後れると推定される奈良絵本であるが、その本文は第五・六種本よりも古いのではないかと思わせる個所を含んでいる。しかし第五・六種本の元になった本とは言えず、その位置を明確に定め難い伝本である。第五・六種本の上位から更に岐れ出た本であろうか。

B類本

最後に、B類の東北大学蔵本について見る。この本の本文はA類の第一種(イ)の系統に拠っていることが認められ、和歌もそれと同じである。しかるに、この本には次のような筋立の上の大きな相違がある。

(1) 明石の海にて対の屋姫が失踪したとのしらせを聞いた時、四位の少将が出家をすることを記さない。

(2) 対の屋姫の父帥大納言が任を終えて都へ上る途中、明石の沖にて姫の第三年を弔うことがない。従ってそこで出家した四位の少将に会うことも記さない。

(3) 帥大納言が都へ帰った記事の次に、A類の諸本は、新たに関白の御子二位の中将を登場せしめて、後半の男主人公に仕立てる。その所をA類第一種の大東急本によって示すと、

かゝりけるおりふし、一人の御子二ゐの中将殿と申人おはしけり、八月十五夜の月くまなきに、すいしん、さふらひ引くして、かものかはらに立出て、こまくらへしてあそはせ給ひしに、中将殿馬よりおちて、ひたりのかいなをつきそんし、いよの国はてんかのふん国なりけれは、れうちのためにいよへ下給ひぬ、八月九月れうちして、もとのことくなをりて、みやこへのほり給ふ、ひんこのこしたの嶋、むろのとまりにつき給ふ、月のてしほのあさなきにむらとりわたるなり、十月五日に、たんか、やくしかけ、いなみしま、はりまのなたをそはしりける、しよしやのあらしふきこして、はけしくはやこへける

とあるが、東北大本は

さる程に四位の少将は、そつ殿御のほりに、もしや姫君のありかをも尋出して、くしてやのほり給ふらんと、明暮まち給へとも、其かいなけれは、よをうき思ひにあくかれて、御宮つかへもすゝろなれは、君に御暇申て、伊予の国は父殿下のふん国なれは、めのと子六位のしん、右京の太夫をはしめ、中将なとをともなひ給ひ、伊予国へ下り給ふか、爰も又心うしとて、船もよひして、備後のともうた嶋、むろの泊につき給ふ、月の出塩の夕なきに、播磨のなたはしり給ふか、爰にてやうき人のしつみぬらんとおもふにも、我もまたよをうら風にさそわれて、なき身となしは、かくものをおもわしと思ひつゝけ給ふ折ふし、しよしやの山おろしはけしく、俄に波あらく立て、船はみきわにたゝよへり

という風に叙べていて、後半もまた四位の少将をもって主人公としている。

すなわち、全篇を通じて男主人公を四位の少将を以て一貫せしめるために、(1)(2)の如き省略を予め行なった訳である。この「岩屋の草紙」は、前半と後半とで男主人公の変ることが、他の同型の作品「伏屋」「秋月」などに対する大きな特徴なのであるが、それを不自然として、「伏屋」「秋月」に倣って改作したものであろう。

一本菊

写本・刊本ともに伝本がかなり多い。題名は大部分「一本菊」で、これが原題であろうが、「白ぎくさうし」と題した写本があり、また時代の下る刊本には「少将くらま物語」の題簽を有する本が見られる。管見に入った諸本は次の如くであるが、写本・奈良絵本の類はほとんど一本毎に小さな語句の出入異同があって、しかもそれらを系統づけることが難しい状態である。

A類

第一種

慶應義塾図書館蔵〔室町末江戸初間〕写本　一冊

鳥の子紙打曇表紙（二六・九×一九・八糎）。表紙左肩に「一もときく」と題した鳥の子紙の題簽を貼る。内題なし。本文字面高さ約二二・五糎。五一丁、毎半葉一〇行、各行約二〇字。

第二種

天理図書館蔵〔室町末江戸初間〕写本　一冊

改装栗皮色表紙（二五×二〇糎）。表紙中央に「一ほんきく　全」と書した縹色紙題簽。内題なし。本文字面高さ約二一糎。四〇丁（外に新補の扉紙一枚）、毎半葉一一行、各行二二字内外。以下本書を天理本甲と称する。

第三種

(イ) 万治三年西田勝兵衛尉刊絵入本三巻（野村八良氏旧蔵）同野田庄右衛門後印本（国会図書館・教育大学図書館・実践女子大学図書館蔵）

西田板は「室町時代物語集第三」に、野田板は「近世文芸叢書小説第三」にそれぞれ翻刻されている。西田板は、題簽「新板一本きく　上（中下）」。内題「一本菊（もときく）　上（中）」「一本菊　下」。刊記「万治三庚子皐月吉辰／二条寺町／西田勝兵衛尉開板」。単辺（六・八×五寸）。板心「一本上（中下）（丁附）」。（上）一五丁（中下）各一六丁半、一一行、二五字内外。挿絵（上）五頁（中）四頁（下）五頁。（室町時代物語集第三の解題による）野田板は、西田板の刊記の中、年記は残して書肆名を「野田庄右衛門」と改刻してある。

(ロ) 寛文十一年松会刊絵入本三巻（天理図書館蔵）同松会後印本（彰考館文庫・東北大学図書館狩野文庫蔵）同西村後印本（大東急記念文庫・内閣文庫・国会図書館・京都大学図書館蔵）

寛文十一年板は天理本の外、見ることを得ないが、題簽後補、内題「一もときく　上（中下）」。刊記「寛文十一辛亥陬月吉旦　松会開板」。単辺（二二・二×一七糎）。板心「一本上（中下）（丁附）」。（上）一一丁（中）一二丁（下）一二丁（丁附は上中下通し）。一六行、二五字内外。挿絵（上中）各五頁（下）六頁。彰考館本と東北大本は天理本と同板であるが「松会開板」とだけあって、刊年記は削ってある。西村板も松会板の後刷で、刊記だけを「西村開板」と改めてある。なお西村板の中、大東急本の題簽は「絵入少将くらま物語　上（中）（少将鞍馬物語下）」とあるが、内閣文庫本・京大本は「一本（もと）きく　上（中）（一本きく　下）」である。

(ハ) 竜門文庫蔵〔江戸前期〕写本　一冊

縹色地行成表紙（二五・七×二〇糎）。表紙左肩に「一本菊」の題簽。内題なし。本文字面高さ約二〇・五糎。五

八丁、一〇行、一七字内外。

第四種

刈谷図書館蔵〔江戸後期〕写本　一冊

香色表紙（二二・二×一五・五糎）。題簽「一本菊　全」。内題「一本菊」尾題「一もと菊終」。本文字面高さ約一九糎。六七丁、七行、二三字内外。

第五種

西尾市立図書館岩瀬文庫蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　三冊

紺表紙（一六・四×二三・四糎）。中央に「一本菊　上（中下）」の紅色紙題簽。見返し紗綾形に鶴亀模様銀紙、料紙間似合紙。本文字面高さ約一三・五糎。（上）二四丁（中）三一丁（下）二〇丁、一四行、一三字内外。挿絵（上）八頁（中）七頁（下）六頁。

第六種

天理図書館蔵〔江戸中期〕写本　一帖

切紙貼附卵色表紙（二九・五×二一・五糎）。題簽「ひともときく」。見返し金切紙貼、料紙鳥の子、綴葉装両面書。内題なし、尾題「一本菊の物語」。本文字面高さ約二一・五糎。三九丁、一〇行、二五字内外。

B類

京都大学図書館蔵〔江戸前期〕写本　一冊

縹色表紙（二八・五×一八・八糎）。題簽なし。扉題、後筆にて「白ぎく佐宇志」と墨書。内題なし。本文字面高

さ約二五・五糎。七四丁半、九行、二〇字内外。巻頭に「藤岡蔵書」の印記。本書は「室町時代物語集第三」に翻刻された。

以上の外に、なお左記の諸本が諸書に紹介されているが、本文を直接精査し得なかった。

〔寛永〕刊古活字本二巻

川瀬一馬氏が「古活字版之研究」に国分高胤氏蔵本（上巻のみ）を挙げておられるが、現在の所在を知ることを得ず、他にも同版本を見ることができない。

中島仁之助氏旧蔵奈良絵本　上下合一冊

「室町時代物語集第三」に解題が掲載されている。

野村八良氏旧蔵奈良絵本　三冊

同　奈良絵本（中欠）　二冊

右二本は野村八良氏が「室町時代小説論」に紹介され、「室町時代物語集第三」にも解題が載せられている。（本稿の執筆後に、この野村本のうちの三冊本の方を書肆で見出したので、本稿の末尾に附記した。）

A類第三種の諸本

A類の第三種本は刊本系で、いわゆる流布本である。(ロ)の寛文板は(イ)の万治板の本文の不備な所を訂正した程度で、さしたる違いはない。主な相違個所は「室町時代物語集第三」の解題に掲出されている。(ハ)の竜門文庫本は刊本に拠ったものと思われるが、細部の字句の異同はやや多い。

A類諸本の関係

次に、A類の第一種から第六種に至る各伝本の本文を、特に相違の多く見られる個所を挙げて対照してみる。

（1）兵部卿の宮、兵衛佐の妹君に求愛する条。

第一段

㈠慶応本

又をしかへして
くれなひのす
へつむはなや
これならん、
ふみかへさる
ゝみともなり
けり
とあそはしてた
ひにけり、給り
て三うへゆきて
やう〳〵申けれ
は、このたひは
人もいてす、返
事もなかりけり

㈡天理本甲

又おし返し御ふ
みあり
くれなゐのす
ゑつむ花やわ
れならん、ふ
み返さるゝ身
ともなりけり
とあそはしたる
を、ときはとり
てゆきやう〳〵
に申とも、人も
いてす、返事せ
す。

㈢万治板

をしかへし。か
くなん
くれなゐのす
ゑつむ花やわ
れならん、ふ
みかへさるゝ
身こそつらけ
れ
とあそはして。
つかはさるゝ。
ときは。とりて
ゆき。やう〳〵
にいへども出ず。
いらへもせず。

㈣刈谷本

又宮をし返して
かくなん
くれなゐのす
ゑつむ花や我
ならん、ふみ
かへさるゝ身
ともなりけり
とあそはしたる
を、ときは給て
よきやうに申せ
とも、人もいて
す、返事もなし

㈤岩瀬本

やかておし返し
てそあそはしけ
る
くれなゐのす
ゑつむはなや
れならむ、文
かへさるゝ身
ともなりけん
かやうにあそは
してときわにた
ひけれは、又三
てうたかくらへ
行て、よう〳〵
に申けれと、こ
のたひの人もい
てす、御返事も
なかりけれは

㈥天理本乙

又宮をしかへし
つゝ
くれなゐのす
ゑつむはなや
われならん、
ふみかへさる
ゝ身ともなり
けり
とあそはして給
はる、ときわう
け給てゆく、や
う〳〵に申せと
も、人も出給は
す、御返事もな
し

第二段

C ときは、おさなきものゝこゝろにも、いとねたくくやうくおもひで申やう、みやこにすむ人のD わかきみのふみなとを、めさましくもてなしたてまつらせ給ふへきことのひんなさに、とりたにもいれさせたま候はねはとてみすのうちへなけいれたれとも御返事もなかりけり

C ときは、おさなき心にねたく思ひて申、このみやこのうちにすむ人、D わかきみの御文なとを、かはかりめさましくもてなし給ふひんなさよ、とりたにも入させ給はぬとて、みすのうちへなけ入けり、されとも御返事はなし

C ときは。おさなき心ちにねたくおぼえて申やう。たうじD我が君の御文なんどを。めさましくしてもてなし給ふびんなさよ。とりだにいれさせ給へとて。みすうちあけて。なげ入ぬ、されども御返事はなかりけり。

C ときは、おさなき心にねたくくやしくおもひて申やう、此らくちうにすむ人の、D我君の文なとをは、いかはかりかかくはもてなし給はぬひんなさよ、とりも入させ給はぬとてみすのうちへなけ入にけり、されとも返事も給はらす

C おさあいものといひなから、ねたくくやしくおもひけん、申やう、らく中にすむ人の、D わか君の文を、さはかりあさましくもてなし給ふらんひんなさよ、とり入させ給はぬ物かなとて、みすのうちへ入たれとも、返事もなし

C ときわ、おさなき心にもねたくや思ひけむ、きやう内にも、D わか君の御文をかへすへき人こそ覚えね、とりたにも入給はすは目さましくもてなし給ふことのひんなさよとてみすのうちへそなけ入ける、されとも御返事はなし

第三段

そのゝちも、E いろ〳〵に御こゝろをつくし、文ひまもなかりけれは、ゆくみつ

そのゝち、E いろ〳〵にかほりつくして、御ふみひまなかりけれとも、ゆくみつ

そのゝち、E いろ〳〵のうすやうに。さま〴〵の御心をくだきて。をしかへし〳〵。

そのゝち色E〳〵に御心をつくさせ給ふ、文ひまなかりけれとも ゆく水に数かく

そのゝち、E 御こゝろをつくし、文のひまもなかりけれとも、行水にかすかく心

そのゝち、E いろ〳〵に御心をつくし、御ふみひまなくまいりけれとも、ゆく水

にかすかくこゝちして、一たひの御返事もしたまはす

第四段

みやはねたくわひそめてける物かな、[F]よし〳〵さらはさてこそあらめ、とかくいはんほとに、ねうこ御かたへもきこえん事こそはつかしけれ[G]いまはおもひたへなんとおほしめして、[H]ふみもとたへにけり、[I]このことうちわすれんと、みやはおほしめせとも、[J]さらに御こゝろかなはす、

にかすかく心ちして、一との御返事も申給はす

みやはねたくいひそめにしものかな、[F]よし〳〵さらはさてこそあらめ、とかくいはんに、はゝみやの御かたにもきゝ給ふ事もあれ、はつかしく思候らんとおほしめして、[I]おもはしとおほせとも、[J]わすられ給はす、[K]心つよきにつけても、[L]なに心なきほとあらはれて、[M]たゝ一すちに御物御文ひまなかりけれとも。行水にかずかく心ちして。一度も返事なかりけり

宮は。ねたくもいひける物かな。[F]よし〳〵さらば。さてこそあらめ。と。かく。ゆはんほどに、母女御殿の御かたへも。きこえんこそはづかしく思へなんとおぼせども、[J]わすられず。[K]御心よはきにつけても。[L]なさけのほどあらはれて、[M]たゝ一すぢにおもふ也。かくて日数もふるほどに。

心ちして、一ことはの返事もなし

宮はねたくもいひそめける物かな、[F]よし〳〵さらはさてこそあらめ、とかくいはゝ、まゝ母このかたへきこえん事、御はつかしくおほしめして、[H]文もとたへけり、[I]されとも宮はわすれてとおほせとも、[J]さらに御わすれもなし、[K]心つよきにつけても、[M]たゝ一すちの御物おもひ也、かくちして、一との御返事も申たまはねは

宮はいたくもいひそめける物かな、とかくいわんほとに、御はゝ女御の御かたへもきこえなはつかしくも侍らん、[G]いまは思ひたえなんと覚しめして、[H]文とたへにありけり[I]されとも宮は此ことうちわすれん、おもはしと覚しめせとも、[J]さらにわすれす覚しめす事なかりける、[K]かくいにかすかく心地して、一との御返事もなし

かくて宮はなを〳〵思ひにしつみ給ひぬ、又御心におほすやうかやうのことはゝ女御の御かたへきこえなんこともはつかしとて、いまは御ふみもかつらきやくちしはしにはあらねとも、とたへかちにそなり給ふ、されとも御心にはふかくして、むねのけふりもたへまなく、しらねの

K
かくいと心つよ
きにつけても、
L
なにこゝろなき
ほとのあらはれ
て、M たゝ一すち
に御心にしつま
せたまひなから
日かすをふるほ
とに

おもひなり、か
くて日かすふる
ほとに

て日かすふる程
に

と心よきにつけ
ても、L なに心な
きほとにあらさ
れは、M たゝ一す
ちに御物思ひに
しつませたまひ
なから、日かす
ふるほとに

八〇

小松ひく人も、
なきさのうみの
わすれかは、あ
はんことのみ思
ひ、よろこひの
たねもゆかしき
こひくさの、し
ける思ひを引す
てゝ、うきふし
しらぬくれ竹の
一よのちきりま
つらかた、さよ
ひめかひれふし
けんも、あかつ
きのねさめのゆ
めにたに、さら
はあふとも見え
もせて、かいな
やかくてたまの
おの、いとゝみ
たるゝわかこゝ
ろ、なつくさの
しけみ、かはら

にすたく虫のこ
ゑたにも身にし
みて、かゝるた
くひもありあけ
の、つれなき月
のすかたをも、
くものたえまに
ひまもなく、た
ゝ一すちに思ひ
しつませ給ふ、
かくて日かすを
ふるほとに

第一・二・三段は六本とも文章の大筋は一致していて、同一の祖本から分岐したものと考えられる程の近い関係を保っている。第四段は、第六種の天理本乙のみに著しい文飾が見られ、他の五本と全く異なった本文を有しているが、これによって、すくなくとも天理本乙は、六本中の古い形を存するものではないということが考えられる。

次に、第四段の天理本乙を除いて、各本のいずれかに相違の見られる傍線AからMまでの句について、各本の異同の関係を示してみる。一つの（　）の内に括った本はほぼ一致するもの、〈　〉に括った本は該当する句を欠くものである。略号は第一種本から順に、慶・天甲・刊・刈・岩・天乙とした。

A　（慶　天甲　刈　天乙）　刊　岩

B（慶 岩）（天甲 刊 天乙）刈
C（慶 刈）（天甲 刊 天乙）岩
D（慶 天甲 岩）刊 刈 天乙
E（慶 刈 天乙）天甲 刊 岩
F（慶 天甲 刊 刈）〈岩〉
G（慶 岩）〈天甲 刊 刈〉
H（慶 刈 岩）〈天甲 刊〉
I（慶 刈 岩）天甲 〈刊〉
J（天甲 刊 刈 岩）慶
K（慶 天甲 刈）刊 岩
L（慶 天甲）刊 〈刈〉 岩
M（慶 岩）（天甲 刊 刈）

右の異同の関係についての判定には微妙な所があり、区切り方にも問題があろう。また写しの粗雑なために生じた誤脱と思われる個所もあって、厳密に言うことはできないが、一つの目安として試みたものである。右の結果を検討してみると、慶応本は欠けている句がなく、またJの一例を除いて他の五本のいずれかと一致している。このことは、慶応本がA類の諸本の中では、もっとも原型に近いものではないかと想像せしめる。この慶応本と類似する句をもっとも多く有するのは、刈谷本と岩瀬本である。特に岩瀬本は、BGMの如く、この本のみが慶応本と一致する句が最

も多く、慶応本とかなり近い関係にあると考え得る。反対に、慶応本ともっとも離れているのは刊本である。しかるにこの刊本は、天理本甲と一致する所が多く、また天理本甲は、刈谷本・岩瀬本に次いで慶応本と類似している。そこで、この三本の関係は、慶応本→天理本甲→刊本、という経路をとって本文が変化したものとすると、一番自然に解釈できるように思われる。

（2）兵部卿の宮、姫の許に忍ぶ条。

第一段

(一)慶応本

さてひめきみは
A おもひよらぬ事
なれは、いかに
せんとなきたま
へは、おもひそ
めしよりして、
御こゝろのまよ
ひもいかになと
ゝかき給へは、
くときおほせら
れとも、御返事
もなし、B いとゝ
おもひまさりて
おほしけれは、

(二)天理本甲

さてもひめきみ
A おもひもよらぬ
事なれは、いか
にせんとなけき
たまふ、みやは
おもひそめし日
よりして、御心
のうちをくとき
おほせられけれ
とも、一まとの
B 御返事もなし、
いとちかまさり
におほしめしけ
る、いかに思ひ

(三)万治板

さてひめ君。A お
もひよらぬ事に
て。いかにせん
としのびかね。
なきしづみ給ふ。
思ひそめし日よ
り。御心のつき
し事。かきくど
きかたり給へど
も。一ことばの
B 御いらへもなし。
君くろふたくに
思ひかゝるけし
きちりまさかす

(四)刈谷本

さても姫君はA お
もひもより給は
ぬ事なれは、い
かにせんとなき
給ふ、宮はおも
ひそめし日より
御心まよひし事
とも、かきくと
き仰けれとも、
一ことはの返事
もなし、B いとゝ
ちかまさりにそ
おほしける、い
かにおもひ給ふ

(五)岩瀬本

さてもひめ君は
A 思ひもよらぬ事
なれは、いかに
せんとなけき給
へは、宮は思ひ
そめしより、心
まよひはいかに
なんと、かきく
ときおほせけれ
とも、一との御
いらへも申給ふ
ことなし、宮は
B いとゝちかまさ
りしておほしめ

(六)天理本乙

さてもひめ君、
思ひそめにし日
よりして、御心
まとひしことゝ
もかきりなしと
かきくときの給
へとも、さらに
御返事もなし、
B いとゝなつかし
くおほしめしけ
る、いかに思へ
とも、いまはす
こしもたちさる
へくもおほへす

いかにおもひ給ふとも、いまはかたときもたちさるへきこゝちもおほえすとてC ちとせもゝとせにのみおほしけり

たまふとも、いまは一よのへたても物うくなとゝて、C ちよを一よになさまほしくおほしめしけれとも

る心ちして。いまはかたときたちさはるべきやうも覚えず。C 千夜をもゝ夜にかさねたくおぼすに。

とも、いまはかた時もさるへくもおほえたまはす、C ちよを一よとかさねたくそおほしける

しけれとも、ひめ君はたゝなけき給ふ、いかに思ひ給ふとも、いまはかた時もたちさりぬへき心ちもせすとてC 千よをも一夜になさまほしく覚しめしける

されとも、しのゝめもあけゆくそらなれは、E 又ゆふくれとひさしきなと、くちすさみ候て、F きぬ〳〵の御なこり、いろふかき御けしきにていてさせ、御なをしひきつくろひG あか月おきのつゆけさよと、H くれなはとも、いらへも申給はす、あ

されとも、しのゝめやう〳〵あけぬれは、F きぬ〳〵にをきわかれ、御なほしひきつくろい、G あかつきをきのそてのうへ、つゆけきならひなり、H くれなはとくとちきりて、いてもやり給はねとも、いらへも申給はす、あ

しのゝめやう〳〵あけゝれば、D 鳥のこゑこそしきりなれ、宮たゞかくなん

あかぬ夜をあけぬとつくるあかつきの、八こゑのとりのうらめしきかな

F あけがたき夜半のけしきにおき

しのゝめやう〳〵あけ、D とりのこゑしきりにしけれは、F あけかたき夜はのけしきにおきわかれ、御なをしひきつくろひ、G あかつきのならひにて御袖は露にうちしほれ、H くれなゐとちきり給へとも、返事もせ

されとも、しのゝめやう〳〵あけ、D とりのこゑもあけ行、D とりのねは八こゑもしきりになれは袖のなみたの色ふかき御けしきにて、あかぬわかれの御おもかけ身にそいて、かへらせ給ふG

C ちよをもゝよにかさねたくこそおほしめしける

されとも、しのゝめやう〳〵あけ、D とりのこゑしきりにつけゝれは、F ありあけのよはもおしきに、をきわかれ給ひ、御なをしをひきつくろいG あかつきのそてのうへ、つゆけきならひなり、H けふ又くれはと

れなひよくよとちきりおかせたまへは、御返事も申給ふ事もなし、あかぬ御なこりのみ御身にそひたるここちして、かへらせ給て

かぬわかれ御身にそひて、かへらせたまひて

わかれ。御なをしひきつくろひ。あかつきおきの袖のうへ。露ぎきならひなれば。くれなばとくとちぎれども。さらく返事もしたまはず。あかぬおもかけにそひて。御かへりありて。やかて御文あり

とけかたき夜半のけしきを見くるより、けさしも人はこひしかりけり

此御文をときは給はりて。三条へまいる。御文まいらせんと申させ給はす、あかぬ別の御身にしみて、かへらせ給ても

おほせけれとも御返事もなし、あかぬわかれの御みにしみて、帰らせ給ひ

I いつしかくるゝをおそしとおほしめしけるに、J かみな月のころなれは、いとくらしかね、K 日もやうくくれけれは、又ときは御ともにていらせたまひけれはいまは一よのへたてあるへしともおほしめさすかよひたまひけるほとに

又ときはを御ともにていらせ給ひ、いまは一よのへたてもあるへしともおほしめさゝりけり、L あめ風をもしのきてそかよはせ給ける

せば。ごんの少将とり入ぬ。ひめ君にまいらせけれども。かほうちあかめて。御らんぜねば。御返事もなし。

I 宮はくるゝおそしと仰けるに。K 日すでに暮ければ。又ときは御ともにていらせ給ふ。今は一夜のへだてあるべしとも覚えず。L ふる夜もふらぬ夜もかよはせ給ひけり。

I くるゝををそしとおほしけり、J かみな月の事なれは、いとくらしかたくまたせ給ひて、又ときはかりを御ともにていらせ給ふ、いまは一夜の御へたても有へしともおほしめさゝりけり、それよりしては L 雨のふるにも風のふくにもかよはせ給けり

I いつしか日のくるゝをそまち覚しめしける、J 神無月のことなれは、くれやすき事をうれしくおほしめして、御ともに時はめしつれさせたまひて、三てうへいらせ給へは、いまは一夜のまもあらしと覚しめして、よなくかよひ給ふ

I くるゝおそしとまたせ給ひけるJ かみな月十日ころなれは、いとはやくくれけれは、又ときわも御ともにていらせ給ふ、一よのへたてもあるへしともおほへす

この条で、もっとも大きな相違の見られるのは、第二段における第三種の刊本である。刊本は後朝の和歌二首を入れているが、他の五本にはいずれも和歌が無い所から見て、おそらく刊本が増補したものであろう。それを除いては、各本とも叙述の運びはきわめて類似しているが、語句の出入異同は、傍線を附した部分が示すようにやはり複雑である。前条と同様に、AからLまでの各句について、諸本の間の関係を整理してみると、

A（慶　天甲　刈　岩）　刊　〈天乙〉
B（天甲　刈　岩）　刊　慶　天乙
C（天甲　刈　岩）　（刊　天乙）　慶
D（刊　刈　岩　天乙）　〈慶　天甲〉
E　慶　〈天甲　刊　刈　岩　天乙〉
F（刊　刈）　慶　天甲　天乙　〈岩〉
G（天甲　刊　天乙）　慶　刈　岩
H（天甲　刊　天乙）　（慶　刈）　〈岩〉
I（慶　刊　刈　岩　天乙）　〈天甲〉
J（慶　刈）　（岩　天乙）　〈天甲　刊〉
K（慶　刊）　〈天甲　刈　岩　天乙〉
L（天甲　刊　刈）　〈慶　岩　天乙〉

の如くになるが、ここでは、前条の場合のように、諸本間の関係をある程度窺い得る数量的な結果は見ることができ

ない。たとえば慶応本にしても、それのみが他の本と異なる個所が幾つも見出され、慶応本が諸本の源に近いものとはかならずしも言い得ない。ここでは、むしろ刈谷本が、前条における慶応本の如き位置にあることが認められる。また、天理本甲と刊本との関係も、前条におけるほど密接ではなく、天理本甲が刊本のもとになったということにも疑問が生じてくる。

なお、右の異同の中、慶応本のH「くれなひよくよとちきりおかせたまへは」は意味が不明で、あるいは「くれなはとくよと」の誤写かと思われるが、刈谷本にも「くれなゐとちきり給へとも」とあって、慶応本と類似しており、この二本の間には、何らかの承接関係があるのではないかと想像される。また、Jの句は、慶応本と刈谷本、岩瀬本と天理本乙とが、それぞれ類似し、両者が顕著な対照を見せている。後者の表現の方が理屈には合っているが、この場合の兵部卿の宮の感情をあらわすものとしては、慶応本の「いとくらしかね」刈谷本の「いとくらしかたくまたせ給ひて」の方が適切である。それが「かみな月のころなれは」といった前句と矛盾するので、岩瀬本・天理本乙が改訂したのではないかと考えられる。

(3) 兵衛佐流罪に際し、侍従の内侍と別れを惜しむ条。

	(一)慶応本	(二)天理本甲	(三)万治板	(四)刈谷本	(五)岩瀬本	(六)天理本乙
第一段	きやうこくのたいなこんのひめきみ、しゝうのないしとてをはしけるに、この	さてもきやうこくの大なこんのひめきみ、しゝうのないしと申ておはしける、	さても。きやうごくの大納言のひめ。じゞうのないしと申は。	さてきやうこくの大なこんの姫君に、しゝうのないしと申ておはしけるに、此	さるほとに、きやうこくの大なこんのこんの御むすめしうのないしとて、うちに御み	こゝにきやうこくの大なこんのひめ君、しゝうのないしと申ておはしけるか、

A かみかたちうつ

ひやうへのすけとのしのひくくにかよひ給ひけり

このひやうへのすけしのひくかよはせ給けり

くしう。御門をはじめまいらせて。かたへのくぎやうてん上人。めんくく心をつくして。色々さまくいはれけれとも。なびく事なかりしが。いかなりけるちぎりにや。この兵衛のすけにあひそめて。たがひにあさからず。しのびくにかよひ給ひけり。兵衛のすけはいまはさいごなり。じゞうのないしにいま一度。いとまこはんとおぼしめし。たちかへり。ないし

兵衛佐殿しのひくにかよはせ給けり

やつかいにてわたらせたまいしに、此ひやうゑのすけ、しのひかよひたまいけるか

此ひやうゑのすけとのしのひてかよはせ給ひける

第二段

いまはさいこのいとまこはんとて、つほねへおはして、つまとをうちたゝき給ひて、ないしやこれにおはしま

いまをかきりとおもひ給ひて、いとまこはんとおほしめし、つほねにおはしてつまとうちたゝき給ひて、ない

是はさいこなりいま一たひ御いとまこひし給はんと、局におはして、つまとをたゝき給て、ないしや是におは

いまさいこなれは、なこりをおしみ、いとまこひ申さんとてまいりたりとの給へは、ないしたゝいまうへのす

いまはさいこのことなり、いま一とないしにいとまこはんとおほしめして、つほねにゆきて、ないしはこれに

おはするか、さいこの御いとま申さんとてまいり候との給へとも、ないしはたゝいまうちより出、やすみ給ひけれは、しろしめさすして出させ給はす

へりのたまいけるは、Cれいの色〳〵しき心なれは、いそきてもいてたまはす

します、さいこの暇申さんとてまいりたりとの給へは、たゝいま上よりおはして、やすみておはせとも、Cれいのしつ〳〵しき御心にて、とみにもいて給はす

のつぼねへおはしまし。つま戸を打たゝき。Bを部のつぼねやおはします。ないしやこれにおはします。さいごのいとま申さむとぞいはれける。ないしはいま。うちよりおりて。ふしたりけれども。Cれいの色々しきこゝろにて。とひにも出ず。兵衛のすけまちかねて。さりとも。てんじやうにて。聞給ひたるらん物を。Dじんせきたえたるなみのうへにたゞよひ。又都へ

しやこれにをはしますと、いま一といとま申さんとまいりたりとのたまひけれとも、ないしたゝいまうへよりおりてやすみ給ひけれとも、Cれいのいろ〳〵しき心にて、とみにもいて給はす

ひやうへのすけまちかねて、さりともうちにてきゝ給へらんにDしんせきたへたるなみのうへにさいこにいま一とたゝよひ、又

兵衛佐殿まちかねて、さりともうちにてきゝ給たるらん物を、Dまん〳〵たるさいかいのなみの上にたゝよひ、又も都へかへる

ひやうゑのすけまちかねて、さりともうちにてきゝ給ひて候らんものを、Dしんせきたへたるなみのうへにたゝよいて、又もみ

ひやうへのすけまちかねて、さりともうちにてきゝ給へらんにDしんせきたへたるなみのうへにいろ〳〵しきこゝろなれは、いそきもいてたまはすありけれは

ひやうゑのすけまちかねて、さてもわかみのうへ、さてきかせ給ふ事あらし、Dしんせきたつたるなみのうへにたゝよ

ひやうゑのすけまちかねて、さてもたうちにてきかせ給ふへき物か、Dしんせきたへたるなみのうへにたゝよいみやこへ二たひ

やこへかゑるましきことなれはさいこのいとま申て、ひとめ見まいらせ候はんとてこそまいりて候、[F]よし〳〵さらはかへりなんといふこゑをきゝて、こはいかにとおもひてたゝいまうへよりおりて候とていてたれは

みやこへ返らん事もかたけれはさいこにいま一とみへも見たてまつらんとてこそまいりたれ、[F]よし〳〵さらはかへりなんといふこゑをきくにはいかにと思てたゝいまうへよりおりてやすみさふらふとていて給たり、[G]もみちかさねのこうちき、しとろにひきかさねて、いそきいてゝ

かへるましければ。さいごの名残に。見まいらせんとおもひてまいりて候。[F]よし〳〵さらば。かへりなんといふこゑを聞。こはいかにとおもひて。たゞいまうちよりおりて。から衣きて給ひたりけるが。いそぎしやうじをひきあけていでたり。[G]もみちがさねの色に。はしのもみちのかうちき。しどろにひきかけて。いそぎ〳〵おきたれば。ひたいにかみかゝりて。

ましけれは、さいこにいま一たひ見もしみえまいらせんとおもひてこそ、まいりて候へ、[F]よし〳〵かへりなんとの給ふ御こゑをきゝ給て、やすみさふらふ物をとていて給にけり、[G]もみちかさねのこうちきしとろにひきかけ、いそきいて給へる御有さまめもあや也

ひて、又も都にかへるましきことなれは、さいこの御いとまこい申さんとてこそまいりて候へ、[F]はいりたり、[E]又みんことも此世にてはあるまし、御いとまこい申さんとてこそまいりて候へ、[F]はや御こゝろかわりにて候はゝ、とく〳〵返り候はんとて、うらみ給ふ御こゑきゝたまいて、こはいかにと思ひて、たゝいまうへよりすへり候て、くたひれ候なりとていて給へは

帰るましけれはさいこにいま一と見えまいらせんとてまいり候へとも、[F]よし〳〵さらはかへりなんとおほせけるこゑをきゝて、こはいかにとおもひて、たゝいまうちより出てやすみてさふらふとて、[G]もみちかさねのこうちきひきかけて、いそき出させたまひけり

さてもこのかとうちにてたまはてや、いまゝておそくいてさせ給ふ事うらみ入てこそ候へ、Hよし〳〵いとわせ給ふとも、こし給ひはかりこそくものうへに候はんつれ、Iまんさてもこの事うちにてこそきかせ給て候らんにいまゝていてさせ給はぬ事うらみ入てこそ候へHよし〳〵いとはせたまふに、こよいはかりこそくもうのへのすまいにても候はつきにあたりて見給へば。月の光に。ひかりそへたるこゝちして。らうたくくまなきありさま。是やおもふに。こゝろもきえまどひ。ひざのうへにかきのせ。ひすいのかみをかきなでゝ。

うらめしや。さりとも。てんじやうにても聞給ひつらんものを。いまゝで出させ給はぬ。うらめしさよ。Hよく〳〵とひ給ふに。雲のうへにあとたえて。今夜をかぎりにまいるよさても此事うちにてきかせ給候はんに、いまゝて出させ給はぬ御事うらみせんはんにてこそ候へ、Hよし〳〵いとはせ給とも、こよひはかりこそ雲の上のましろひも候はんつひやうへのすけ殿ののたまひけるは、さても此ことといまゝてしり給はぬことあらし、Hよく〳〵さやうに御心つよくわたらせ給ふとそ、今夜はかりこそくもの上のすまいもみさても此ことうちにてきかせ給ふへきに、いまゝて出させ給はぬことこそうらみ入て候へ、Hよし〳〵いとわせたまふとも、いまはかりこそくものうへにもあとをたれ候はん

くたるくかい
にしつむとも、
いかならんよま
てもとわするま
しともおほえす
きみはゆゝしき[J]
くものうへにて
めつらしき事も
ありなん、さこ
そとたにもおほ
しめしはてたま
ひし、[K]このよの
ちきりこそうす
くとも、[L]こしや
うかならすたす
け給へとも

ないし、なにと
もしり給ひ候は
て、くかいのな
みのうへには、

め、[I]まんくと
うみのうへこそ
たゝよひ候とも
いかならん世ま
てもわするへし
ともおほえ候は
す、[J]きみはくも
の上にさふらい
つゝ、めつらし
き事もありなん
さこそとたにも
おもひいたし給
はし、[K]このよの
ちきりこそうす
くとも、[L]こしや
うにはかならす
たすけ給へとの
たまへは

ないし何ともし
り給はす、くか
いのなみまては
何事そとのたま

し。[I]我が身は。
ゑんくたるく
かひの海にしづ
むとも。いかな
らん世までも。
わするべしとも
おほえず。[J]君は
めづらしく。雲
のうへにふるま
ひつき給ひし。
いはざりしとだ
に。おぼしめし
出て。[K]心にかゝ
り給はずとも。
[L]のちの世。かな
らずとふらひ。
ゑさせ給へとの
給へば。

なひしは。かく
の給へども。な
にともしらず。
くかひのなみの

れ、[I]さてもく
ひころのむつこ
とはいかならん
世までもわする
へしともおほえ
す、[J]君はゆゝし
き雲のうへにす
み給はゝ、めつ
らしき事も御わ
たり有なん、さ
る事のありした
におほしめしも
いてさせ給はす
[K]此世のちきりこ
そうすくさふら
ふとも、[L]らいせ
はかならすおな
しはちすにと申
させ給へとも[M]
ないしは御涙に
めもくれ、御心
ちもいつちへか
ゆきけん、とか

め、[I]明日はくも
ゐにたち帰らん
こともあるまし
いまはゆめのあ
ふせならてはた
のむかたなし、
君はゆゝしきく[J]
ものうへにわた
らせたまひて、
さそめつらしき
御ことにて、ま
ろかことは覚し
めしたにいたさ
れしなれとも、[L]
らいせはかなら
す一はちすのゑ
んとなり候はん
つれともとのた
まへは[N]
いまゝてしりた
まはすや、申に
つけてうらめし
申まし、いと御

つれ、[I]まんく
とあるうみにし
つむとも、いか
ならんよまても
わするへくもお
ほへす、[J]君はゆ
かしきくものう
へにて、めつら
しき御事もあり
なん、さこそと
たにもおほしめ
しいたさし、[K]此
よのちきりこそ
うすくとも、[L]こ
せにてはひとつ
はちすのゑんと
ならんとの給へ
は

ないしはなにと
もしり給はす、
くかいのなみの
うへとは、なに

なにことにいかなることにてそとの給へは、ひやうへのすけきゝ給ひ候□ぬせんとおもひて、いまたしりたまはさりける、申いてんにつけても心うけれは、なか〳〵申ましなにともなくともきかせたまひ候なん

第六段

されともこよひはしはらくも候て、さいこの御物かたり申たく候へとも、三てうへかへりて、いもうとにこゝへは、ひやうへのすけきゝ給つらんとこそ思たてまつりたれ、いまたしり給はすや、申いてんにもかたはらいたし、中〳〵申まし、なにとなくともきかせ給へきそとて、のたまはす

こよひはしはし候て、御ものかたりも申たく候へとも、三てうにかへり、ひめきみにいとまこい候はんとて、うへとは。なにごとによりて。いかなる事ぞと聞給へば。さりとも。これほどひろふなりたる事なれば。きゝ給ひつらんとおもへば。しりもたまはざりけるか。申さんもなか〳〵心うければ申まし。のちにきかせ給へよ。

今夜はしばらく候て。さいごの物かたり申たく候へども。三条にかへり。いもうとにこゝろへさせまいらせ。くの返事にもをよはせ給はす、たゝふしつみてそおはしけるやゝ有て、さてさいかいのなみのうへとは、いつくいかなる所を申そと、まことにいきのしたよりの給ふ、兵衛佐殿は申いたさんにつけて心うく候へは、中〳〵申ましとそ仰ける

こよひはこゝにて夜をもあかさまほしくおほせとも、三てうにかへりて、いもうとにて候ものにいとまこひ申しり候はんする

こよひはこれに候て、さいこの御物かたり申たく候へとも、三てうへ帰り候ていもうとにて候ものにさいこの

九四

ことによりてのたまふそとおほせけれは、ひやうゑのすけ殿きこしめして、さてはいまたしり給はすやと、申いてんにつきても心うし、なにとなくともきかせ給ふへしとての給はす

こよひはしはらくさいこの御ものかたり申たく候へとも、三てうにかへり、いもうとに心しつかにいとまをこ

ろしつかにいと
まこい候はんと
て、なにをかか
たみにまいらす
へき、これこそ
身にはなさすも
ちたるものにて
候と、しきしの
うすやうにつゝ
みたる、つけの
くしをとしいた
したてまつる
O いまはとてさ
してわかれぬ
きみかかと、
つけのおくし
よつけよおり
〳〵
ないしこれをと
りて
P わかれなはつ
けのおくしも
なにかせん、

なにをかたみに
まいらすへき、
これこそ身をは
なたすもちたる
物にて候へとて
しきしのうすや
うにつゝみたる
つけのをくしを
とりいたし
O いまはとてさ
してわかれぬ
きみかとよ、
つけのをくし
よつけよおり
〳〵
ないしこれをと
りて
P わかれなんつ
けのをくしも
なにかせん、
わか身そ後の
ことつてもせ
む

心しづかにいと
まこはんとて。
まかり侍る。か
た見に。なにを
かまいらすべき。
これこそ。けふ
まで身をはなさ
ずもちつる物と
て。しきしのう
すやうにつゝみ
たる。つげのく
しをとり出し。
なひしにたてま
つる。
O いまはとてさ
してわかれぬ
君が門、つけ
のおくしにつ
けよおり〳〵
なひしの御返事
P わかれなばつ
けのをくしも
なにかせん、

さんとて、いて
給はんとし給ふ
に、なにをかた
見にまいらせん
是は身をはなさ
てもちたる物
にて候とて、し
きしのうすやう
につゝみたる、
つけのをくしと
りいたし給て、
たてまつり給ふ
O いまはとてさ
してわかれん
いもかかと、
わらはそのち
のことつても
せん
兵衛佐殿
P 君ならてたれ
かのちにもこ
とつてん、さ
してわかれの

いとまこい申さ
んとて、なにを
かたみにまいら
せん、これにて
けふまて身をは
なさすもちて候
へともとて、し
きしのうすよう
につゝみたる、
つけのおくしを
とりいたし、た
てまつるとて
O いまはとてさ
らてわかれぬ
君かはと、つ
けのおくしの
つけよおり〳〵
ないしうけとり
たまひて
P わかれてはつ
けのおくしも
なにかせん、
我こそのちの

い候はんとて、
なにをかかたみ
にまいらせん、
これこそけふま
て身をはなさて
もちて候とて、
しきしのうすや
うにつゝみたる
つけのくしをと
り出して、ない
しにたてまつる
とて、すけとの
かくなん
O いまはとてさ
らてわかれの
きみかかと、
つけのおくし
よつけよおり
〳〵
ないしこれをと
りて
P わかれなはつ
けのをくしも

ふしかそのちの事つてにせん

とて、ないしいかなるところへもくしてとの給て、なきこかれたまひける

とて、ないしいかならんところまてもくし給へとて、なきこかれたまふ

あらばぞのちのことつけをせめ

いかなるむかしのちぎりぞや。いかならん所までもぐし給へと。なきこがれ給ふ。

なき世なりせは

ないしいかならん所へもくし給へ、とにもかくにも御身のゆくゑこそかなしけれ、めつらしき事もさふらはんとの給ふ、御心のうちこそはつかしけれ、又とも人にみえしとおもふ也、あらうらめしの仰やと、くときたてゝそなき給ひける

ことつてもせめ

かやうになかめたまひて、御いとまこいをものたまはす、いかなるところへもうつし給へとてなきたまひけり

九六

なにかせむ、つらさそのちのことつてにせむ

とて、ないしいかならん所へもくし給へとて、こかれ給ふ

第七段

さるほとに、人のをとのしけれは、これほとになりたることなれは、わかみのさる程に、人のおとのしけれはひやうへのすけこれほとになりたる事なれは、

さるほどに。人のおとしければ。兵衛のすけ。これほどにひろふなりつる事なれ

さるほとに、人のおとしけれはわか身のことはとても、御ためいたはしく、人

さる程に、人のおとしけれは、兵衛のすけこれほとになりたることなれは、わ

事はとてもかくても候へ、御ためいたはしく候へは、はしめて人にしられしとおもふなり、いとま申てとてたち給へは、ないしたもとをひかへてなき給ひけり

わか身の事はとてもかくても候へ、たゝ御身のためいたはしけれは、はしめて人にしらせしとて、いとま申てとてたち給へはないしたもとをひかへてなき給ふ

ば。我が身の事はとにもかくにもなりなん。御身のためこそいたはしけれ。はじめて。人にしらせじとおもふ也。いとまこひぞとたち給へば。なひしたもとをひかへて。ともかくもいひあへず。

ゝしられしとてたちわかれ給へは、ないし御袖をひかへたまひて、R いかなる野ゝすゑ山のおくへもくし給へとて、なきかなしみ給へは、ひやうへのすけ殿のたまひけるは、さやうにくしたてまつらんみちならは、なにをかなけき申へきとて、御心つよく申て

か身のことはとにもかくにも候へ、たゝ御みのためいたはしくこそ候へ、いとま申て候とてたち給ふ、ないしはたもとにとりつき、なかせ給ふ

第八段

さりなから、かくてもあるへきならねは、ないしはなくくすかたの見えけるほとみをくり給

かくてあるへきならねは、ひやうへのすけなくくいて給ふ、ないし御すかたのみへ給ほとは

兵衛のすけ。さてあるべきならねば。なくくS出給ふ。ころは霜月十五夜の事なれば。大うち

兵衛佐殿もせんかたなけにて、なみたにむせひ給けり、かくても有へきならねは、いのちあら

さてしもあるへきならねは、たちわかれ給ふ、ないしは、ひやうへのすけ殿うしろかけのみゆ

さてあるへきに候はす、ひやうゑの佐なくくく出給ふ、ないしはせんかたなく思ひ給ひて、な

ふ、いまはすかたも見えすなりにけれは、うちふして、こゑもおしますなき給ふ

見をくり給けりかへりてうちふし、こゑもおしますなき給ふ、

の庭みなしろたえに雪つもり。かんじたる月かげくまなきに。なく〳〵見をくれば。なをし。すがたのあくまで。なまめきたるありさま。これこそさいごの名残なるらんと。思ふにいとゞ目もくれて。うちふしこゑもたちつべし

はとはかりにてたち給へは、うちふして、こゑもおしますなき給ふ、T其声はさいかいのなみの上までも、みゝのそこにとゝまりたると、後にそかたり給ひける

るほとみをくりたまひて、御すかたもみへすなりけれは、うつふしたまひて、こゑもおしますなき給ふ

く〳〵帰り、うちふし、こゑもおしますなき給ふ

この条は、諸本の間の異同が最も大きな部分である。前二条と同じく、AからTまでの傍線部分における諸本間の関係を示せば、

A　刊〈慶　天甲　刈　岩　天乙〉

B　刊〈慶　天甲　刈　岩　天乙〉

C　（慶　天甲　刊　岩）　刈　〈天乙〉

D　（慶　刊　岩　天乙）　天甲　刈

E　岩〈慶　天甲　刊　刈　天乙〉
F　（慶　天甲　刊　刈　天乙）　岩
G　（天甲　刈　天乙）　刊〈慶　岩〉
H　（慶　天甲　刈　岩　天乙）　刊
I　（慶　天甲　刊　天乙）　刈　岩
J　（慶　天甲　刈　岩　天乙）　刊
K　（慶　天甲　刈　天乙）　刊〈岩〉
L　（慶　天甲　刊）　（刈　岩　天乙）
M　刈〈慶　天甲　刊　岩　天乙〉
N　（慶　天甲）　（岩　天乙）　刊〈刈〉
O　（慶　天甲　刊　岩　天乙）　刈
P　（慶　天甲　刊　岩　天乙）　刈
Q　刈〈慶　天甲　刊　岩　天乙〉
R　岩〈慶　天甲　刊　刈　天乙〉
S　刊〈慶　天甲　刈　岩　天乙〉
T　刈〈慶　天甲　刊　岩　[illegible]天乙〉

の如くになる。右を見ると、まず刊本が他の諸本からもっとも離れていることが訳る。特に、ASの二つはかなり長

い句であるが、どちらも他の本にはなく、またGの句も刊本は著しく長くなっていて、いずれも刊本独自の増補であろうと思われる。それについでは、刈谷本・岩瀬本にも、EMQRTの如くに同様の増補と考えられる句が見られ、刈谷本は第七段の記事を欠くなど大なき違いがある。一方、慶応本・天理本甲・天理本乙の三本は概して近く、特に慶応本と天理本甲とは大部分が類似している。OPの二首の和歌について見ると、二首とも刈谷本が相違が大きく、作者も誤り記しているのに対して、他の五本はほぼ近似している。ただPの歌では第四句が、慶・天甲・刊・岩・天乙の五本ともそれぞれに異なっているのが注意される。そして慶応本の第四句は「ふしかそのちの」とあって意味が不明である。そこで、この歌だけに関して言えば、慶応本の第四句が意味不明の形であったために、他の四本がめいめいに改訂して意味を通そうとしたのではないかという想像が成り立つ。すなわち、この条では、第一条で考えた諸本の関係の中、慶応本の本文が最も古く、天理本甲がそれに次ぐという点は、更にはっきりした形で確認できそうに思われる。

A類の六種の伝本は、以上の三例によって見た如くに、本文の異同が、「伏屋」や「岩屋」ほどに規模は大きくないが、非常に入りくんでいて、相互の関係を明確に解きほぐすことが困難である。このことは、おおまかに言えば、六本が横に並列する関係にあることを示しているのであろうと考えられる。これを強いて縦の系譜に位置づけることは、かえって誤りを犯すことになるかと思われるが、全体を通しての傾向からして、次のような程度のことは言い得るのではなかろうか。

(1) 第一種の慶応本は、この本のみの独自の増補、省略や改訂と思われる部分は少なく、多くの場合、他の五本

のいずれかと一致する。慶応本は書写の年代からいっても、もっとも古いことと併せて、この本の本文が一番古躰に近いものであろうと想像することができる。

（2）第二種の天理本甲は、この本のみの増補と認められる個所はなく、全体としては慶応本に近いといえる。一方、慶応本以外の四本に対しては、部分的に慶応本よりも密接な交渉をもっているように思われる。特に刊本は、この系統の本に拠ったのではないかと推測せしめる節があり、天理本甲は成立は慶応本よりやや遅れるとしても、この作品の伝承の過程にあっては、標準的な形態を伝えているものと言ってよいのではないか。

（3）第三種の刊本は、もっとも増補の部分を多く有する。その増補は筋立に関するものではなく、ある場面における描写をこまやかにしているといった体のものである。

（4）第四・五・六種の刈谷本・岩瀬本・天理本乙も、それぞれ部分的に独自の増補、改訂、省略を行なっている。そのうち、刈谷本は刊本と、岩瀬本は慶応本と特に近いところが見出せるが、それらが相互に直接の関係をもつとも思えない。

なお、「一本菊」は、風葉集所載の散佚物語「あだなみ」の改作であろうと言われている。このことは後述するが、風葉集の「あだなみ」の和歌二首は、現存「一本菊」にも見出すことができるので、その二首について、「一本菊」のA類諸本における異同を対比してみる。風葉集に載せられた二首は、（引用は「校本風葉和歌集」に拠る）

みこにおはしましける時、きくのえんせさせ給に、前中宮いまたさとにおはしましける御まへのきく関白にめされけれは、ひともと奉れりけるのちにさしおかせ給へりける

（A）わが心君かまかきにうつろふは猶やのこれるしら菊の花　（巻五秋下）

兵衛佐に侍けるとき、さつまのくにうつされけるに、いよのみなとゝいふ所にてみやこ鳥をみてよみ侍ける

あだなみの中関白

（B）都鳥恋しきかたの名にはあれとわかふる郷のことつてもなし　（巻八羇旅）

であるが、「一本菊」の諸本では左の如くになっている。

（A）（慶応本）わかこゝろきみかまかきにうつろふはなをやのこれるしらきくのはな
（天理本甲）わか心きみはまかきにうつろはゝなをやのこれるしら菊の花
（刊　本）わかこゝろきみかまかきにうつろふはなをやのこせるしらきくのはな
（刈谷本）我心君かまかきにうつろはゝなをやのこれるしらきくのはな
（岩瀬本）わが心君かまかきとうつろふやなをやゑたあり白きくのはな
（天理本乙）わかこゝろきみかまかきにうつろひてはなやのこれるしらきくのいろ

（B）（慶応本）みやことりこいしきかたのなにあれとわかふるさとのことつてもなし
（天理本甲）みやことり恋しきかたのなにはあれとわかふるさとのことつてはなし
（刊　本）みやことり恋しきかたの名はあれとわかふるさとのことつてもなし
（刈谷本）都鳥こひしきかたのなにあれと我ふるさとのことつてもなし
（岩瀬本）都とり恋しきかたのなにはあれとわれかこきやうのことつてはなし
（天理本乙）みやことりこひしきかたのなにとあれとわかふるさとのことつてはなし

Aの歌においては、風葉集所載のものと全く一致するのは慶応本のみである。Bの方は、完全に一致するのはなく、

一字の違いのあるのが慶応本・天理本甲・刊本・刈谷本であるが、その一字の違いの質を検討してみると、慶応本・刈谷本の形が一番風葉集の歌に近いと言えそうである。こうして見ると、慶応本が「一本菊」の原拠となった散佚物語「あだなみ」の俤をもっともよく残しているという想定が一応成り立つかと思われ、前述の、慶応本がもっとも古躰を存するのではないかとした結論と矛盾しない。

B類本

B類の京大本「白ぎくさうし」の本文は、A類諸本とは非常に離れていて、A類より叙述の詳しい所が多いが、またかえって簡略な部分もあり、和歌は著しく少なくなっている。筋の上で特徴ある記事としては、兵衛佐の想い人侍従の内侍が、兵衛佐の流罪の後、四位少将の手を逃れるために内裏を忍び出て、やがて流罪地薩摩へ下るに当って、追手をたばかるためとて、内侍の父母の許に従者を遣わし、内侍が入水したと偽りを告げさせることが記されている。このように、非常に特異な本文をもつ伝本であるが、なおA類諸本と子細に比較してみると、所々刊本のみと類似する個所が見出される。そのもっとも著しいのは、A類六種の本文対照のために前に掲出した部分のうち、第二条の第二段である。京大本のその部分を挙げれば、

かくて、とりのこゑ、かねのひゝきも、しきりにつけわたりけれは、あかぬわかれの鳥はものかはと、ゑいせし人のこゝろまておほしめしあわせて、御なこりおしくはおほせとも、人めつゝませ給ふ御身なれは、たちいてさせ給ふとて

したひもゝとけぬちきりのあかつきは、なをうらめしき鳥かねのこゑ

かやうにあそはして、御くるまにめされ、かへらせ給ひけれとも、のこるあしたのおもかけ、わすれかたくおほしめして、ま

たときはをつかはし給ふ

かけやとすいけのこほりのとけやらて、ひとりそすめる月の中そら

とあそはし給ひて、ときはにたまはりけれは、ときは、いそき三てうへゆきて、ゆふへの御かたよりの御ふみなりと申けれは、こんのせう〳〵いてあひて、やかてうけとり、ひめきみにまいらせけれは、中〳〵にみやり給はねは、こんのしやう〳〵申けるは、いつそやきくのゑたをおくらせ給ひしとき、ひやうへのすけとのも御らんして、この御返事をすゝめまいらせよとおほせられし御ことなれは、あわれ御返事候へかしと、いろ〳〵に申けれとも、御かほたにもたけたまはねは、ちからなくたちいてゝ申けるは、やう〳〵に申候へとも、御返事も候はすと申ける

とあって、後朝の歌二首が記されている。A類本の中にあって、ここに歌を存するのは刊本系のみである。歌の詞句には大きな違いがあり、その前後の文章も全く異なっているが、京大本は全篇に亘って和歌が少ないのに、刊本以外に諸本歌を記さないこの部分に、刊本と同様二種の歌を存することは、この京大本が刊本と特に関係を有するのではないかと想像せしめるのである。

また、兵衛佐の妹君が継母のために押し籠められた後に、妹君を想う兵部卿の宮が参籠する場所を、慶応本・天理本甲・刈谷本・岩瀬本・天理本乙の諸本は清水とし、刊本のみは長谷としているが、京大本は刊本と同じ長谷を採っている。

その外、細部の語句において、刊本のみと一致する所がいくつか見出され、これらを総合すると、B類の京大本「白ぎくさうし」は、刊本系に基づいて、詞章を大幅に改変したものと考えるのが妥当のようである。

なお、以上の諸本の外に、「室町時代物語集第三」「室町時代小説論」に紹介されている中島仁之助氏旧蔵本、野村八良博士蔵本二部について、横山氏と野村博士がそれぞれ解説されているので、それを見ておこう。

中島本は、刊本を節略した位の程度で、文章は非常によく整っているが、まま誤った所があると述べられている。詳しいことは訳らないが、刊本系の如くである。

野村本二部は「室町時代小説論」に引用されている本文の一部によると、A類に属することは明らかであるが、刊本の

あかぬ夜をあけぬとつくるあかつきの、八こゑのとりのうらめしきかな

に当る歌として、

うき鳥のねもしきりなり明ければ、また夕ぐれをまつぞひさしき　（甲本）

うき鳥のねもしきりなりきぬくの、またゆふぐれをまつぞひさしき　（乙本）

の歌が挙げられている。これは、前出の兵部卿の宮の後朝の歌であるが、この後朝の歌の存するのは、A類の刊本系と、それに拠ったと思われるB類の京大本のみである。従って、野村本は二部ともA類第三種の刊本系に近い伝本と考えられるが、歌の語句は刊本とは全く異なっている特徴ある本である。（本書については（一八一頁）補遺参照

秋　月　物　語

本作の伝本には室町期の古写本は見ることを得ず、いずれも寛永以降に下る写本、刊本である。題名としては「秋月物語」の外に「京極中納言姫君物語」「京極大納言物語」「京極大納言家物語」等の一類の書名をもつ伝本がある

が、後者はいずれも後人の命名であって、「秋月物語」が原題名と推定される。本作の伝本を分類すると、左の如く写本系と刊本系に大きく分れ、写本系は更に三種に分ち得る。

A類

第一種

矢野利雄氏蔵〔江戸中期〕写本　五冊

本書は「室町時代物語集第三」に翻刻されている。現蔵者は不詳。同書の解題によれば、黄色地唐草と桐花模様艶出表紙（八・八寸×六・四寸）。題簽「秋月物語　一（二）」（第三冊以降欠）。内題なし。本文字面高さ約七・五寸。（一）六一丁（二）七五丁（三）三六丁半（四）三五丁（五）二六丁。毎半葉九―一四行、各行一八―二三字。書写年代は元禄前後と推定されている。

東京教育大学図書館蔵〔江戸中期〕写本　二冊

淡縹色布目表紙（二七×一九・五糎）。題簽「秋月物語上（下）」。内題なし。本文字面高さ約二三・五糎。毎半葉一二行、各行三〇字内外。本文は右の矢野本と全く同じで、用字もほぼ一致し、矢野本における巻分けの個所は改行している。本書は矢野本系統の本からの転写であることが明らかである。

第二種

(イ)　東洋大学図書館蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　十冊

紺地金泥草木模様表紙（一六・六×二三・六糎）。見返し銀紙、料紙間似合紙。題簽、表紙中央「秋月　一（―十）」。

本文字面高さ約一三糎。毎半葉一三行、各行一四字内外。

(ロ) 内閣文庫蔵「文鳳堂雑纂第一一六」所収〔江戸中期〕写本（有欠）　一冊の内

「文鳳堂雑纂雑記部百十六」の後半部に合綴されている。外題内題共になく、「文鳳堂雑纂目録」に「京極中納言姫君物語」とある。全一〇九丁半、九行、二二―三五字。本書は平出鏗二郎氏が「室町時代小説集」に翻刻された。本書は中間に全篇の約三分の一に当る大きな脱文がある。

(ハ) 静嘉堂文庫蔵〔江戸前期〕写本　三帖

緑色絹布表紙（二三・四×一七糎）。綴葉装両面書、料紙鳥の子。各冊表紙左上に「無名物語」と墨書してある。内題なし。本文字面高さ約一八・五糎。（上）五九丁（中）六九丁半（下）六九丁半、毎半葉一〇行、各行二〇字内外。

第三種

天理図書館蔵〔江戸前期〕写本　三冊

紺表紙（二四×一八糎）。題簽、表紙中央「秋月　上（中下）」。内題なし。（上）九八丁（中）九二丁（下）九九丁。毎半葉六行、各行一八字内外。

B類

〔承応明暦〕刊絵入本 三巻　（静嘉堂文庫・岩瀬文庫・赤木文庫・国会図書館・刈谷図書館・慶應義塾図書館等蔵）　同上河南四郎右衛門後印本（静嘉堂文庫蔵）　同上寛文四年喜左衛門後印本（赤木文庫蔵）

題簽「秋月物語上（中下）」。内題「秋月物語上（中下）」。板心、白口、「秋月上（中下）（丁付）」。匡郭、単辺（二

〇・五×一六糎)。(上)三三丁(中)三一丁(下)三二丁、一二行、二一―二八字。挿絵(上)六頁(中下)各五頁。本書は無刊記本の方が元刷らしく板面が鮮明である。「秋月物語」の刊本としては、本書以外に異板本は見出されない。本書は「室町時代物語集第三」に翻刻されている。

以上の外に、東大国文研究室蔵奈良絵本零本一冊(京極大納言物語)、静嘉堂文庫蔵写零本一冊(秋月物語)が存するが、零本のため、A類に属することが明らかなだけで詳細不明。また「室町時代物語集第三」の諸本解題には、長谷川巳之吉氏蔵奈良絵本八冊、武田祐吉氏旧蔵写零本一冊が掲載されているが未見。その他、吉田幸一氏も三冊の写本を蔵せられている由である。

右の分類におけるA類本とB類本との間には、本文の分量に著しい違いがあるが、A類の三種は、叙述の大筋にさしたる変動はなく、物語中の和歌の異同も僅かである。小分類から順次に検討してゆくこととする。

A類第一種の諸本

A類第一種の矢野本と教育大本とは全く同系統の写本である。矢野本は五冊、教育大本は二冊であるが、矢野本の改冊の個所を、教育大本は改行としているところから、矢野本の方が先行すると考えられる。矢野本には、「許なくうせたまひける」の如く、「程」にすべて「許」の字を用いている外、「幾(行)すへも」「礼(例)ならす」などの当て字が多い特徴が見られるが、これは教育大本も同様である。

A類第二種の諸本

第二種として分類した(イ)(ロ)(ハ)の三本の本文は、それぞれに小さな語句の出入異同がある。(イ)の東洋大本と(ロ)の内閣本とは、ほぼ同系といってよい程に近いが、内閣本は大きな脱文がある外、誤脱のために文意を通しがたい個所が多い。(ハ)の静嘉堂本は、全体としては(イ)の東洋大本に近いが、所々叙述を節略していて、和歌も六首少なく、また和歌の語句をかなり変えている所がある。静嘉堂本が東洋大本と異なる個所を第一種の矢野本と比較してみると、東洋大本と矢野本と一致する個所が多いので、静嘉堂本は東洋大本の系統を引きながら、部分的に改訂した後出本であろう。従って第二種本の中では、東洋大本が三本を代表し得る本と考えられる。

A類三種の関係

次にA類の三種を比較すると、文章の上では、第二種本と第三種本とが接近し、第一種本は大分離れている。また記事の上では、第一種本が最も多く、第三種本が最も簡略である。以下に若干の個所を対比してみる。

(1) 本子のあひし姫が、継子のあひきやう姫に想いを懸ける中将の手引をする条。

第一種　矢野本	第二種　東洋大本	第三種　天理本
第一段　さても大みやのくわんはく殿は、中将殿ゝきやう国殿へかよはせ給ふとは、ゆめにもしろしめされす、さのみいたつらにひきこもりておわすらん、みやつかへもしたまはて、いつもめの殿もとにとのたまふ	さても大みやのくはんはくとのは、中将きやうこくとのかよひ給ふは、ゆめにもしろしめさすして、いつくにひきこもりておはすらん、うちの御みやつかひに(マヽ)したまひて、さのみめのとのかたにかとのたまへり	さて五月五日の夜は、大りの御せちゑに
第二段　さて五月五日の夜、くきやう天上人まい	さて五月五日の夜、大りの御せちゑに	

りあつまりて、大りにあそひけり、大なこん殿もまいりたもふ、ねうほうたちもきたのかたもひきくして、けんふつにまいりたもふ

第三段

あゐしのたまひけるは、よき隙成、礼のおにかはらもなし、たはかりてみんとのたまひて、中将をとゝめたもふ、あゐしは月みへおはして、大二のきみにのたまひけるわ、姫君の御心にまかせかのふまし、たはかりたまへとのたまへは、ともよからんようにと申ける

第四段

あひしはひめきみにあゐて、申させたまひけるは、こよひは大りに御あそひ候てきたのかた、又大なこん殿も中将もおはして、人すくなにさふらふ、いさやわれらもあそはんとて、ほうしやうしより、昨日ねうほうまれ人きたりてさふらふ、何かくるしかるへき、此人はひはをひきたもふ成、ゆふさりくわんけんしてあそひたまへとのたまいけれは、姫君はしめたる人ははつかしとのたまへは、何かくるしく候へき、わらわかしたしき人成、うらめしや、さのみ御こゝろおかれたてて、くきやうてん上人まいりあつまり給ふ、大なこんもきたの御かた、女はうたちひきくし、まいり給ふ

さてあいし、よきひまとおほしめして月見へおはして、大弐のつほねにの給ふやう、ひめ君の御こゝろにまかせはかなふまし、こんよよきひまなれは、あひちかつけまいらせはやとおもふなりとの給へは、めのとたち、こゝろへまいらせ候と申せは、うれしくおほしめして、やかてひめ君にまいりて、今夜はたいりに御あそひにて、みなくまいりたまへり、いさやわれもくはんげんして、あそび候はん、きのふほうしやうしよりまれ人きたりて候、ひはの上ず、くるしからぬ人なれは、めしてくはけんさせ給へとの給へは、まれ人ははつかしく候へとも、御はからひとのたまへは

とて、くきやう天上人いつれもまいり給ふ、大納言とのも北のかたも、女房たちおひきくして参給へは

あいしはよきひまそとおほしめし、月みゐおわして、大二のつほねに仰けるは、姫君の御心にまかせてはかなふまし、今夜はよきひまなれは、あい近つけ参らせはやと思ふはいかにとのたまゐは、めのとたちもこゝろへ申成とありけれは、うれしくの給ふそとて

姫君に仰けるは、今夜は大内の御あそひとて、みなくまいり給ふ、いさや我らもくわけんしてあそひ候はん、昨日ほうしやうしより、まれ人きたりてひはのしやうすにて候、くるしからぬ人なれは、めしてくわけんさせ給へとのたまへは、まれ人ははつかしく候へとも、御はからいとありけれは

まつるうたてさよ、誠のおとゝひならはかやうにおはせし、うらめしやとのたまへは、さまての事仰ありて

第五段

こゝろのうちには、あわれけに何事につけてもわつらわしき事のみのたもふ物かな、ま事のおとゝひもちたるならは、いかゝ嬉しからまし、よろつおもふ事、世の中おそろしけれは、人にいゝなくさむ事もなし、いかなるつみのむくひにか、おとゝひのひとりももたさる事よと、かなしくわひたまへり、さる許にあいしのたもふは、姫きみきちやうのうちにおはしませとありけれは、さもとはかりにて物ものたまはす

第六段

さてあひしかへらせたまいて、中将にのたもふ、いかに候ともかなはし、されともこよゐは、いつかたにいらせたまへとありけれは、ありかたき御こゝろさしかな、はつかしや、たかきもいやしきも、かゝる事はねたましきならひなるに、すこしもほいけなるわさなく、いよ〳〵うつくしけなるさまにみへたまへは、なさけふかき御こゝろかなと、うれしくそおあいしうれしくおほして、かへらせたまひて、中将に此よし申給へは、いかにこゝろをつくし候へともかなはし、こんよはしのひやかにいらせ給へとありけれは、中将ありかたき御こゝろさしかな、すこしもほいなけなるけしきなくて、いよ〳〵うつくしきさまにみえたまへは、なさけふかき御こゝろかなとのたまへは、あいしはおもはぬほあいしうれしくて帰給ひ、中将殿に此よしかたり給へは、ありかたき御心さしかなとよろこひ給へは、いやいかに御心をつくし給ふとも、すなをにてはかなふまし、しのひやかにいらせ給へとて

ほしける、さてあひしのたまひけるわ、かやうになさけをかけまいらせたりともはやくかはりはて給はんとありけれは、はつかしくおほして、これほとになさけかけられまいらせて、いかてかわすれまいらすへきとのたまへは、もとより御こゝろさしある身にても候はす、とりちかへられ、おもはぬほかのうきちきり、返々もはつかしく候そやとのたまひて

くものゐにあれたるこまはつなくともふた道かくる人はたのまし

といゝけんも、いまは我身の上とこそおもひしられてさふらふ成、よしや人わすれたもうとも、我わはすれしとのたまひけれは、いとおしくそおほしける、この許の御なさけと申、又なれまいらせて、わすれ候事あるへきかと、ふかくそちきりたまひける

第七段

さても日くれけれは、中将は御くしをなてゝ、たけにあまる御かつらをかけさせたまひ、ふちかさねの五かさね、むらさきのうちきに、あかきはかまめさせてみたまへは、みめうつくしきねうほう成、かのちきりこそ、まことに御はつかしく候へ、さりなから、君はわすれ給ふとも、わらはゝかはらしとありけれは中将此ほとの御なさけ、いつの世にわすれ申へきとその給ひける

さて中将の御くしをなてゝ、御かつらかけさせまいらせて、ふちかさねのからきぬに、むらさきのうちきぬに、くれなゐのはかまめさせて見給へは、まことにうつくしき上らうなり、あいし中しやうの御くしをなてゝ、かつらをかけさせまいらせ、藤重のからきぬにむらさきのうちきに、くれないのはかまめさせて見給へは、まことにいつくしき上らうなり、あいしはさきに、中

あゐしはさきに、中将はあとに、もしほのまへを御ともにていらせ給ひける

第八段

あひしはたゝいまはかりの御なこりとありけれは、いま〳〵しやとのたまひけるそ、おかしくおほへける

はさきに、中将はなかに、もしほのまひは御ともにていらせ給ふかませかきのほとりにて、あいしの給ふは、かのきみまことによのつねならすおはしませは、御らんするよりしては人のなさけをもわすれ給ふへし、このほとの御なこりたゝいまはかりとの給ひて、御そてにさなからすまのあまのしほたれころもとそみえ給ふ、中将あはれとおほしめして、いまはゝや、なにしにさやうにのたまふそや、いかてこの御なさけ、たしやうくわうこうをふるとも、わすれたてまつるへきかとて、さすかに御袖をぬらし給ふ、もしほのまひもともにうちなきてまいりける

将はなかに、もしほのまゐ御ともにて月みゐいらせたまい

さて月見のかたへいらせたまいて

扨月見へおはして

第二段と第七段は三本ともにほぼ変らないが、文章は第二種本と第三種本とが非常に近い。第三段と第四段も、叙述内容は同じであるが、文章は第一種本のみがかなり異なっている。残りの第一・五・六・八の四段は、それぞれ大きな異同が見られる。まず第一段は、第三種本のみが全く欠く。第一・二種本のこの段の記事は、物語の筋の運びには直接関係のないものである。前後の続き工合からすると、むしろ余分な感じを与えるのであるが、そのような記事

をあえて増補することはあり得ないことではないとしても、やはり第三種本が省略したと見る方が適当であろう。第五段は第一種本のみにあって、他は欠いている。どちらが先行形態であるかはにわかに判定し難いが、あひきやうの君が腹違いの妹であるあひしの君の好意をかえってわずらわしく思うという第一種本の叙述は、この物語における姉妹の関係の描き方に複雑を加えてくる点が見られるので、第一種本の増補と見る方がよいのではなかろうか。第六段は、三本の間に叙述の詳略が甚しい。第二種本は、第一種本の後半の、歌を中心とする部分が大幅に削られ、第三種本になると、第二種本の叙述が更に半分位に縮められている。この部分だけを見ると、第一種本→第二種本→第三種本の順に、叙述が省略されていった如くであるが、ところが第一種本のみに見える「くものゐに……」の歌は、第二種本・第三種本においては別の個所に出てくるのである。右の一節のやや後の方で、あひしの君の努力によって、中将とあひきやうの君とは結ばれるに至るが、それを聞いた継母が腹を立て、大納言にあひきやうの君を讒言する条で、東洋大本には、

さるほとにきたの御かた、もとよりこゝろさしとはおもへとも、うらめしや、

くものゐにあれたる駒はつなくとも、二みちかくるおとこたのまし

といひけん事、いま身のうへにしられたり、月花よりもめつらしきあいしに、ものをおもはするうたてさよとのたまへは、おにかはらのまひ、われもをとりまいらせす、うらめしく候なり、たゝ大なこんに申させおはしませと申けれは

とある。第一種の矢野本はこの所を

さてもきたのかたは、おもひ候へははらたつとて、おにかはらをめしてのたまへは、たゝ殿に申させたまへと申けれは

と簡略に済ませている。この「くものゐに」の歌がどちらの場面にある方が適切であるかは、そう分明には判じがた

いが、どちらかと言えば、第二・三種本のように継母の気持を叙べるのに引かれるよりも、第一種本の如く当事者であるあひしの君の言葉の中にある方が良さそうに思う。それと、矢野本では「くものゐに」の歌をはさんだ前後に、中将の言葉として、「これほとになさけかけられまいらせて、いかてかわすれまいらすへき」と「この許の御なさけと申、又なれまいらせて、わすれ候事あるへきか」という類似した句が使われていて、重複の感を与える。こうした点から見て、ここは第二・三種本の如き形が元で、第一種本は「くものゐに」の歌をより適切な場所に転用したのではないかと考える方が自然であろう。また第三種の天理本のこの段の叙述は、「ありかたき御心さしかなとよろこひ給へは」と「いやいかに御心をつくし給ふとも……」との二つの句の続き工合がなめらかでなく、これは第二種本の如き叙述を縮めたことから生じたものの如くに思われる。第八段は、第六段とは逆に、第二種本が非常にくわしく叙述しているのに対して、第一種本には第二種本の中の一部の句が採られているだけである。そしてこの場合には、中将を姉に譲るに際しての、あひしの君の気持が、第二種本では充分に叙述されているが、第一種本は簡単すぎて、「たゝいまはかりの御なこりとありけれは」の句の意味がはっきりしないし、「いまくしやとのたまひけるそ、おかしくおほへける」の句も、この場面にぴったりしない。従ってここも第二種本の方が先行形態とするのが妥当と言えよう。

（2）筑紫へ下った中将は、秋月にて国司の後家の尼に養われていたあひきやうの君にめぐり逢い、そこにて年を越す。尼が営む正月の祝の席で、女房にとりたてられた女達が歌を詠む条。

	第一種　矢野本	第二種　東洋大本	第三種　天理本
第一段	ししうのつほね御しやくさしをき、かを	しゝうの君御しやくさしをきて、かく	しゝうかほうちあかめて申ける
	うちあかめて	なん	わか君の久しき御よをかそふれは、

我きみの久しき御代をかそふれは、そらゆく月のたとへ成けり

かやうに申けれは、御ふた所なから御らんありて、やさしくもよめる物かな、[A]御しよねうばうのうたよみしらぬはいやしきに、かたちありさまこそよからめ、うたの道さへ心へたり、上らふねうはうとゆふともみくるしからしとおほして、[B]はしめより御なさけかけられしに、かゝるめてたさといゝ、ゆくすへのためといゝかゝるめてたき事はあらし、これにつけても、まさこのまへはおなし許の人なれとも、こゝろからにもとのまゝにて、あまつさへはなつかれて、いなかにとゝめられける、人をうらむるにをよはす、さる許に、ししうとのに御うへのめしのきぬを、哥よめるひきて物とて給ける

第二段

さて中しやう、いかに三ゐのつほね、哥の返ししたまへ、[C]哥よまては御しよのましはり成かたしと、おほせありけれは、あま御せん、いかやうにも申させ給へとせめ給へは、はつかしけにてとりあへす

君か御代いつるあさ日の山たかみ、みわか君のひさしき御代をかそふれは空行月のはてもなきかな

と申けれは、中将やさしくもよまれたり、[A]御所女はうの哥よみしらぬはいやしきに、うたのみちさへこゝろへたるやさしさよ、上らう女はうといふともくるしからすとて、御ふたところなからきよかんありて、御うへのめしきぬを、哥よみたるひきて物にくたし給ひぬ

中将おほせけるは、三位のつほね、哥の返ししたまへ、[C]哥よまては御所のすまゐなるへきかとのたまへは、あまいかやうにも申させ給へとありけれは、はつかしけにて

あさひかけみかきていつる君か代は空行月のはてもなき哉

と申けれは、やさしくよみけるとて、姫君の御きぬをくたしたひけり

さて三ゐのつほねもよみ候へと仰けれは、御はつかしく候と申せは、あま君いかやうにも申候へ、はやくとのたまへは、さらは申てみんとて

朝日影みかきていつる君か代は、としふるまゝにくまもなきかな

かけくまなくとしやふるらん

と申けれは、中しやうやさしくよめる、D

さんみ殿にもひきて物我せんとて、あま御せんのまいらせたるかうけんに、きぬ二つそへて給ける、E よのねうはうたちはうら山しかさらんとて、そめ物二つに、うつくしきこんのぬのひとつゝみそへて給りける

としふるまゝにくもりなきかな

と申けれは、やさしく申されたり、D さんみとのには、ひきてものわれせんとて、あま君のまいらせたりしかうけんに、きぬをそへてたひける、E よの女房もうらやましからむとて、そめものをたひける

と申けれは、やさしく申たりとて、D 是にも御ひきてものくたされける

この条の二首の和歌を見ると、第二種本と第三種本とはほとんど一致するが、第一種本は語句の異なる所があって、前条における文章の関係と同じである。次に第一段においては、傍線ABの句を第一種本は共に備えているが、第二種本はAの句のみであり、第三種本は二つともに欠いている。すなわち、前条の第六段と同じ性質の異同が見られる。しかしここでも、第一種本のBの句の叙述は文脈に錯雑した所がある上に、Aの句との続きもぎこちなさがあって、いかにも後から挿入した句との感を禁じ得ない。（Bの句に出てくる「まさごのまへ」というのは、中将が秋月の尼の館に宿を借りようとした時、邪慳に当った女である）また第三種本は、第二種本のAの句を省略した形であることはまず間違いないであろう。そこでこの段もまた、第二種本の形態が元で、第一種本はそれを増補し、第三種本は省略したものと考えてよいであろう。第二段においては、第一種本と第二種本とは、Eの句にやや詳略の差があるだけで、ほとんど一致するが、第三種本はCEの二句がなく、Dの句も簡略である。これも第三種本が叙述を省略したと見て差支えないであろう。

（3）中将が九州の武士を召し集め、都上りの用意をする条の一節。

第一種　矢野本

第一段　中しやうはいなかくたりのしるしに、たかかりさせてみんとのたまひける、みやこのほりのいそかしさとおもへとも、いなかのおもひてとありけれは、さへもんのちやう此よしをふれにける

第二段　おの〳〵うけ給りて、おいたるもはかきも、みな〳〵いさみおなし、このむ所の才わひとよろこひて、よもあけしかは、かりはのいてたち、いろ〳〵さま〳〵のしやうそくはなやかにきて、たけかさ、ゆこて、いろ〳〵の小袖、絵かきすりなんとのひたゝれ、めひはともにのり、我さきにうたんとそすゝみける

第三段　中将とのゝ御しやうそくは、ねりぬきにすゝしのおり物に、りんとうをかさねてめされたり、かすみに桜一枝ぬいたるすいかんに、つきほし十へたけかさに、あかちのきんらんにて、うりおうたせてめされたる、大二とのまいらせたるしらさきといふむまに、

第二種　東洋大本

さて中将とのゐ中下りのしるしに、たかかりさせて見んとの給へは、こくしうけたまはりて、さへもんのせうに申つけたまへは、やかてふれけり

大名かうけのさふらひともは、いつれもこのむことなれは、よろこひて、をの〳〵かりはのいてたち、いろ〳〵のしやうそく、おもひ〳〵のめいはにのりて、きくはとひの一もつとものりつれたり

中将との御らんして、おもしろくおほしめして、かりはの御いてたちこそめつらしけれ、からあやにりんとうをかさね、すゝしのおり物に、かすみにさくら一えたぬふたるすひかんめして、月ほしあらはしたるさしかさ、あか地のきんらんにてふちとりたるをめし、

第三種　天理本

さて又中将殿、たかかりしよもうとのたまへは、大弐承給、さふらいともにふれ給ふ

承ると申て、おの〳〵かりはのいてたちにて、思ひ〳〵のめい馬にのりつれ鷹すゑて出給ふ

中将殿出たちは、いつにすくれてはなやか也、からあやにりんとう重めしてかすみにさくら一ゑたぬいたるすひかんに、月ほしあらはしたる御かさに、きんらんにてへりとりたるをめし、なつけのむかはきひつこうてめされ、しらさきといふめい馬に

しろくらおきて、あつふさのしりかいにきんちらしのあふみ、とらのかわのきつつけに、へうのかわのあほりさしてめされたり、ゆふにうつくしくそ見え給ふ

なつけのむかはき、ほしあらはれてけたかきに、しらさきといふめいは、みのこうはねりぬきのことし、四のえたはこんのはゝきをし、ちやうかんのせすちはぬり弓をふせ、おもてには山河をなかし、ふきあらしははくらうをたゝませ、くさふかくきれて、さうのまなこはまん月をならへ、おゝひのかみはさわらにさかつて、れもんしやうのたきにたり、二つみゝはにほふをひかせ、やうこんは三すんにをきて、たつさのさしとはいとうくひれて、むねはたせんのほまつらのことし、しつけんのふしはたはねてさかりけゝしけいとうはたまをならへ、ととうはつめをかへし、せんしはみしかくして、いさんてをたやかなるに

しらくらをきて、あつふさの山てるはかりなるを、むらさきのたつなよつてかけ、御身かろけにめしつゝ、かりはにいてたまひて

つみゑつさいはるのうつら、ひはりにむすほゝれて、をちけたて、ひつとた白くらをかせ、あつふさの山てる斗なるに、いつもくつわをはけさせ、むらさきのたつなゑつてかけ、御身かろけにめされ、かりはへ出給ふ

すせんの人々はせちつて、うつらひはりをおいたて、けたて、こたか、はい

つによりあふところをちうてとりかけたかするかけて、あまたの鳥をとるほよせ、ひねりするあけ、いろ〳〵のふとに、中将殿おもしろく思召せい、おもしろき事かきりなし

七日の御かり成、かゝるめてたきけんふさるほとに、七日のたかかりも過ければすてに七日の御あそひ也

つ、むかしもいまもあらしとそ申あいけるは

この条も、第一段と第二段は、第二種本が第一種本と第三種本との中間にある形である。しかしここでも、第一種本のみに存するABの二句を見ると、Aについては何とも言いがたいが、Bは、その前の「いろ〳〵さま〳〵のしやうそくはなやかにきて」の句を更に敷衍した句で、重複している上に、次の「めひはともにのり」の句と文章が続かない。従ってこのABの句も、後からの挿入と認めてよさそうである。第三段は、第二種本のみが中間に、白鷺という馬の姿を形容したかなり長い句を有している。形としては第一種本と第三種本とが一致するが、その前後の文を見ると、語句の細部はやはり第二種本と第三種本とが近い。第二種本の、白鷺という馬の形容を叙べているくだりは、文意の通じがたい個所が多いので、第一種本・第二種本共にこれを省いた結果がたまたま一致したものと見ることが許されるのではなかろうか。第四段は、第一種本のみが全部を欠いている。これは第一種本の省略と考えられよう。

以上の三例は、「秋月物語」の全体の分量からするとごく僅に過ぎないが、そこに見られた三種の伝本の本文の関係と著しく異なるような関係を示す個所は、全篇を通じてみても見出すことができない。ちなみに、全篇に亘って三本の間にやや大きな異同のある個所を分類して、数字によってあらわしてみると（区切かたによって以下の数には多少の変動を来すが）、

（1）第一種本と第二種本とがほぼ同じで、第三種本のみが異なる所　四五個所
（2）第二種本と第三種本とがほぼ同じで、第一種本のみが異なる所　四九個所
（3）第二種本が第一種本と第三種本との中間に位置する所　一二個所

の如くである。この外に、（4）第一種本と第三種本とがほぼ同じで、第二種本のみが異なる個所と（5）第一種本が第二種本と第三種本との中間に位置する個所とが若干見られる。すなわち（1）（2）の場合が大部分を占めていて、この事実は、第二種本は第一種本と第三種本との両方と関係をもつが、第一種本と第三種本との間には、直接の交渉がないことを示している。ただ（4）（5）の例が僅かでも見られることが、そう考えることの障碍となるかもしれないが、それは前掲例文（3）の第三段、（1）の第八段の如き場合で、これも本文の内容を検討すれば妨げとなり得ないことは、先に考察した如くである。

次に三本の先後関係であるが、第二種本と第三種本との関係については、第三種本が第二種本を縮めたものであることはほぼ誤りないであろう。また第一種本は第二種本に較べて概して叙述が詳しいが、既にその相違の内容を検討してきたように、第一種本は第二種本に増補を加えたものと考える方がよさそうである。すなわち、第二種本を元として、第一種本と第三種本とが岐れ出たとするのが、最も妥当であろうと考える。第二種本の系統の伝本は、それぞれの本文が忠実な転写ではなくして、語句の細部に異同の多いという現象を示していることは、この系統の本が、この物語が生命をもって読まれていた時代において、もっとも流布していたのではないかと想像せしめるが、これも右の推定を助けるであろう。

A類とB類との関係

最後に、A類の写本系諸本に対するB類の刊本の本文を見ると、まずA類本に較べて著しく短かくなっている。「室町時代物語集」の頁数によって示せば、A類第一種の矢野本が一三〇頁を費しているのに対して、刊本は六七頁で、およそ半分に過ぎない。ところでこの「秋月物語」の場合は、刊本よりも書写年代が古いと明らかに認め得るような写本は管見に入ったものがない。従って、一概にB類の刊本がA類の写本系伝本の叙述を節略したものと決めてかかることは問題があろうが、次に掲げる刊本において欠けている記事を見れば、やはりA類本の方が先行の形態と考えるのが自然であろうと思われる。A類本にあってB類本にない主な記事は左の如くである。

（イ）中将が太秦詣の折に、あひきやうの君をかいま見ること。ただ「大納言のひめきみのことをきゝ給ひ」とだけあって、すぐ文を送る段に入る。

（ロ）あひきやう君の失踪後、あひし君が清水に詣でて祈願すること。

（ハ）中将が筑紫へ下る途中、赤間が関にて遊君かうますに想いを懸けられること。

（ニ）同じく道中にて、同行の冠者（清水観音の化身）が中将に説法すること。

（ホ）箱崎八幡にて、冠者が八幡の本地を説くこと。

（ヘ）安楽寺にて天神の由来を説くこと。

（ト）秋月にて中将が大弐に向って、嵯峨天皇の故事、きんなら太子の故事を説くこと。

その他、筑紫の侍共が中将の王番を勤める条、都上りの途中、大宰府天神にての法楽の条などをはじめとして、総じて叙述が縮められている。また中将が京へ上る道中の記述以後は、内容もA類本とはかなり異なっている。こうしてみると、総じて宗教的な色彩が稀薄になっていることが認められるであろう。時に応じて神仏の縁起由来や故事来歴

の類を説くことが室町期における一般的な傾向であることを思うと、やはりA類本の形態がB類本よりは古いと考えざるを得ない。

次に刊本の本文を、A類の三種の写本と比較すると、前半は第二種本に近く、後半は第一種本と一致する所が多く見える。前掲の、A類三種の伝本の本文対照を行なった個所の、刊本の本文を次に掲げてみる。

(1) (第二段)五月五日の夜、うちのせちゑとて、公卿殿上人参り給ふ、大納言殿も北方女房たちひきくして参り給ふ

(第三段)あいしは月見へおはして、大弐をめし、こよひよきひまなれは、をして彼人を入んとおもふ也とおほせけれは、心えてとぞ申ける

(第四段)さて姫君にちかつき、こよひはみかとに御あそひあり、いさやわれ〳〵もくわけんしてあそび侍らん、きのふほうしやうしよりまれ人のわたり侍るか、ひわの上手にて候、くるしからぬ方なれは入申さんとのたまへは、いかにも御はからひと申さるゝ

(第六段)あいしの君帰りて、中将にかくとしらせ、

(第七段)かみかきなて、女のしやうそくまいらせけれは、もとよりいつくしき御かたちなれは、まことの女房とそ見えし、(第八段)中将はあいしの君のなさけをかんして、たもともしほるはかり也

さてもしほのまへを御ともにて、月見へ入せまし〳〵

A類の三本のいずれよりも簡略になっていて、三本のどれに対応するとはっきりは言えないが、所々の語句の類似を求めてゆくと、第二種本を縮めたとするのが一番よさそうである。なお第一段を欠いている点は、第三種本と同じであるが、全篇を通しての省略個所は第三種本と一致しない所が多い。また、例の「くものゐに」の歌は、刊本では第二・三種本の相当個所においても欠けている。

（2）（第一段）しゝうのつほね御しやくをさしをきて

わかきみのひさしき御代をかそふれは、そらゆく月のたとへなりけり

と申けれは、やさしくもよめるものかな、心さしのほとのしゆせうさよ、ひきて物とらせんとて、からあやの小袖一かさねくたされける、めんほく身にあまりてそおほえける

（第二段）三位のつほねもこれをうらやみて、まことにうたをよまては、御しよのましはりなりかたしと、はつかしけにてかくそつゝけゝる

きみか代はいつるあさ日の山たかみ、みかけくまなくとしやふるらん

中将、やさしくもよみたるものかなとて、これも小袖一かさねたひけれは、のこりの女はうたち、けなりげにてゐたり、ひめきみのかたよりとて、女はうたちにのこらすひきて物し給へは

この条も、地の文はどの写本に基づいたか明らかでないが、歌は二首とも、第一種本のそれと全く一致している。これを見ると、どうしても第一種本との直接の関係を認めざるを得ない。

（3）（第一段）さて中将殿は、いなかくたりのおもひでに、たかかりをさせて見ばやとおほしめし、大弐とのをめされ、A ちんせいのゆみとりども、みやこのほりのいとなみにひまあるへきとはおもはねとも、これまてくたる事は又かたかるへし、とてもおもひでなれは、きゝをよひたるいきのまつはらにて、たかかりさせて見たくおもふ也、B それとてもたみのわつらひ、ものゝふのいたみに成ならはやむへし、なんぢはからへとおほせらるれは、こくしうけたまはり、いかて諸人のいたむ事侍るへき、君の御心たになくさみ給はゝ、申つけ侍らんとて、御前をたちて、ちんせいの大みやう小みやうにむかつてのたまひけるは、中将殿かたくの御まいりよろこひおはします也、とてものおもひでに、たかかりを御らんしたきとの御ちやう也、いそき出たちをしたくあれとおほせけれは

（第二段）
若殿ばらこれをきゝて、我等かのそむところなりとひしめきあへり、老たるともからも、ひころけいこのいぬかさかけ、此たひ出して中将殿の御きけんにあつからんとそおもひける、すてにその日になれは、かりはのいてたちおもひ〳〵にしたりける、C たけかさ、うつほ、えひら、むかはきに花をかさり、ひたゝれはかましんしやうにきなし、とり〳〵のめいばにあつぶさかけ、しらあはかませてうちのり、一せい〳〵ひきわけて、いきのまつはらへそいそきける

（第三段）
中将殿御いてたちも花やかなり、はたには白きねりぬき、すゝしのおり物に、りんたうをゑかきたるをかさね、大もんのはかま、かすみさくら一えたぬひたるすいかんをめし、月ほしすへたるくれなゐのあふきをかさし、D 大弐とのゝまいらせられしらさきと云名馬、七き八分ありけるに、あつふさのしりかひかけさせ、きんみかきのあふみに、いつかけのくらに、うらのとまやのあれたるをまきゑにかゝせ、とらのかはのきつけに、へうのかはばせんをかせてめされたれは、ゆうにやさしく、らうたけたる有さま也、御馬のせんこには大弐とのとてんないさゑもん、五十よきにてしゆこしたり

（第四段）
きこふる松はらになれは、一千よきのせこのもの、いちもつの犬ともをひはなし、うつら、ひはり、しき、ひよとりなとをひたて、大たか小鷹をはなちあはせ、きつね、たぬき、鹿、うさきなとをかり出し、ひころけいこのかさかけ、くさしゝはこゝなりと、ゆんてにあひつけてはいておとし、めてにそむけてははたといる、我も〳〵とかけまはり、中将殿に御目にかくるきんごくの僧俗なんによきゝをよひ、ところをあらそひ、くんしゆをなしてこれを見る、ぜんだいみもんのけんふつ、これにすきたる事あらしとそ申あひける、中将殿めてたきけんふつみやこにまさりたりとて、御よろこひかきりなし、さてしたい〳〵に御ひきて物をたまはりけれは、みな〳〵かたしけなしとていさみあへり

この条は、刊本がA類のどの本よりも詳しい。こういう個所はごく稀なのであるが、たとえば第一段の傍線Bの部分などは、増補であることを思わせる句である。また、ACDの句は第一種本に拠ったのではないかと思われる。しかし一方、第四段は第一種本には欠けている部分で、この段の刊本の内容も第二種本に近い。

このように、A類本の中には、刊本の本文に正確に対応する本文をもつ本は見出されないが、部分的に最も近い関係を有するのは第一種本である。それが明瞭にあらわれている個所を、もう一例挙げておく。

秋月に辿り着いた中将が尼の館に宿を借り、その夜あひきやうの君と、笛と琴とで歌をよみ交す条

A類第一種　矢野本

又ひめきみてうしをかへて、かくそふかせ給ふ
もゝしきの大みや人はたれならん、そなたをいわゝ我も見られん
中しやううれしくおほして、とりあへす
わすれめやむかしありつるみやこ人、
月みの御しよに誰かかよいし
おし返し〳〵ふき給へは、中しやうにてやおはすらん、それならはたれやの人かしるへきそとおほして、きちやうのうちよりひそかにしのひいて、中のまのとのひまより御らんすれは、ねり色の壱かさねに、かたむらさきの所〳〵におひたるに、かきころもはかりにて、やうてうもちそひて、御くしをはうしろさまにゆひなして、しをかせにくろみて、やせおとろへておはしけり、みし人にはにたりけ

A類第二種　東洋大本

さてひめ君てうしをかへさせ給ひて、かくそひき給ふ
もゝしきや大宮人はたれならむ、そなたをいはゝわれもしられん
中将うれしくおほして、とりあえす
わすれめやむかしありつるみやこ人
月見の御所にたれかかよひし
とふき給へは、ひめ君ふしきや、もし中将にておはすらんと、かくそひき給ふ

B類　刊本

しはらくありてひめきみは、ことのてうしあらためて
もゝしきの大みや人はたれならん、そなたをいはゝ我もしられん
中将うれしくおほしめして
わすれめやむかしありつるみやこ人
月見の殿にたれかかよひし
とをし返しふき給ふ、さて中将殿にておはしますにこそ、いかにとしてこれまてはくたり給ふそと、ひそかに立出中の間のしやうしのひまより御らんすれは、中将殿ありしにもにす、かきのころもを身にまとひ、御くしはうしろさまにゆひなし、しほかせにくろみ、やせをとろへておはしける、ひめきみむねっふれて、うつゝともさらにおほしめさす、うれしきにも、まつなみた

りとおほしけれとも、さたかに中しやうとは見ゑ給はす、たひやつれなる御ありさま、しほ〳〵として、よろつうちあんしおほしめす、よう〳〵御らんすれは、すこしもたかわぬ中将そとみたまひて、うつゝともはきまへ給わす、いそき帰りうれしきにもつらきにも、なみたはかりにかきくれて、やるかたなくそおほしける、やゝありてきちやうのうちに入給ひなかるゝなみたをおさへ、かくなん

ゆめならすうつゝに人を見つるかな、
そもおほつかな誠かわきみ

かやうにありけれは、中しやうはやく〳〵しらせ給ひけるとて

しらぬ道こゝろつくしの秋月に、たとり〳〵もたつねくるそよ
かきりありているたにおしき秋月を、
いかにせよとてくもかくすらん

かやうにありけれは、姫きみも又かくなん

かきりありてめくりおふへきおくるまの、我をへたつか秋月のくも

其後くわけんあまたふき給へとも、たかそすゝみけるが、やかてうちに入せ給ひて、ことをひきよせ

ゆめならすうつゝにこゑをきゝつるになをおほつかなまことかはきみ

かやうにひき給へは、中将はやしられ給ひけるうれしさよとて、とりあへす

しらぬみちこゝろつくしの秋月に、やといへなれはたつねくるそよ
かきりありているたにをしき秋月を
いかにせんとて人もかくすらむ

とすみやかにふき給へは、ひめ君さてはうたかひもなしとて、いよ〳〵御なみたせきあへすして、かくなん

かきりありてめくりあふへき秋月を
へたつるみねにいてもやられす

夢ならてうつゝに人を見つるかな、
そもおほつかなまことかはきみ

中将殿きこしめし、さてはしらせ給ふにやとうれしくて

かきりありて入たにおしきあき月を
いかにせよとてくもかくれぬる

かやうにありけれは、又ひめきみ

かきりありてめくりあふへきをくるまの、われをへたつるあき月のくも

たかひに御心はかりかよへとも、さたかにあふへきたよりなし

ひの御なみたにくれて、御こゝろはかり　とひき給ひて、たかひの御こゝろかよ
かよへとも、さすかおふへきたよりもな　へとも、さすかあふへきたよりなし
し

姫君が、笛を吹く中将を覗き見することは、矢野本と刊本とにあって、東洋大本にはなく、その部分の両者の文章も非常に類似していて、刊本が矢野本の本文に基づいて、それを縮めたと考える外ないようである。更に右の三本の間で、詞句にかなり大きな相違のある「ゆめならす」と「かきりありて」の二首の歌においても、矢野本と刊本とがほとんど一致している。

このように、部分的には刊本とA類第一種本との直接の関係を否定し得ない材料が存するのであるが、全篇を通じてこの現象があらわれている訳ではないので、刊本の祖本がA類第一種本であったとは言い切れない。刊本の本文は、A類第一種本と第二種本との両方を参照して作成されたか、あるいは第二種本と第一種本との中間にある如き伝本に基づいたか、この二つの場合を想定することが当を得ているのではないかと考えられる。

朝顔の露

本作の伝本は刊本が主体をなしていて、刊本系統以外の本文を有する写本は見出すことができない。題名は、刊本の古いものは「朝顔の露」とし、後に「朝顔の露の宮」と改めている。写本に「草木のさうし」と題したものがあるが、後人の命名と思われる。伝本は次の通りである。（刊本の板式については「室町時代物語集第三」の解題参照）

(イ) 横山重氏蔵〔室町末江戸初間〕絵入写本　一帖

折本、香色表紙（三二×二〇・八糎）。題簽「あさかほの露」内題「あさかほのつゆ」。本文字面高さ約二九糎。巻末に「此一巻者宗祇法師之／真筆無疑也一覧次記之己亥／正保二年二月日八十歳玄陳」の識語がある。

〔寛永〕刊絵入本二巻　（横山重氏・天理図書館上欠蔵）

本書は「室町時代物語集第三」に翻刻されている。内題「あさかほのつゆ」。

同右覆刻本　（国会図書館下欠蔵）

国会本は丹緑本一冊。本書は「室町時代物語集第三」の解題には、前掲の寛永板と同板とされているが、本文字面及び挿絵の匡郭の寸法が、寛永板と較べてわずかに縮んでいるのと、挿絵の細部に微妙な違いが認められるところから、寛永板の覆刻ではないかと思われる。

明暦四年山田市郎兵衛刊絵入本二巻　（果園文庫旧蔵）

果園文庫本は現在の所在が知れず、他には同板本を見ることを得ない。

延宝八年万屋庄兵衛刊絵入本二巻　（天理図書館蔵）

本書は明暦四年板の後刷で、ただ下巻の末尾の二丁のみは板を新しくおこしている。

国会図書館蔵〔江戸前期〕写本下欠　一冊

共紙表紙（二四・一×一七・二糎）。全巻に亘り原料紙よりやや大きな紙で裏打を施す。原料紙は縦二三・九糎。外題「あさかほのさうし」。内題なし。本文字面高さ約二〇・五糎。三四丁半。八行、二〇字内外。

(ロ) 万治二年松会刊絵入本二巻　（横山重氏蔵）

本書は内題を「あさかほのつゆのみや」と改めたが、以下の刊本はいずれもこの万治板の題名を継いでいる。

寛文四年山本九左衛門刊絵入本 二巻　（東北大学図書館蔵）

本書の本文は、右の万治二年板と、下巻の第一丁表裏、及び第十丁裏の末尾数字を除いて、字体から字詰まですべて一致している。万治板を覆刻したものであろう。但し、万治板には下巻の巻頭に内題がないのに対して、本書は「あさがほ　下」と入木している。そのために、下巻の第一丁のみは、万治板を離れて新たに板を起したのであろう。なお、挿絵は万治板とはやや異なっている。本書は「近古小説新纂初輯」・岩波文庫「お伽草子」・雄山閣文庫「御伽草子二」等に翻刻された。

〔寛文〕松会刊絵入本 二巻　（岩瀬文庫蔵）

岩瀬文庫本には、「絵入くもの梯」とある題簽が附してある。これは他本のものであろうか。内題は「朝かほつゆの宮」。

刈谷図書館蔵元文二年写本　一冊

濃縹色表紙（一四・四×二一・五糎）。題簽「草木のさうし」。内題なし。奥書「元文二年巳神無月沢井氏女」。本文字面高さ約一二・五糎。六三丁、一五行、約一一字。

(ハ)　正徳五年近江屋九兵衛刊絵入本 二巻　（東洋文庫・大東急記念文庫・竜門文庫等蔵）　同 鶴屋喜右衛門刊本（岩瀬文庫蔵）

近江屋板と鶴屋板とは同板で、岩瀬文庫蔵の鶴屋板には刊年がなく、「大伝馬三丁目／鶴屋喜右衛門板」とのみある。しかし、島津久基博士は「近古小説新纂初輯」の解題に、「正徳五年乙未正月吉日／大伝馬三丁目／鶴屋喜右衛

門板」の刊記を有する久原文庫本を挙げられている。現在の大東急記念文庫には、その本は見出せないが、もしそういう本があったとすれば、近江屋板と鶴屋板との先後は、にわかに決定できない。

(二) 京都大学国文学研究室蔵天保六年写本　一冊

茶色表紙（二七×二〇・二糎）。外題「あさかふの露　全」。内題「あさ貞の露」。尾題「あさかほの露終」。本文字面高さ約二四糎。三五丁、一二行、二六字内外。奥書、終丁表に「天保六未年閏七月　大寺平兵衛書」とあり、その裏に「名東郡北新居村／大寺平兵衛蔵」と記す、

次に右の諸本の本文について述べる。

(イ)の横山氏蔵絵入写本は、書写年代が現存最古の刊本よりも先立つのではないかと推定される古本であるが、本文は次の寛永板と、字句の末に一、二字の小異が見られる程度で、ほとんど変らない。かえって、この写本には書写の際の脱落かと思われる個所があって、寛永板の本文を補正し得る所は少ないようである。

明暦四年板は今見ることを得ないが、横山氏の調査によれば、延宝八年板と、下巻の巻末一部を除いて同板である由なので、延宝板によって寛永板と比較すると、両者の本文には、一字か二字のごく僅少の違いが散見する程度である。

延宝八年板が新たに板を起した下巻の巻末二丁分の本文は、横山氏の解題に、明暦板とやや相違し、十字程度までの字句を省略した所が三個所数えられると報告されている。

国会図書館所蔵の写本は、寛永板の上巻に当る部分のみで、本文も寛永板と全く変らない忠実な写しである。

(ロ)の万治二年松会板は、(イ)の寛永板と明暦板との両方を参照して本文を作成しているが、その外独自の違いのある個所も見られる。しかし、その違いの程度は僅かである。ただ巻末の「よの中は」の歌の次に「しやうこも今も末代も。ためしすくなき事共とかんせぬ人はなかりけり」の一文を添えている。これは以下の諸刊本に継承されている。

寛文四年山本板は、前述の如く一部を除いて万治二年板の覆刻と思われるもので、万治板を覆刻しなかった下巻の第一丁と第十丁の末尾に僅かな相違が見られるに過ぎない。

寛文頃の松会板の本文は、万治二年板に拠っているが、更に字句の末に独自の改訂を数多く行なっている。全体として、語句を少しずつ省略した傾向が見られる。

刈谷図書館本は、寛文頃の松会板とほとんど同じで、松会板を写したものであろう。

(ハ)の正徳五年板は、(ロ)の系統の刊本に拠ったと思われるが、省略、改訂が著しい。上巻の前半は、所々語句を節略している程度であるが、その後は非常に大きな省略や、詞章の書き変えを行なっている。

参考までに、以上の刊本の本文の一節を左に対照しておく。

寛永板	明暦四年板 延宝八年板	万治二年板 寛文四年板	寛文松会板	正徳五年板
ひめ君御めさめ御らんすれは、ありしはゝうへはましまさす、こはいかにとなけき給ふことかきりなし、いよ〳〵はゝうへの御むさうき	ひめ君御めさめ御らんずれば、有しはゝうへはましまさず、こはいかにとなげき給ふ事かぎりなし、いよ〳〵はゝうへの御むさうきゝ	ひめ君御めさめ御らんすれは。ありしはゝうへはましまさすこは。いかにと。なけき給ふことかきりなし。いよ〳〵はゝうへの。御む	ひめ君御めさめ御らんすれは、有しはゝうへはましまさす。こはいかにとなけき給ふことかきりなし。いよ〳〵母うへの御むさうきゝ	ひめきみ御めさめ御らんすれば、ありしはゝ上はましまさす、こはいかにと、なけ給ふ事かきりなし、いよ

ゝ給ひ、御心ほそくおほしめしけるか、されとも、はゝうへのこくらくせかひにましますとの給へは、なによりもつてうれしくおもふなり、みつからもいかなる人にも見へよ、こしやうのゑんになるへきとの給ふは、こよひのみやの御事にてやあるらん、そのうへたた人ならぬ御身なり、いかゝはせんとおほしめし、このほとのつよき心もひきかえて、なにとなくなつかしきさまにてまち給ふ

さるほとに、つゆのみやは立かへり給ひて、その一日のくるゝを、ちとせくらさせ給ふ御こゝちして

給ひ、御心ぼそくおぼしめしけるが、されども、はゝうへのごくらくせかいにましますとの給へば、なによりもつてうれしく思ふ也、みづからもいかなる人にも見えよ、ごしやうのえんになるへきとの給ふは、こよひのみやの御事にてや有らん、そのうへたゞ人ならぬ御身なり、いかゞはせんとおぼしめし、このほどのつよき心もひきかへて、なにとなくなつかしきさまにてまち給ふ

さるほどに、つゆのみやは立かへり給ひて、その一日のくるゝを、ちとせくらさせ給ふ御心ちして

さうきゝ給ひ。御心ほそく思召けるか。されは共はゝうへの。こくらくせかいに。ましますとの給へは。なによりもつて。うれしくおもふなり。みつからもいかなる人にもみへよ。後生のえんになるへきと。の給ふは。こよひのみやの御事にてやあるらん。そのうへたゝ人ならぬ御身なり。いかゝはせんとおほこし[マ]し。此ほとのつよき心もひきかへて。なにとなくなつかしきさまにて[G*]

給ひ、御心ほそく思召けるか、されは共[B]はゝうへこくらくにましますとの給へは、何よりもつてうれしき也[D]。みつからもいかなる人にも見えよ、後生のえんになるへきとの給ふは。こよひの宮の御事にてや有らん。そのうへたゝ人ならん御身也、いかゝはせんと思召。[F]つよき御心も引かへて、何となくなつかしきさまにて[G*]

く[A*]御心ほそく思召けるが、されは共[C]母上のしやう仏したまふとの給へは[E]何よりうれしく、みつからもいかなる人にも見えよ、後生のゑんになるへきとの給ふは、こよひのみやの御事にてやあるらんその上たゝ人ならぬ御身なり、いかゝはせんとおほしめし、このほとのつよき心も引かへて、何となくなつかき[マ]さまにて[G*]

をはしけるか、日もやうく〳〵くれければ、あさかほのもとに御いてあり、こゝかしこに人めをしのひ給ひし御すかた、かのなりひらのいにしへ、二条のきさきを忍ひ、あるときはまはらなるいたしきのしたにかくれふし、月やあらん、はるやむかしとなかめしも、今こそ思ひしられ侍る、されはよものけしきもしつかに、人をともしつまりけれは、あさかほの御そはちかく忍ひいり、つまとをほと〳〵とたゝき給へは、あさかほのうへかねて御心えましませとも、たれやらんととひ給ふ、つゆのみやとりあへ給はおはしけるが、日もやうく〳〵くれければ、あさがほのもとに御いてあり、こゝかしこに人めをしのび給ひし御すがた、かのなりひらのいにしへ、二条のきさきを忍び、あるときはまばらなるいたじきのしたにかくれふし、月やあらぬ、はるやむかしとながめしも、今こそ思ひしられ侍る、さればよものけしきもしつかに、人をともしづまりければ、あさかほの御そばちかくしのび入、つまどをほと〳〵とたゝき給へば、あさがほのうへかねて御心えましませ共、たれやらんととひ給ふ、露のみや取あへ給はず

をはしけるか。日もやうく〳〵くれければは。あさかほのもとに御いてあり、こゝかしこに人めをしのひ給ひし御すかた。かのなりひらのいにしへ、二条のきさきを。忍ひあるときは。まはらなるいたしきのしたにかくれふし。月やあらん、春やむかしとなかめしも。今こそ思ひしられ侍る、されはよものけしきもしつかに。人をともしつまりけれは。あさかほの御そはちかく忍ひいり。つまとをほと〳〵と。たゝき給へは。あさかほのうへかねて。御心えましませとも。たれやらんととひ給ふ、つゆの取あへ給はす

おはしけるか。日もやうく〳〵くれけれは、朝かほのもとに御いて有。こゝかしこに人目をしのひ給ひし御すかた。かのなりひらのいにしへ、二条のきさきをしのひ。あるときはまばらなるいたしきのしたにかくれふし。月やあらん、春やむかしとなかめしも、今こそ思ひ[L]しられけれ。されはよものけしきもしつかに人をともしつまりけれは。あさかほの御そはちかくしのひいり、つまとをほと〳〵とたゝき給へは。朝かほのうへかねて御心えましませとも。たれやらんと[N]とひ給へは。つゆの宮取あへ給はす

おはしけるが、日もやう〳〵くれけれは、あさがほのもと[H]へ御いてありこゝかしこに人めを忍ひ[I*]、つまとを[J]をとつれましませば。ひめ君御心えましませとも、たれやらんとと[K]かめ給ふ、みや[M*]あへ給はす

す

さきのよにこのよに
きよとちきりきな、
のりのころもをいま
そきにけり
ひめ君御返哥

のりころもきてやき
ましと思ひしに、き
みのきたるはこひの
ころもか
とありけれは、みやか
さねてかくなん
きのふよりけふはお
もひのそめまさり、
なをいろふかきこひ
ころもきる
と侍へれは、ひめ君あ
らうつゝなの君の御心
やとの給ひ、つまとを
ひらき給へは、みやの
御心のうち、ゆきまを
しのくうくひすの、は

さきのよにこのよに
きよとちぎりきな、
のりのころもをいま
そぎ[O]にける
ひめぎみ御返哥

のりころもきてやき
ましとおもひしに、
きみのきたるはこひ
のころもか
と有けれは、みやかさ
ねてかくなん
きのふよりけふはお
もひのそめまさり、
なをいろふかきこひ
ころもきる
と侍べれば、ひめ君あ
らうつゝなの君の御心
やとの給ひ、つまどを
ひらき給へば、みやの
御心のうち、ゆきまを
しのぐうぐひすの、春

さきのよにこのよに
きよと契りきな、の
りのころもをいまそ
きにけり
ひめ君御返哥

のり衣きてやき[R]まし
く思ひしに。君のき
たるはこひのころも
か
とありけれは。みやか
さねてかくなん
きのふよりけふはお
もひのそめまさり。
なをいろふかき恋衣
きる
と侍へれは。ひめ君あ
らうつゝなの君の御心
やとの給ひ。つまとを
ひらき給へは。宮の御
心のうち。ゆきまをし
のく。うくひすの。は

さきのよに此よにき
よとちきりきな、法
の衣を今そきにけり
ひめ[P*]

のり衣きてやき[R]まし
く思ひしに、きみの
きたるはこひのころ
もか
みや[S*]

きのふよりけふは思
ひの染まさり、なを
色ふかき恋ころもき
る
と侍れは、ひめ君あら
うつゝなの君の御心や
との給ひ。つまとをひ
らき給へは。宮の御心
のうち、雪まをしのく
うくひすの。春を待え

さきのよにこの
よにきよと契り
きな、のりの衣
を今そきにけり
ひめきみ[Q]とりあへ
す

のり衣きてやき[R]
ましく思ひしに
君のきたるは恋
のころもか
みやもそゝろに御[T]
うれしく
きのふよりけふ
は思ひの染まさ
り、なを色ふか
き恋ころもきる[U]
ひめきみも御心た[V]
たと〳〵しく、あ
らうつゝなの君や
との給ひ、つまと
をひらき、いさな
ひ入まいらせ、[V*]日

るをまちゑて花にたはふれ、そそろにこゑをいたすふせいし、さもめつらかにおほしめしひころ御心つくし給ふこと、まめやかに御ものかたりあり、ちよをひとよとちきり給ふ事かきりなし

をまちえて花にたはふれ、そゞろにこゑを出すふぜいし、さもめづらかにおぼしめし、ひごろ御心つくし給ふこと、まめやかに御ものがたり有、ちよをひと夜とちぎり給ふ事かぎりなし

るをまちゑて。花にたはふれ。そゝろにこゑを。いたすふせいし。さもめつらかにをほし召。ひころ御心つくし給ふこと。まめやかに御ものかたりあり。ちよをひとよと。ちきり給ふ事かきりなし。

て花にたはふれ、そゝろにこゑをいたすふぜいし。さもめつらかに思召、ひころ御心つくし給ふこと、まめやかに御物かたり有。ちよを一よとちきり給ふ事かきりなし。

ころ御心つくし給ふ[w]御事、まめやかに、[x*]ちよを一よと御ちきり浅からず[y]

右の本文中、傍線を附したのは、寛永板に較べて字句の相違のある個所、*印は省略のある個所である。右を見れば明らかなように、明暦延宝板は寛永板とほとんど同じで、濁点が多くつけられている程度である。万治二年板は、Gの如きやや大きな脱文や、Rの如き誤刻があり、それが、以下の寛文松会板・正徳五年板に継承されている。寛文松会板になると、小さな異同や省略がふえ、正徳五年板に至っては、IやVのような大きな省略が行なわれると共に、詞章の変改がなされた部分も目立っている。

(二)の京大蔵天保六年写本は、(イ)の系統本、特に寛永板に拠ったものと思われるが、次の二個所にやや大きな相違をもっている。一つは、露の宮が朝顔の上をかいま見て心あくがれ、乳母の青柳の前に想いを語る条の一節で、

寛永板

さて、いかなる人にておはしますそと、とひまいらせけれは、御なのりあるへきもおもはつかしくおほしめせとも、

天保六年写本

さて、いか成人にておはしますと、とひまいらせけれは、御名のりあるへきもおもはつかしく思召とも、あまりにな

あまりになさけふかく申せは、いかゝはつゝみてもせんなしとおほしめし、いまはなにをかつゝみ侍らん、つゆのみやとはみつからか事なり、あたなるこひちにまよひ、これまてきたりて有なりとの給へは、あをやきのまひきゝまひらせ、さてはつゆのみやにてわたらせ給ふかや、[A]またあたなるこひちとはあさかほの御事なり、されはこひちのみちほとわりなき事はなし、かゝるくものうへ人さへ、かやうにたた一人あこかれいて給ふそや、たとへむめかえきこしめし、いかなるつみにをこなはるゝとも、いかてなさけなくかへしまひらすへきと思ひ、いかにや君きこしめせ、あさかほのうへと申は……

さけふかく申せは、いかゝはつゝみてもせんなしと思召、今はなにおかつゝみはんへらん、露宮とはみつからか事也、あたなる恋路にまよひ、是まてきたりてあるなりとの玉へは、あをやきの前きゝまいらせ、さてはつゆの宮にて渡らせ給ふかや、かゝる雲の上人さへ、恋ゆゑかやうにたゝ一人あこかれ出給ふかやと、[B]さまくいたわりまいらせれは、宮の玉ふよふ、我あさ貞のうへをかくまてしたひきたりし事、たとゑ梅ケ枝とのゝ聞し召、いかなるつみにおこなわるゝとも、いかてむなしく帰らんやと、[C]打なけかせ給へは、青柳きゝて、君きこしめせ、朝貞のうへと申は……

寛永板のAの句が京大本には省略され、逆に京大本には、寛永板にないBCの句が挿入されている。特にBCの場合は、これによって、「たとへむめかえきこしめし、いかなるつみにをこなはるゝとも……」の句が、寛永板では青柳の前の心中を述べたものであるのに対して、京大本では露の宮の言葉になっている訳である。

今一つは、先に刊本五種の本文を対照して掲げた部分の終りの所からで、

きのふよりけふはおもひのそめまさり、なをいろふかきこ
ひころもきる

と侍へれは、ひめ君あらうつゝなの君の御心やとの給ひ、つまとをひらき給へは、みやの御心のうち、ゆきまをしのくうくひすの、はるをまちゑて花にたはふれ、そそろにこゑをい

きのふより今日はおもひのそめまさり、なを色ふかき
恋衣きる

と侍れは、姫君きこしめし、あらうつゝなの君の御心やとの玉ひ、つま戸をひらき、御手をとつてともなひ玉ひ、わりなきゑにしと成給ふ

たすふせいし、さもめつらかにおほしめし、ひころ御心つくし給ふこと、まめやかに御ものかたりあり、ちよをひとよとちきり給ふ事かきりなし、それより、たかひにわりなくおほしめし、いくひさしくとかたらひ給ひ

夜もやう〳〵あけゝれは、みやは立出んとし給ふ、ひめ君なにとなく、御なこりをしけにみやの御そてをひきとゝめ、かくなん

あさかほのあすをたのまぬたまのおの、たへぬさきにもとはゝとへきみ

と侍れは、つゆのみやたちかへり給ひ、あらいまはしのことのはやとの給ひ

いつまてもちきりのすゑはおひまつの、かしらのゆきをもろともに見ん

と御いはひあり、ゆふさりはかならす参り候はんとて、きぬ〳〵になり給ふ、いまそこのよの御わかれと、のちにそきこへ侍る

時更にせきもりすへされは、鳥鐘耳をおとろかし、はやしのゝめに成ぬれは、あかぬわかれをいとなみ立出給ふ、姫君何とやらむねうちさはき、あまりなこりおしまれて、よひかへし、かくなん

今宵しも千とせのちきりこめぬれと、人の命のあすをしらまし

と侍れは、露の宮立帰り給ひ、あらいまはしのことのはやとの玉ひ

いつまても契りのすへは老松の、かしらのゆきをもろともに見む

といわひあり、ゆふさりはかならすまいり候半とて、きぬ〳〵に成給ふ、これそ此世の御別れとは、のちにそきこへ侍る

最初の「きのふより」の歌の後の叙述が非常に簡略になっている外、第二首目の「今宵しも」の歌は寛永板と全く異なっている。

なお、巻末の「世の中は」の歌の次には、「此古哥をよく〳〵かんかへ、ほたいの道をかへす〳〵もおこたるへからす」の一文が添えられている。

右に挙げた外は、この京大本の本文は寛永板ときわめて近いので、本書は寛永板に拠りながら、一部を書き変えたものと考えられる。

以上述べたように、本作には刊本系統以外の本文を有する伝本は見当らず、刊本中の最古板である寛永板の本文を以て典拠とすることができよう。

二、「伏屋」「岩屋」「一本菊」と散佚物語

「伏屋」「岩屋」「一本菊」の三篇が、それぞれ風葉集に所見の散佚物語「ふせや」「いはや」「あだなみ」の改作であろうということは既によく知られている所である。

まず、散佚物語「ふせや」については、風葉集巻八羇旅の部に左の一首が採られている。

こゝろにもあらすふる郷をはなれてさすらへけるに初雁のなくをきゝて　　ふせやの関白北方

雁かねよしはしとまりて旅の空こひなくかたの物かたりせよ

この歌は既に伝本解題で述べたように、現存室町時代物語「伏屋」の諸本中、B類として分類した多和本及び刊本「美人くらべ」に見出すことができる。この二本では、継母の命を受けた武士のために近江の湖に沈められながら、不思議に命を助かった姫が、瀬田の橋の上で雁の鳴きわたるのを見て詠んだ歌として、

かりかねよ、しはしとまりて、たひのそら、こしちのかたの、物かたりせよ

わかすみし、みやこへゆかは、かりかねも、このありさまを、ものかたりせよ

（多和本による、傍注は「美人くらべ」）

の二首が記され、前の歌は明らかに風葉集所載のものと同一である。「ふせや」という題名の一致と、風葉集所載の歌が存することによって、現存「伏屋」が古本「ふせや」に拠ったものであろうとする想像は、かなりの確実性をもち得るであろう。しかし、何分にも古本「ふせや」に関しては、この風葉集の歌一首の外に、その内容を探る資料が存しないので、いかなる改作が行なわれたかを具体的に知ることは不可能という外はない。

ただ現存「伏屋」の諸本の中で、最も古躰をのこすのではないかと考えられるA類の明応八年書写の尊経閣本には、風葉集の歌に相当するものはなく、

はつ雁よ、都へゆかは、たらちをに、我ありさまの、ものかたりせよ

という、B類の多和本・「美人くらべ」における「わかすみし」の歌に当る一首が存するのみであることを手がかりとして、その一端を窺うことができるかもしれない。これも既述の如く、A類本とB類本との関係には、（1）B類本はA類本を変改したもので、風葉集の歌はB類本においていわば考証的興味から附加された、（2）A類B類の両者は、それぞれ古本「ふせや」から別途の過程を経て作られた、という二つの見方が成り立つかと考えられ、B類本からA類本が成ったとは考えにくい。そこで（1）の想定に立った場合、A類尊経閣本の「はつ雁よ」の歌は、発想においては、風葉集の「雁がねよ」の歌と同類と見ることができるので、古本「ふせや」の改作に際して、「雁がねよ」の歌の語句に手を加えて、「はつ雁よ」の歌を作ったものと想像することが許されよう。風葉集の歌は、現存「伏屋」の筋の上から言えば、姫が湖に沈められようとして助かった時よりも、信濃の伏屋で尼に養われている間に詠ん

だものとした方が内容からみて適切である。詞書の「こゝろにもあらずふるさとをはなれてさすらへけるに」は、後の関白北の方が伏屋に流離している時を言ったものと考えるべきではなかろうか。（古本「ふせや」もその題名からして、姫君が信濃の伏屋に流離するという内容を有したことは確実であろう。）すなわち、尊経閣本「伏屋」は、古本「ふせや」の「雁がねよ」の歌を採るに当って、その歌の詠まれる場面を変えたために、歌の語句も新しい場面にふさわしいものに改めたのではないかと想像するのである。この前提に立って更に推測を加えれば、そのような変改がなされたのは、古本「ふせや」には、姫君が継母のために湖に沈められようとした所を、実母の化した亀に助けられるというような趣向は存在しなかったことを示しているのではないかとも言うことができそうに思う。

一方、（2）の如く、AB両類が、古本「ふせや」から別々に作られたという想定に立った場合は、右のような仮説は単純には成立しない。この場合も、B類の多和本・「美人くらべ」における「わかすみし」の歌が古本「ふせや」には無かったものとすれば、古本の「雁がねよ」の歌の外にそのような一首をつけ加えたことには、（1）の場合と同じように、古本の歌を転用したことによる不自然さを補う意味があったことが考えられ、やはり姫が湖に沈められる一条は、現存「伏屋」のB類本における新たな趣向であったとすることができるかもしれない。しかしながら、そうするとB類本の「わかすみし」の歌と、A類本の「はつ雁よ」の歌との類似を、偶然の一致という風に考えねばならなくなるが、そのような可能性はきわめて少ないと言わざるを得ない。従って、「わかすみし」の歌も、その類歌が古本に存在したものとするべきであろうが、そうなると、前記のような改作の経緯についての一つの想像は成り立ち難くなる訳である。

しかし、現存「伏屋」のAB両類の伝本の関係については、両類の本文は著しく離れていても、筋立の上では部分

的な趣向がほとんど一致している所から見て、両者が全く交渉なしに別々に成立したとは信じ難い。たとえB類本が古本「ふせや」に直接に拠ったものとしても、既に成立していたA類本の影響の下に成ったものと考えたいのである。

「いはや」については、風葉集に左の六首が載せられている。

つれなかりける女のつくしへくたりけるに、こかねしてかまと山のかたをつくりて、あたりをこかして、をとこのうちみあけたるをつかはすとて　いはやの左兵衛督

(A) かまと山もゆる思ひもひとしくて我はけふりにたちおくれぬる　(巻九離別)

しほやき中将のはかまき侍ける夜よめる　いはやの按察大納言

(B) ときは山生そふ松の末のよは人よりこえてこたかゝるらん　(巻十二賀)

つれなかりける女のはるかなるほとへまかりけるに、ちかき程まておくりて、ひとへの袖のぬれたるをひきほころはして　いはやの兵衛佐

(C) 思ふことけにおろかなる涙かなかかる袂をみてもしらなむ　(巻十三恋一)　いはやの兵衛佐

（D）我ならぬ人にもかくやつれなきと心みかてら身をやかへまし　（巻十三恋一）

（前の歌の詞書は「つれなく侍ける女のもとに」とある）

女のもとにつかはしける　いはやの左兵衛督

（E）花すゝき末こす風のほのかにもそよとこたふる声を聞はや　（巻十七恋五）

いみしきさまにてあまのいはやに侍けるころ、あまのひさしくみえさりけるに、ちひさき舟をかれにあらんとみやりて　いはやの内大臣北方

（F）なみまわけうきしつみくるあま舟を待こそわたれ袖はぬれつつ　（巻廿雑三）

現存「岩屋」には、諸本を通じて右に類似する歌は一首も見出すことができない。しかし、（F）の詞書によって知られる、後に世に出て内大臣の北の方となった姫君が、一時期を海士の岩屋で過すという筋は、現存本に共通する特徴ある趣向であり、（B）も現存本の、帥の大納言が関白家の若君姫君の袴着の式に列席し、その時はじめてそれが我が孫であることを知らされる条に当てはめることが可能である。従って、「伏屋」の場合と同じく、風葉集の古本「いはや」を現存「岩屋」の原拠と見ることは、さしたる支障もないと思われる。この場合も、古本「いはや」の全貌を明らかにするには資料が少なすぎるが、一応残りの（A）（C）（D）（E）の四首を手がかりとして、両者の関係について想像してみたい。

この四首は、左兵衛督と兵衛佐という二人の男が女に贈った歌であるが、（A）に「つれなかりける女のつくしへ

くだりけるに」、（C）に「つれなかりける女のはるかなるほどへまかりけるに」とある所からして、二人とも、想う女が都を去ったために、心ならず離別しなければならなかった事情が窺え、しかもその女は同一人であった如くに思われる。これも現存本で、帥大納言の対の屋姫が、夫婦の約束を交した四位の少将を都へ残して、筑紫へ下ったことに対応している。そこで、右の左兵衛督と兵衛佐のいずれかが、四位の少将に当るものと考えられるが、ここで注意されるのは、現存「岩屋」の物語構成上の特徴である。現存本では、四位の少将は対の屋姫が明石で行方が知れなくなったことを聞くと、出家して書写山に籠る。その後、関白の御子二位の中将が落馬の怪我の療治のために伊予へ下った帰途、海士の岩屋に養われていた対の屋姫を見出して、都へ連れ上り北の方とする。このように、一人の女主人公に対して、二人の男主人公が登場し、しかも前半と後半とを境に全く交代するという筋立は、この種の物語では珍しいことである。（現存「岩屋」のB類東北大本は、四位の少将をもって全篇を通した男主人公としているが、これが新しい改作であろうことは伝本解題で述べた。）最初に想いを懸けた男が死別という形でその望みを絶たれ、別の男が偶然の機会からその女を手に入れるという書き方は、このような通俗的な読者の興味を迎えるには、やや不自然な感を禁じ得ない。そこで、古本「いはや」に登場する左兵衛督と兵衛佐という二人の男は、一人が四位の少将に当り、他の一人が二位の中将に当るものと考えることができれば、女（古本では後に内大臣の北の方）が筑紫へ下る以前に交渉をもっていた二人の男の中の一人が、後に想いを遂げたということになり、現存本はこの筋を単純化した結果が、途中で男主人公の交代という特異な脚色を将来したといった想像をめぐらす余地が生ずる。しかし、風葉集では、歌の作者については、その人物が作品の中で最後に到達した官位をもって記す方針が見られるので、それならば、男の一人は「いはやの内大臣」と記されるべきであり、右の想像はおそらく無理であろう。古本の筋立はもっと

複雑であったのかもしれない。

一体、古本「いはや」の歌が、六首まで風葉集に採られている所を見ると、それはかなりの長篇で、歌の数も相当に多かったと推測できるが、現存本では、全篇を通じて、多い伝本でも五首に過ぎず、「伏屋」や「一本菊」に較べて著しく少ないことからも、古本よりは遙かに単純化され、殊に和歌が省略されたものと考えることは妥当であろう。特に、発端の恋物語の部分に、現存本には一首の歌も存せず、叙述も簡略であることは、古本「いはや」のこの部分が（D）（E）の歌からしても長く複雑であったと想像されるのと対照的で、物語の質に変化の生じていたことが推測できるのである。現存本は、かえって後半の嫁較べや袴着の条に、多くの興味が注がれていることを思わせる書きぶりであるが、これも古本とはかなり色彩が違っている部分ではないかと考えられる。

「一本菊」については、風葉集所載の左の「あだなみ」の歌二首とほとんど同じ形のものが、「一本菊」の中に見出される。

みこにおはしましける時、きくのえんせさせ給に、前中宮いまたさとにおはしましける御まへのきく関白にめされけれは、ひともと奉れりけるのちにさしおかせ給へりける　　あたなみの院の御歌

わか心君かまかきにうつろふは猶やのこれるしら菊の花　　（巻五秋下）

兵衛佐に侍けるとき、さつまのくにゝうつされけるに、いよのみなとゝいふ所にてみやこ鳥をみてよみ侍ける　　あたなみの中関白

都鳥恋しきかたの名にはあれとわかふる郷のことつてもなし　（巻八羇旅）

右の二首がほんの僅かの字句の違いで、そのまま現存「一本菊」に見えていることは、既に伝本解題の所で述べた。また、風葉集の詞書によって知られる、この二首の詠まれた経緯も、現存本とぴったり一致している。その上、古本の「あだなみ」という物語名についても、「一本菊」の中で、兵衛佐の想い人侍従の内侍が、兵衛佐の流罪地薩摩へ下って再会を遂げる条に、（引用は慶応本、諸本ほぼ同じ）

身をすてゝみるめかりにそあたなみのうらにてふねといそきつるかな　（内侍）

あたなみのうらにいかなるちきりしてみをすてゝのみみるめかるらん　（兵衛佐）

という二首の歌が存し、これが題名の由る所ではないかと考えられる。

このように、風葉集によって窺うことのできる古物語「あだなみ」は、現存「一本菊」と一致する部分のみであるので、両者の違いについて想像をめぐらす余地がない。「一本菊」の場合は、「伏屋」や「岩屋」以上に、少なくとも構想に関しては、古本との類似が著しかったものと言えるだけである。

三、「伏屋」「岩屋」「一本菊」の特徴

右のように、「伏屋」「岩屋」「一本菊」の三篇は、いずれも風葉集所載の散佚物語を承けている点で、その成立には共通の問題が考えられ、また、内容がいわゆる継子物型恋愛譚で、主人公の辿る運命もきわめてよく類似している作品であるが、なお子細に比較すると、この三篇は、それぞれの特徴を有していることも認められる。そこで、次に右三篇の間に見られる、登場人物や筋書の上での主な異同について観察してみる、（継子物諸作品の人物及び筋書の

対照表は、島津博士の「近古小説新纂」、市古博士の「中世小説の研究」に載せられている。）

まず人物としては、継子の境遇にある女君と、それに想いを寄せる権門の男君の男女主人公の外、主要な人物として登場するのは、女主人公の父、継母、継母の実子である。ここで違いのあるのは、「岩屋」では男主人公が前半と後半と別人であること、「一本菊」では、継子が兄と妹の複数であって、それぞれに恋の相手が存することである。すなわち「伏屋」が最も単純で、「岩屋」「一本菊」の順に複雑化している。ところで、これらの人物の描写であるが、男女主人公、父親、継母の三者は特に言う程の相違はなく、きわめて類型的である。ただ「一本菊」では、父親は早く世を去ってしまい、継子の兄妹の中の、兄の兵衛佐が父親の役をも兼ねる形をとっている。違いの見られるのは継母の実子で、「伏屋」と「岩屋」のそれは名前が出るだけで何の役割も演じていないが、「一本菊」における実子の兄妹、四位少将と帥局の二人は、継母と一体となって、継子の兄妹を迫害する。たとえば、継子の姫に兵部卿宮が通ってくることが知れた時、帥局は

あさましや、いまた御かとにもうけのきみとましまさす（ママ）、いかなることもわたらせ給候はゝ、このきみこそ御くらいにもつかせ給ふへきに、このひめきみの人にすくれ、うつくしくおはしけれは、おほしめしつきなは、さためてきさきにもたちなん、しからすは、かれをかすならすなして、わかものにせんとこそおもひ候つるに、いかゝすへきと申て、おほしめしいれられぬさきに、このひめきみうしないて、とにもかくにもなさはやと、いゝけれは　（慶応本）

という風に、継母をそそのかす態度さへ示しているし、四位少将についても、

しいのせうしやうは、うたいしんの御こなれとも、あにひやうへのすけとのにはにさりけり、みめかたちさへお

とりけれは、のうの事ましてなかりけり、こゝろさへわるくて、われよりくらいのたかき人々をも、御かとの御（天理本甲）御か
めのとのしるしきそくとて、わかこゝろのまゝに、なにことをもさたしけれは、くきやう、てんしやう人も、に
くきものかなと、おもはれけり　（慶応本）

と書かれていて、兵衛佐を罪に落すために積極的に行動している。後述するように、「伏屋」系統の「秋月物語」では、実子の妹君は継子の姉君に好意をもち、継母に逆ってまで姉の幸福を願うという、「一本菊」とは全く逆の人間に書かれている。民間に流布する継子物の昔話でも、本子が継母の側に立つ型と、継子の側に立つ型とがあって、後者の方が説話の型としては進んだものであると言われているが、「一本菊」の場合、継子の兄妹に対して対照的な性格が実子の兄妹に付与され、敵役の役割を顕著に荷わされている点は、「秋月」型との関係は別として、「伏屋」「岩屋」のような無性格な実子よりは、継子物語として潤色されたものと言うことができよう。

次に筋書の上では、初段の男女主人公が結ばれる経過を語る恋物語の部分、中段の継母の迫害と継子の流離、末段の男女主人公の再会帰京の三段に大別し得る。初段は、これら三篇の原拠となった鎌倉期の物語においては、かなり詳しく叙べられていたのではないかと想像される。特に「岩屋」においては、この部分は現存本との間に著しい隔たりがあったと考えられることは前述の通りである。現存「岩屋」はこの恋物語の部分が最も短かく、四位少将が対の屋姫と結ばれる経緯を

さて、まちかくおはしける左大臣のひとりこに、四ゐ少将といふ人、たいやのかたを心にかけて、御めのとをかたらひて、中納言殿に此よし申けれは、「中納言どのことうけしくおはしける」（続群書類従本ニヨッテ補フ）少将、あたりまちかきうへ、御むこと名つけ給ひぬれは、あさゆふかよひてあそひたまひける（大東急本）

とわずか数行の文で済ましていて、常套的な和歌の贈答もない。このように簡略化されたのは、ここに出てくる四位少将は対の屋姫と添い遂げることができず、やがて男主人公の座を二位中将に譲ってしまう本篇の特異な構想と関係があるのかもしれない。逆にこの部分が最も長いのは「一本菊」で、兵部卿の宮が兵衛佐の妹君に想いを寄せ、度々文を送るが返事がないので、終に姫の館に忍び入って思いを遂げるという、王朝式の恋物語の形式を追っている。おそらく、本篇は原拠とした古本の筋を忠実に踏襲しているものと思われる。「伏屋」も一応恋物語としての叙述を備えているが、本篇には、清水に詣でた継子のにほひ姫と実子のあひしの君の姉妹の姿を少将が見較べて、にほひ姫を選ぶという趣向が設けられているのが変っている。慶応本や多和本では、かねてにほひ姫の噂を聞いていた少将が、姉妹の清水詣でをよい機会として、その姿を見に行くのであるが、刊本の「美人くらべ」になると、少将の申し入れで、姉妹の美人較べの場が準備されるという風に改作されている。これに類した趣向は、後述するように「住吉物語」にも存するが、「住吉」「伏屋」「美人くらべ」と並べると、王朝式の恋物語から民間の御伽話風に変化してきていることが認められる。

中段の、継子に対する迫害の条では、継母が武士を語らって姫を奪い去らせるという点で、「伏屋」と「岩屋」は一致している。しかし「伏屋」では、武士の手で湖に沈められた姫が、実母の霊の宿った亀に助けられるのに対して「岩屋」は、同じように実母の霊は出てくるものの、それは間接的に姫を力づけるだけで、姫が命を全うしたのは武士の情によるものとされている違いがある。「伏屋」は筋の運びに奇蹟の力を借りてきているが、「岩屋」ではそれが和げられている訳である。その点では、最も自然な運びを見せているのは「一本菊」である。「一本菊」では、兵衛佐が流されたのは、四位少将の闇討事件を口実にしての継母親子の讒奏であり、妹の姫を幽閉する時も、姫の住居を

修理するために暫く他所へ移るようにという名目で連れ出しているのであって、御伽話的な要素は稀薄である。

このような傾向の違いは末段の部分にも現れている。「伏屋」では、行方を失った姫の探索に当って、少将は住吉明神の示現を蒙るばかりでなく、明神の化身である翁の導きによって伏屋へ辿りつくのであって、全くの住吉明神の霊験譚である。「一本菊」には二組の男女の再会があるが、兵衛佐と侍従内侍との再会には神仏の援助は全くなく、今一つの場合には、兵部卿宮が清水（一本長谷）へ詣でて姫のことを祈願した帰途、姫の幽閉されている四条の家の前を通りかかって、偶然に見つけ出すことになっている。「一本菊」には巻末にも、

いまもむかしも、かみほとけの御ちかい、いつれもくおろかと申せとも、くわんをむの御ちかひにすきたることなし、なさけありし人は、ゆくすゑかやうにさかへ給ふへしとこころをかきうつしたるさうしなるへし、このさうし御らんせむ人々は、くわんをんのみやうかう卅三へん、ひさうのみやうかう廿四へんとなへ給ふへし

という観音信仰を勧める文が添えられ、右の兵部卿宮と姫の再会の所も、清水あるいは長谷の利益を思わせる書きぶりであるが、神仏の示現や導きはなく、「伏屋」のようなはっきりした霊験譚の形はとっていない。この二篇に対して、そうした神仏の霊験利生を説く意識の全く見られないのは「岩屋」である。「岩屋」では、対の屋姫の想い人四位少将は姫が明石の海で行方が知れなくなったことを聞くと直に出家してしまい、後に海士の岩屋に養われていた姫を見出して都へ伴ない妻とするのは、伊予での療治の帰途、たまたま暴風のために明石浦へ吹き寄せられた二位中将である。従って、男女の再会に神仏の利生をつけ加える必要はなかった訳でもあるが、「岩屋」には全篇を通じて、そういう意図は認められない。末尾の文を見ても、古躰を存すると考えられる大東急本には、宗教的勧化の詞はなく、その他の諸本にも、宗教味を帯びた一般的な教訓の語を有するものはあるが、特定の神仏の霊験を讃える詞の如

きは見られないのである。

右の外に、末段の部分における相違として、「伏屋」と「一本菊」は、男女主人公の再会を以て、物語の主要な部分は結ばれているのであるが、「岩屋」にはなおその後に、嫁較べと、父との再会という二つの大きな場面が構えられている。明石の岩屋から対の屋姫を都へ伴ない帰った二位中将は、それまでの北の方を振り捨てて、姫と同捿する。姫を海士の子と聞いた中将の両親は、二人の仲を割くために姫を呼び寄せ、それぞれ高貴の家に嫁いでいる娘達と器量較べをさせて恥を与えようと企てるのが嫁較べである。ここで姫は容色は勿論、才芸の道にも一際秀でていることが強調的に描かれる。また、中将と姫との間に若君姫君が生まれ、その袴着の式に、対の屋の父大納言を招いて、はじめて父娘の対面が遂げられるが、この場面も劇的に描かれている。この形は「鉢かづき」「姥皮」「花世の姫」など、民間説話と交渉の深い継子物と非常によく類似している。もともと「岩屋」は、初段の恋物語の部分が非常に簡略で、しかもその部分が全篇の構成の上から遊離した感じを与えることは既に述べた通りであるが、その四位少将との恋物語の部分を切り捨ててしまうと、「鉢かづき」など一類の民間説話型作品と、構想がほとんど同じになってくる。この嫁較べや、父との対面の部分が、古本「いはや」でどうなっているかは全く不明であるが、（風葉集の歌によって、袴着の場面の存在したことはわかるが、現存本のように父娘の対面が主になっていたかどうかは疑問である。）もしかすると、現存「岩屋」は古本の改作に当って、そのような民間説話型の継子物からの影響を受けたのかもしれないと考えられる。ただし、対の屋姫が海士の岩屋で養われるという筋は、古本にも存したことが明らかであるが、この趣向にはやはり説話的な匂いがある。嫁較べなどは室町期の改作時に添加されたものとしても、古本もまた説話風の要素をかなり含んだ物語であったことは想像してよいかと思う。

以上比較してきた所を総合すると、いわゆる継子物型恋愛譚という名に最もふさわしいのは「一本菊」である。恋物語としての叙述を充分備えている上に、帝の乳母としての権勢を恃む継母一族と、継子兄妹及びその庇護者である兵部卿宮との対立を軸として、物語的構成が一応整えられている作品である。普通の継子物と異なって、男女主人公をそれぞれ複数にしていることは筋に複雑さを加えているが、そのような複雑さは、鎌倉期の擬古物語には一般的に見られる所である。現存「一本菊」は、伝本の状態から見て、「伏屋」や「岩屋」よりはむしろ新しい作品かもしれないが、本文はともかく、構想の上では右の点からも擬古物語に最も近い形を保っているように思われる。それに対して「岩屋」は恋物語としての内容をほとんど失っていて、説話的興味が全篇を支配している。その点では室町期物語の一つの特徴を具現している作品と言えるが、一方では宗教的色彩がきわめて稀薄なことが注意をひく。形の上では、「鉢かづき」「姥皮」などの民間説話型継子物に近づきながら、それらが観音霊験譚として仕立てられているのとは、明らかに一線を劃している。構想は古本「いはや」からかなり離れたものと推測されるが、霊験譚の性格を有しない点は「一本菊」に通じる。「伏屋」はこの三篇の中では、現存本としての成立は最も古いのではないかと考えられ、恋物語風の内容も残しているが、観音霊験譚として全篇が潤色されていて、これまた室町物語の一つの典型を示している。同時に「伏屋」は、三篇中最も著しい異本を有すること、また前後に筋書のきわめて近い、直接交渉を有することの明らかな作品が存在することから、当時の読者に最も迎えられる性質をもっていたものと考えられる。次に、その「伏屋」の前後を考察してみたい。

四、「住吉物語」と「伏屋」

現存「伏屋」と筋書の非常によく似た作品に、「住吉物語」「秋月物語」「朝顔の露」がある。「住吉物語」は、「源氏」「枕草子」等に見える同名の古物語を鎌倉時代に改作したものとされている。周知の如く、現存「住吉」には夥しい異本が存在する。その中には、成田図書館本の如く、書写年代が室町初期と推定される古本も存するが、風葉集に載せられた「住吉」の和歌七首の中、二首は現存諸本の中に見出すことができない。しかし、風葉集の詞書は現存「住吉」の筋に正確にあてはまるし、五首の和歌も詞句がほとんど一致する所から見て、風葉集所載の「住吉」は、鎌倉期の改作にかかる「新住吉」であろうと推測し得る。ただ、現存諸本には、その「新住吉」の原形を忠実に伝えているものはないとしなければならないであろう。

こうしてみると、現存「住吉」の「伏屋」に対する関係は、前稿において比較対照の資料にとり上げた現存「忍音物語」と「しぐれ」との関係に対応すると言うことができる。ただ「住吉」と「忍音」とでは、伝本の種類、本文の流動状態などから見ても、物語としての性質にやや相違があることは考慮しなければならない。現存「忍音」は、現存「住吉」よりも成立年代は下るかもしれないが、なお享受者の階層において鎌倉期擬古物語の側に位置せしめることができるのではないかと考えられるのに対して、「住吉」は室町期以降においても本文の流動が甚だしいこと、奈良絵本・絵巻等が数多く製作されていることなど、室町時代物語とほとんど変る所がない。勿論、桑原博史氏が指摘されたように(注1)「住吉」の文章には、擬古物語に通じ、室町物語とは区別すべき修辞が含まれていることは確であるが、それにもかかわらず、室町物語の時代において、それと同質の享受のされ方をしていたことも事実である。それ

は主としてこの物語の内容によるものであろう。「住吉」は「伏屋」と構想をほとんど同じくする継子物型恋愛譚であるにとどまらず、観音の霊験を説くことが主要なモチーフとなっていることも同様である。(注2) すなわち、「住吉」は鎌倉期物語の中にあって室町物語の先駆というべき位置を占め、それ自身も室町期以後多くの異本を再生しつつあったのである。従って、「住吉」と「伏屋」との対比は、鎌倉物語と室町物語との相違を示すに、かならずしも適切とは言い得ないのであるが、なお両者の間に存するいくらかの相違は、「伏屋」の作品としての位置を明確にする上に役立つものと考えられる。

「住吉」と「伏屋」の間は、右の如く直接の承接関係を認め得る程に近いが、その間には散佚物語「ふせや」が介在する。その古本「ふせや」が「住吉」の模倣作品として成立し、現存「伏屋」へとうけ継がれたと考えるのが穏当であろうが、古本については、その片鱗を窺うことしか許されない今日では、現存「伏屋」を直接「住吉」と対比せしめる外はない。

「住吉」と「伏屋」との筋立の細部に見られる相違は次の如きものである。

(1)「住吉」では、継母の実子に中君・三君の二人の姫がある。「伏屋」はあひしの君一人で、あひしは物語の中で何の役割も演じていない。「住吉」の中君・三君もさしたる働きはないが、継子の大君に対して好意的な感情を懐いていることが、左の文などから知られる。

中君、三君なと、ひめきみのことにふれてあはれに、しゝうかよろつにおかしかりしものを、あはれいかなるところにすまひして、みやこのことをおほしいつらんと、わするゝ時なくしのひけれは、まゝはゝ、こわなにことそ、まかくしく、いつとなくなけき給は、わかいかにもなりたらんには、よもかくはおはせしと、はら

たちけれは、おやなからもなさけなく、うたてしくそおほえける　（成田図書館本）

（2）「住吉」では、少将が継子の大君に想いを寄せ文を送ったことを知った継母は、仲立の女を籠絡して、少将を三君の方へ引き入れる。少将は何も知らずに三君の許へ通うようになったが、やがて人違いに気づき、大君への思慕をつのらせる。「伏屋」にはこのような趣向はなく、はじめから継子のにほひ姫の許へ通う。

（3）「住吉」では、継母が主計頭という翁に大君を盗ませる計画を聞いて、大君は住吉に住む縁者の尼の許へのがれ、身を隠す。「伏屋」は武士をして姫を奪い去らせ、命を失なおうとする所を、実母の霊が現れて姫を救う。その後、熊野下向の尼に拾われ、信濃国伏屋で養われる。

（4）少将が姫の行方を尋ねるに当って、「住吉」では長谷で示現を蒙るだけであるが、「伏屋」は、住吉明神が示現を与えた上に、更に翁と現じて、少将を伏屋まで導く。

（5）「住吉」は、少将が姫を都へ伴ない帰った後、二人の間に生まれた子の袴着の折に、姫の父を招いて再会を遂げさせる。「伏屋」は、高野へ出家遁世した父の許へ知らせて、山を下った父と対面する記事はあるが、袴着という場面はない。

「住吉」と比較した場合、（1）（2）（5）の如く、「伏屋」は筋立や描写が簡略であることが認められる。まず（1）については、継母の実子が継子に対して好意的な言動を示すのは、継子説話の型としては進んだものであると言われている。すると「伏屋」の方が素朴な形ということになるが、この場合にそのような公式を当てはめることができるかどうかは疑問である。右に引用した一節は、大君が失踪した後の、中君・三君の大君に対する思慕を叙べた文であるが、この外、三人が共に暮していた間にも、両者の間には交情のあったことが随所に記されていて、それが前半の

恋物語の部分にいろどりを添えているのと比較すると、「伏屋」は省筆したものという感を受ける。（2）の場合も、継子物として、継母の邪悪な性格を描き出すには、「住吉」のような筋のある方が役立っている。これも「住吉」の方が進んでいるように見えるが、この条の後に、「住吉」には、三人の姫が嵯峨野へ春の野遊びに出た時、少将もその場に赴いて、姫君達と歌を詠み交す場面がある。その時の大君の容姿が一際美しいのを見て、少将の大君に対する恋慕の情は一層やみがたいものになるというのであるが、「伏屋」の、少将が姉妹の姫の清水詣での姿をかいま見て継子のにほひ姫の方に心を寄せるという、恋物語の発端の趣向は、「住吉」のこの野遊びの場面から採ったもののように思われる。ここも（1）と同様、「伏屋」は継母の実子に関する記事をことさら省いたのではないかと考えられるのである。（5）の場合もまた、継子とその父親との再会を印象的に描写する上で、「住吉」の如き袴着の場面の設定は有効である。「伏屋」の書き方は単なる筋書に過ぎず、そこに何の感動もあらわれていない。なお前述のように、「岩屋」には「住吉」と同じ袴着の座を契機とした再会の記事があり、それは「住吉」よりも更に描写が詳しく、感動的に叙べられている。

次に（3）（4）においては、逆に「伏屋」の方に新たな趣向の加わっていることが見られる。継母の継子を失う手段が直接的になっていることは顕著な相違であるが、その中で、島津博士や市古博士が指摘された如く、武士が姫を殺害しようとして、太刀を振り上げると三つに折れるというのは、「熊野の本地」「厳島の本地」「阿弥陀の本地」などの本地物に常套的に見られる手法であり、実母の霊が亀に宿って水中の姫を救助するのは、「今昔物語」等に採られた如無僧都の伝説からの着想と思われる。このように説話的趣向が添加される一方、継子の保護者として熊野下向の尼が登場するのは、住吉の尼から来ているのであろうが、後にこの尼が信濃国を賜わって富貴に栄えたことを記

している所には、熊野信仰の利益を説こうとした意図を窺うことができ、また、住吉明神が翁と化して少将の道しるべをすることを中心とした道行の部分が「伏屋」の諸本の中で膨張する傾向を見せている点には（諸本解題参照）、道行文学の流行から受けた影響と共に、住吉利生譚としての目的を徹底させようとする意識があったと思われる。

以上の如く「伏屋」を「住吉」と対比すると、継子物語、恋物語としての面では、枝葉を切り取って幹だけが残されたと言うべき単純化が認められる反面、主人公の運命を幸福に導くために、超現実的な趣向が多く添加されている。ここにやはり鎌倉物語から室町物語への変貌の具体的な姿を見ることができる訳であるが、前項で「伏屋」「岩屋」と共に比較した「一本菊」は、筋書の上からだけ言えば、「住吉」よりもかえって擬古物語的な姿をとどめていると言わなければならない。「住吉」と「伏屋」との相違が、室町物語の一つの典型的特徴を示していることは確であろうが、なお、室町物語の中には「一本菊」のような作品も存在していることには注意しなければならない。

（注1）桑原博史氏「住吉物語現存本の成立をめぐる二つの問題」（国語と国文学昭和四〇年七月号）

（注2）市古貞次博士は、現存「住吉」の長谷観音の示現は平安朝の原作には無かったものであろうと考えられ（中世小説の研究九五頁）、更に桑原博史氏は、異本能宣集・大斎院前御集の記事によって、「現存本では、姫君の所在の発見がただちに幸福な結末をみちびき出すが、古本では、所在発見後もなお二人の身の上には不運がつきまとっていたと考えられる。そうした二人の愛情だけでは如何ともしがたい何らかの事情の存する中で、積極的に耐える力をもつのが、古本の男主人公の性格と思われるのに対して、現存本の男主人公は鎌倉期以後の物語の型どおり、弱々しい受身の性格のものでしかなく、それに外部から作用して、積極的に物語の筋を展開する力として、長谷観音の示現が与えられたのであった。まこと、市古博士の見解のように、長谷観音の示現をうけるくだりを付加した時こそ、古本と現存本との間に決定的な相異を生じた、現存本原形の成立の時期と考えてよいであろう。」と述べられている。（前掲論文）

五、「秋月物語」と「朝顔の露」

現存「伏屋」よりも成立が後れるものと思われる「秋月物語」は、「住吉」「伏屋」の両者と密接な関係を有している。前章に「住吉」と「伏屋」との主な相違として掲げた五個所について見ると、（1）（2）は「住吉」に、（3）（4）は「伏屋」に類似し、（5）も「伏屋」の方にやや近い。（1）の継母の実子の性格という点では、「秋月」におけるあひしの君（この実子の姫の名は「伏屋」と同じである）は、継子である姉のあひきやうの君に好意をもつだけでなく、継母にたばかられて自分の所へ通うようになった二位中将の本来の志があひきやうの君にあることを知ると、姉と中将との仲を積極的にとりもつ役割をつとめている。これは「住吉」の中君・三君の性格を更に発展させたものである。（2）は「住吉」と全く同じ筋を構えており、しかもそれが「住吉」に基づいていることは、二位中将が通いそめた相手の姫が志す女とは違うことを知った時の様を叙べる文の中に、

さて中将は、大みやにてしらかわをめして、うたてしき事かな、月見へとこそいひしにとの給へは、しらかわとかく申かたくて、さやうにひめ君たちの、あまたわたらせ給ふ事はしりまいらせすと申けれは、けにもわれかはからひにてはあるべからす、むかしの住よしのひめ君とりちかへたるやうにあるらめとおほしめして、いまはきやうこくへも、かれ〳〵にそおはしける（東洋大本）

とある所からみて明らかであろう。これに対して（3）（4）は「伏屋」と全く同じ筋を追っている。そして、あひきやうの君が備後国蛭が小島で殺される命を助かった後に詠んだ、

わかことく、ものおもふらむ、かりかねの、あはれもうきも、おもひつらねて

かりかねよ、宮古のかたへ、ゆくならは、しはしとゝまれ、ことつてをせん

の歌も「伏屋」と同工異曲である。（5）は「住吉」のように袴着の場面はなく、中将に伴なわれて筑紫から都へ上る途中、中将が父の関白へ帰京を知らせる使者に、姫から父大納言への手紙をも託すことにしている。父との対面に至る経過についての叙述が「伏屋」より詳しいが、どちらかと言えば「伏屋」の方に近い形である。

このように「秋月」は「住吉」と「伏屋」との両方を折衷して作られた観を呈しているが、またそれだけでなく、この作品独自の特徴も有している。「秋月」はA類の写本系統のもので言えば、奈良絵本にして十冊程度に及ぶ、室町物語の中では珍しい長篇である。ところが、そのおよそ五分の四が、二位中将が清水観音の化身である冠者に導かれて、筑紫の秋月へ下り、姫と再会を遂げて、其処に暫く滞在した後、九州の武士を供として都へ上る間の叙述に費されている。この部分は、既に「伏屋」においても、慶応本・多和本の如く増補される傾向にあったが、「秋月」はそれを極端に膨張させたものであろう。

そこで、この部分においてどのような記事が増補されているのかを見ると、まず第一に仏教の教理の説法や、神仏の縁起、あるいはその他の和漢の故事来歴のたぐいである。たとえば、中将が冠者と連れ立って西国へ下向する道すがら、冠者は中将の思いに沈む色を見て、

くはじや申けるは、あら心よはや、おもひとは何事そや、一さいのせんあく、たゝみな一心と見る時は、ぜんもなく、あくもなし、思ひもなく、是をさとりたるをは、ほうをえたりと申なり、これをしらさるをは、まよひといふ、まよひとさとりは、しやへつなし、まよひすなはちさとりなり、うむのちうけんに、せひをいふ事なし、やまふはくちのぼんふなり、もんしゆこれをみて、まことのさとりなりとの給ふ、うむをはなれたるに入ぬれ

は、ほつしんはんにやけたつくそくして、せい〳〵しやく〳〵として、ことをせす、まんそうみなくそくせり、ちこく〳〵にあらす、むねのうちにほとけあり、されは、ほうにかなふものをなんすれは、ほうにかなはし、こゝをもつて、ぜんもあくも、らくもくも、みなむなり、むねのうちにをひて、しんによしつさうのほうあり、なにことによりて、おもひわふへき、きやくそうは、くわしやにはをとり給ひける（東洋大本）

と説法をしたり、同じく冠者が、箱崎で八幡の本地を、大宰府では天神の本地を説いたりする外、秋月で中将の身分が顕れた後、中将と大宰大弐との間に交される言葉の中にも、潘安仁の故事や、用明天皇、嵯峨天皇、秦の始皇の第一皇子きんなら太子の恋物語などを引いている。その外、やはり本筋に関係のない記事として、往復の海道筋での遊女に関する悲恋の話の多いことが眼につく。往路では、赤間関のかうますという遊君が中将から琴の秘曲を授かり、その後中将の俤が忘れられずに遂に思い死にをすることがあり、帰路でも、同じく赤間関の長者の娘せんまつが中将を慕って、一度は供を許されたが、途中から故郷へ帰されたことを悲しんで入水することがある。

しかし、これらの説法や故事来歴や、挿話の挿入は、室町物語の他の作品にも見ることができ、必ずしも「秋月」特有のものとは言えないが、以上の外に、最も叙述の量も多く特徴的なのは、九州の武士に関する記事である。中将が秋月に滞在する間から京へ上る道中にかけて、九州の武士達はこぞって中将の許に集まり、奉仕につとめる。武士達の中将への献上物や、中将を慰めるための御所的の弓技や鷹狩、京上りに際しての行列における武士達の行装などをくだくだしい程にこまごまと叙べている。そこでは、中将は時の関白の御子として偶像視され、武士達はその前にひれ伏して、ひたすら忠勤を尽しているのであるが、その書き方は頗る御伽話的である。丁度御伽話の王子様のように、中将は美化され、絶対化されている。先の道中の遊女に慕われるという挿話を二度まで挿入しているのも、同じ

ような目的に由るのかもしれない。ただ、そうした叙述の中で、九州の武士達の人名を列挙することを随所に繰り返している。一例を挙げれば、

大名小名いそきまいりけり、びんこの国の住人、きくち、はらた、ひせんの国に、せんしゆ七良、山田の三良、あし中の十良、すまの七良左エ門、まつらの太良、このものともをさきとして、われもくと参りけり、さつまの国には、いつみの三良、ちしたの太良、ちやくし平四良、せんたいの八良、しとうかわのしんさへもん、ふゑきのはんくはん、しふやのむまのせうもろたかをはしめとして、はせまいり、大すみのくにゝは、山はたの小五良、河野十郎をさきとして参りけり、ふんこの国には、うすきの七良、はやしたの十良、きしの六良、ふる山の五良、をかたの小二良をはしめとして参りけり、われをとらしと、中将の御めにかゝりける（東洋大本）

の如くで、このように九州の大名小名を多く物語に登場せしめたことは、女主人公の流離の地を秋月に設けたことと併せて、この作品の成立を考える上に、何か意味をもっているのかどうかが問題となろう。「伏屋」の場合の信濃国伏屋は、薗原の帚木伝説で知られる名所であるから、特別の理由がなくとも、歌枕的知識によって物語にとり入れられても不自然ではないが、秋月の如き土地が選ばれた上に、九州の武士を殊更多数登場させてきたのには、単に御伽話というだけで済ませてしまえない、何らかの事情が存したのではないかと疑われる。それを実証することは私にはまだできないが、一番考え易いのは、漠然としてではあるが、この作品が筑紫の地方に関係ある読者を対象として成立したのではないかということであろう。そうすれば、九州の武士の行動に非常に多くの筆を費したことも一応納得できるように思うのである。同じ継子物語でも、「鉢かづき」「姥皮」「花世の姫」などは、はじめから京を離れて、河内、尾張、駿河の諸地方を舞台とし、人物も地方の豪族としている。これは物語の享受者層の横への拡がりに伴な

うものではないかと考えられるが、「秋月物語」も「住吉」「伏屋」などの公家の物語を承けながら、一方に「鉢かづき」一類の作品を成立させたのと相似た、享受者層の拡大という現象を反映しているように考えられるのである。

「朝顔の露」も「住吉」「伏屋」「秋月」の系統に入る作品で、男女主人公の死という悲劇的結末で結ばれていることを除けば、ほとんど同じ筋立を踏襲しているが、この作品には作者の創作意識がかなりはっきり現われていることが、上記の三篇とは異なる特徴である。

第一に、本作は登場人物に主として草木の名を借りてきているが、いわゆる異類物あるいは擬人物とも異なり、それらの人物が死後にそれぞれの草木と現ずるという、いわば草木の前生譚であって、これは本地物から示唆を受けた形式であろう。その人物と草木などとの結びつけ方もかなり巧妙である。たとえば、継子の姫を「朝顔の上」とし、その相手の恋人に桜木大王の御子「露の宮」を配したことについては、巻末に「されは、あさかほのうへ、かゝるはかなきちきりをし給ふにより、しうしんの花までも、よるはつゆにちきり、色よくさくといへとも、ひかけをまたす、しをれ侍へるなり」（寛永板）とある文によって理由を知ることができるし、継母の「浮草の前」については、やはり巻末に、事顕れた後、うつほ舟につくり籠めて海へ流され、「今の世にいたるまて、へいちにさへねをさゝて、みつのうへにうきくさとなり、うきしつみのくをうけ侍へるなり」と説明している如くである。

第二に、吉野の山中に捨てられた朝顔の上を、古の中将姫と名のる老女が現れて保護したり、露の宮が亡き朝顔の上の塚の前で自害する時、苅萱の道心坊が通りかかって、大王への遺言と形見をことづかるという風に、著名な伝説上の人物を借りて趣向を構えている外、随所に「阿弥陀の本地」「釈迦の本地」「天神の本地」「熊野の本地」の話を

織りこんだり、蟬丸、小野小町、業平、紫式部、和泉式部、西行や「源氏物語」などの古歌を多く引用している。また、島津博士が指摘されたように、露の宮が朝顔の上に求愛する条の和歌問答、仏法問答は「浄瑠璃十二段草子」に、朝顔の上の亡骸を埋めた塚から草花が萠え出づることは謡曲「女郎花」に、それぞれ拠ったのではないかと思われるなど、種々雑多な先行の文学に材料を求めて、一篇を構成しているのであるが、それらが継子物型恋愛譚の型の中に巧みに織りこまれて、それ程雑然とした感は受けない。「秋月」にも本地や故事の挿入の見られることは、既に述べた通りであるが、本作の方がその手法が知的である。

第三に、本作でも、露の宮は朝顔の上の行方を尋ねるに当って清水に祈願し、三年に亘る廻国の果には熊野権現の夢想を蒙ることを記しているが、「伏屋」や「秋月」のような利生譚とはなっていない。朝顔の上は露の宮との再会を待たずに、吉野の山中ではかなくなり、露の宮も後を追って自害するという悲劇的な結末である。露の宮と朝顔の上を葬った塚の中から、後に若君が生れ出たが、やがて露と消えて、魂は胡蝶となったという所は、「熊野の本地」の五衰殿の妃の屍から王子が出生する話から思いついたのではないかと思われ、前述の前生譚としての形式や、「熊野の本地」「阿弥陀の本地」の引用などと併せて、この悲劇的な結末も、そうした本地物からの影響と考えることができよう。そして、巻末で登場人物が悉く世を去り、草木と生じたことを記した後に、

はるは色よき花とさきさかえ、なつのひにあひてしほれ、あきはあをはももみちし、ふゆすてにきたれは、山のこけち、のはらのちりとなりて、四きの色をかゆる事、これしゆしやうのうへに、四ききたる事をしらせんため、しよふつの御ちかひなり、されはにんけん、はるの花とさかへほこるといへとも、つゐにはおとろへ、なつの日にあへる花のことし、人おひゆくにしたかひ、あきのくさ木のことく、くろきかみももみちし、そのすかた

もやせをとろへ、いそちむそしをふるといへとも、つゐにはふゆきのことく、むしやうのかせにさそはれ、つちみつときへうせ侍るなり、かゝるはかなきうき身を、つら〳〵くわん（明暦板）、これを御らんする人は、御心をすなをにして、なさけのみちをほんとし、御しやうほたひのこと、かんにようなり、されは、ふるきうたにも

よの中は、ゆめかうつゝか、うつゝとも、ゆめともわかす、ありてなけれは　（寛永板）

と結んでいる点に、本作のもつ宗教的色彩の性質が現われている。「住吉」「伏屋」「秋月」などの、神仏の利生を主とした説き方よりも、もう少し高度というか、趣味的な宗教性が漂っていることを感ずるのである。

以上のように見てくると、この作品は、一応の文学的及び宗教的素養をもった文人の筆のすさびに成ったのではないかということが想像される。作者について具体的に解明する資料を見出せないが、本作の伝本中、古本に属する横山重氏所蔵の絵入写本に、宗祇の筆とする正保年代の極めの存することは、そのまま信用できないとしても、あるいは、そのような連歌師の手によって作られたものかもしれないと考えさせる。そして、島津博士が「古い方の純御伽草子よりは、どちらかといへば仮名草子の色調に融け入らうとしてゐる作であると思ふ」と述べられた通り、既に仮名草子の領域に一歩を踏み入れていることが認められる。伝本が刊本を中心として、特に異本というべきものが存しないことも仮名草子に近い。「住吉」系列の諸篇の中では最も新しく、仮に想像すれば、慶長前後に隠者に類する階層の中で創作された作品であろう。

六、落窪

「落窪」も平安朝の「落窪物語」の改作として、上述の継子物型恋愛譚と同列に扱われている。確に、継子の主人

公が一段凹んだ板敷の間に住まわされて落窪の君と呼ばれることや、「落窪物語」に見える歌三首を載せている伝本が存することは、「落窪物語」の影響下に成立した作品であることを示しているが、筋書の上でも、またモチーフから言っても、両者が交渉する点はきわめて少なく、従来のこの作品の扱い方には疑問を抱かせるものがある。本作の性格を明らかにし、継子物諸作品の中における位置づけをなすためには、その成立事情を更に緻密に考える必要があると思う。その場合、本作にはかなり重要な相違をもつ二種の伝本の存在することが問題となる。以下、その諸本について解題する。

本作の題名としては、写本には単に「おちくほ」と題するものが多いが、刊本には「おちくほものかたり」あるいは「おちくほのさうし」とある。鱗形屋板には板心に「難波忍」とある。この本は女主人公の名を「なにはのまへ」としているので、あるいは横山重氏の解題に述べられているように「難波の前忍び物語」といった別名もあったのかもしれない。「新編御伽草子」所収本は「小おちくぼ」と題している。これは底本の跋文に「ふるくおちくぼ物語」と題して四帖あり。これはさうしもちいさき故に小おちくほといふめり」とあるように、平安朝の「落窪物語」に対する名称であるが、これはおそらく後人の仮題であろう。他に「小落窪」の書名を有する伝本は見ない。本作の伝本は次の如く分類し得る。

A類

第一種

(イ) 万治二年刊絵入本二巻　（国会図書館・岩瀬文庫・大阪府立図書館等蔵）

本書は「室町時代物語集第三」「近世文芸叢書七」に翻刻されている。岩瀬文庫本には「おちくほのさうし」の題簽がある。内題「おちくほものかたり」。刊記「万治二年仲炁日」。匡郭、双辺（二一×一四・八糎）。板心、半黒口「おちくほ上（下）（丁附）」。（上）一三丁半（下）一五丁。一一行、二十字内外。挿絵、上下各八頁。

天理図書館蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　二冊

紺地金砂子散し金泥草花模様表紙（三〇・二×二二・二糎）。左肩に「おちくほ上」の題簽（下は剝落）。料紙金泥四季草花模様入鳥の子。本文字面高さ約二三・五糎。（上）一七丁（下）一九丁。一〇行、約一七字。挿絵、上下各七頁。

(ロ) 〔元禄〕鱗形屋刊絵入本　（大東急記念文庫・東京大学図書館（巻尾欠）蔵）

大東急本には「新板おちくほのさうし　上（下）」の元題簽。内題なし。刊記「鱗形屋版」。匡郭、単辺（一七・二×一二糎）。板心「難波忍　（丁附）」。（上）九丁（下）一〇丁。一四行、二五字内外。挿絵、上下各八頁。

第二種

新編御伽草子本

底本は百華翁の跋文を有する写本。

B類

(イ) 横山重氏旧蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　三冊

「室町時代物語集第三」に翻刻されている。同書の解題によれば、紺地銀泥松梅桜模様表紙（一〇・二×八寸）。

見返し菊花模様空押金紙。料紙鳥の子。題簽、表紙中央「おちくほ　上（中下）」。本文字面高さ約八・六寸。（上）一四丁（中）一三丁（下）一四丁。一二行、二一―二七字。挿絵、上中下各九頁。

島原公民館松平文庫蔵〔江戸前期〕写本　一冊

濃縹色行成表紙（二七・五×二〇・二糎）。左肩に「おちくほ」の題簽。本文字面高さ約二〇・五糎。三二丁、一〇行、約二二字。

(ロ) 麻生太賀吉氏蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　三帖

紺地金泥草花模様表紙（二三・六×一七・六糎）。左肩に「おちくほ上（中下）」の題簽。見返し菊桐模様金紙。綴葉装両面書、料紙鳥の子。本文字面高さ約一八・五糎。（上）二〇丁（中）一八丁（下）一九丁。一〇行、約一五字。挿絵、（上）・六（中）七（下）五頁。

(ハ) 龍門文庫蔵〔江戸前期〕写本　一冊

栗皮色表紙（二七×一九・五糎）。中央に「おちくほ」の題簽。本文字面高さ約二二・五糎。二九丁、一二行、約一八字。本文中の所々に「一枚絵」と墨書した附箋が貼られている。おそらく奈良絵本を写したものと思われる。

A類諸本

第一種(イ)の万治二年板と天理本とはほとんど同文で、字句の末にまま小異がある程度である。天理本は下巻に脱文の個所があるが、また次のように、刊本の誤脱を補い得る所もある。前が刊本、後が天理本である。

ちうなこんの大ひめきみは、かたちよにすくれたるよし、くらんどのたゆふかにうばう、かのおちくぼの御かたにまいり、め

のとにちかつき、御ふみをまいらせけり ―― 中納言の大ひめ君は、かたち世にすくれたるよしきこしめし、中将忍ひつゝ御ふみあそはし、くらんとの太夫か女はう、かのおちくほの御かたにまいり、めのとをちかつけて、御ふみをまいらせけり

天理本の傍線の部分が刊本には脱している。天理本の写しは万治板より古いものとは思われないが、本文は万治板の写しではなく、それに先立つものであるかもしれない。

(ロ)の鱗形屋板の本文は、万治板に拠っているが、数ケ所二十字程度の省略をしている。外に前述の如く、女君に「なにはのまへ」という名を附しているのが特徴である。

第二種の新編御伽草子本は、前半は第一種の(イ)の系統に極めて近いが、後半の、落窪の姫君と同棲した物狂いが姫の父中納言に見参する所の途中から、著しく離れてくる。その部分を左に対照してみる。

(一) 万治二年板

第一段

さるほとにものくるひは、おちくほの御かたにてあかしくらし給ひしか、まゝはゝのつらくあたりたまふことをあさましくおほしめしけれは、あるときのたまひける、かくていつまて人にしのびてすぐへきぞ、御みのちゝちうなこんとのにげんざん申へし、そのよしをのたまへとかたりたまへは、ひめきみは、さなきたに人のわらはるに、おもひのほかなることをのたまふものかな、いかにしてかやうのことをは、おやこの中にいひたすへきとあさましくて、あんしわづらひ給ひしかとも、くはんおんの御ひきあはせのつまなれは、いつくまてもひとしたいとおほしめし、ちうなこんとのへ御ふみまいらせらる、

(二) 新編御伽草子本

さるほどに物狂は、落窪の御方にてあかしくらしたまひしが、まゝ母のつらくあたりたまふ事をあさましくおぼしければ、或時のたまひける、かくていつまで人にしのびつゝすぐすべきぞ、御身の中納言殿に見参申べし、そのよしをのたまへとかたり給へば、姫君は、さなきだに人の笑はるゝに、思ひの外なる事をのたまふかな、いかにしてかやうの事をば、親子の中にいひだすべきとあさましくて、ちたび案じ給ひしかども、観音の御ひきあはせありしことなれば、いづくまでも人次第とおぼしつゝ、中納言殿へ御文参らせらる、はづかしき申ことにて候へども、しかぐのことなん侍りてとかゝれたり

はつかしき申ことにて候へとも、しか〳〵のことなんはんべりてとかゝれたり

第二段

中なこんとの御らんして、さては人のひころ申しもいつはりならさりけり、いかゝすへき、されはとて、ひめにはちを見せんもこゝろうしとおほしめして、やかてかへり事あり、たてゑほしにあをかりきぬをそへてをくらせ給ひけれは、ものくるひこれをみて、われはかやうのものきたる事なし、これはいさゝかのしもべのきるものとこそきけとのたまひければ、ひめきみいよ〳〵こゝろくるしくおほしめし、いかてさやうの事の申さるへしとはおほしめしけれとも、くはんおんのむさうにまかせて、またふみをとゝのへ、かやう〳〵のしさいはんへりといひやりたまへは、ちうなこんとの、されはこそとよ、きやうきなる人ときけは、いよ〳〵さやうのことを申につけてもびんなけれ、たゝいまのほとに、ものうきめを見ん事のうたてさよとそおほしめしける、ひめきみにものおもはせんいたはしさに、またくろきしやうそくにかふりをそへてそおくらせたまひにける、ものくるひこれをみて、これこそとそよろこひける

第三段

かくてまゝはゝは、これを聞、よにうれしけにおもひ、たゝいま人にはちをあたへんと、わがきんたちをさもじんじやうにいてたゝせ、あたりもかゝやくほとにさしきつきかまへて、いまや〳〵とまちたまふ

中納言殿御覧じて、人の日頃申しゝもいつはりならざりけり、いかゞすべき、さればとて姫に恥みせんも心苦しければ、A対面すべきと申されける、姫君よにうれしく思しつゝ、かくとかたらせ給へば、さらば装束を請ひてとのたまふほどに、また文あそばして参らせたまへば、立烏帽子直垂を参らせけり、物狂見たまひて、まづはかやうの物着たるためしなしとて、いてかへし給へば、あら心ぐるしや、中納言殿おぼさん事のうたてさよとおぼしけれども、ありのまゝにいひてまゐらせ給へば、もとよりそゝろはしき人なるゆゑに、かやうの事もあれとて、心のまゝにとて、かふりとゝのへ、いとじんじやうにして参らせ給ふ、これこそとて、御心よげにて

第四段 かくてひめきみは、かのものくるひをいでたゝせんとてづからしじうとゆとのをしつらひ、ゆをひかせ、かみなとあらはせたまへは、さすかよしあるみと見えて、まことによのつねならすみえたまへは、ひめきみもたのもしくそおほしめしける

第五段

第六段 かくてしやうそくをめし、かふりき給へは、たれにもおとるましきほとのありさまなり、ひめきみもこゝろほそくいてたち給ふ、はだにはねりぬきのしろきをめし、うへにはやまぶきいろのこそでに、はゝうへののこしおき給ふ、うすこうはいのうちきせをめして、たけなるかみをさはやかにさけ、じじうをくしていて給ふか、あたりもかゝやくほとにそ見え給ふ

第七段 かくてちうなこんとのは、さしきしつらひ、わかみもじんじやうにいでたち、いかなる人ならんと、心のうちにはひまもなくおほしめして、しのびのなみたせきあへたまはす

第八段 さてかの物くるひは、いまははやたいめんせんとて、中なこんとのかたへうつり給ふ、した〳〵のものまても、むことのをみんとて、おの〳〵おもひ〳〵にいてたちてなみゐたり、されとももものくるひは、あふきにてかほを

さらば湯殿しつらひ、御湯まゐらせよとての給ふほどに、めのとに心あはせて、とかくして御しつらひたてまつる、髪梳りなどして、装束をめさせければ、いつしかはなやかに、あたりもかゞやくはかりに見えたまへば、なんとなくよにたのもしくぞおほしける

夕さりおちくぼの人の中納言殿に対面ときこえければ、まゝ母その方さまの人々これを笑はんとて、よそのていにいでたり、各花をかざりて並み居たり

中納言は、いかなる恥がましき目をやみんずらんと、心くるしく思しかとも、姫か為にて侍れば、たとひいかなるめみるともとおほして、出たち給ふ

さるほどに、落窪の人は花やかに装束して出給ふ、北の方の人〳〵物のひまよりこれを見て、笑はんとてのぞきけれども、わたり殿のあひだは扇をかさして通らせ給ふほどに、更にいかなる人とも見えたまはず

かさしとをりけれは、されはこそ、よしなきものにてはつかしけれはこそ、かほをかくすらめとつぶやきける

第九段

かくて物くるひはさしきにいたりてみれは、中なこんとの、みたいところ、きんたちにいたるまて、花をかさりいてたちたり、ちうなこんとのひたりのかたに、ひとまなる所有、たかためにまうけたるさしきならんと、をくしたるけしきもなくゐなをりける、ひめきみもまゝはゝのひたりのかたになをり給ふ、かの物くるひはさしきになをりても、かさしたるあふきをとらす、いかなることゝいひあへり

第十段

その時、中なこん殿おほせけるは、いかにまれ人、このほとひめかかたにはんへるよしはうけ給れとも、つゐにげざんに入はんへらす、これまての御出、かへす〳〵もめてたくこそはんへれ、けふよりは心やすくすませ給ふへし、それ〳〵とのたまへは、うけたまはると申て、御まへにありしにうはう、もみちのかはらけに、ながえのてうしをそへてもちきたり、中なこんとのゝまへにそおきにけり、中なこんとのやかてとりあけ給ひ、あるしくはんはくと申せはとて、さしうけてきこしめし、まれ人へとおほせけれは、いまははやのかれぬところなりと、あふきをはとり給ふ、みれはてんがの御子二ゐのちうじやうとのなり

さ敷にいらせたまひぬ、中納言は消え入る心地せられけるが、今はかなはぬ事ぞとおぼしなほし、これへわたらせたまへとありしかば、ものもいはず、中納言殿より上のさしきにむずと居直りて、扇をかざしておはしけり、人〳〵これをみて、さればこそ痴者よと見るに違はず、いかなるかたちにてかあふぎをはかざしぬらん、をかしさよとつぶやきける

盃参るにもことはもなし、まして扇をもとりたまはす、中納言は腹をすゑかねたまひつゝ、たとひいかなる人にてましますとも、姫君にかくうちとけてましますうへは、親子の間にさのみ御心へたてたまふへきにあらず、今は扇をとらせ給へかしとのたまへば、ほけほけとうち笑みて、扇をとらせ給ふをみれば、あたりもかゞやくほどの御ありさまなり

第一段はごくわずかな相違だけで、明らかに同系の本文である。第二段になると、はじめの二行は同文であるが、それからはかなり違ってくる。それでも、まだ叙述の内容はほぼ同じと言ってよいが、第三段以後になると、叙述の順序や内容も異なってくるのである。万治板の第三段は、新編御伽草子本の第五段に当り、万治板の第六段は、新編御伽草子本の第八段のはじめの「さるほどに、落窪の人は花やかに装束して出給ふ」に要約せられている如くである。ところが、注意されるのは、新編御伽草子本の順序は、次に述べるB類本のそれと類似していることである。B類本のこの所の本文は、A類本よりもずっと詳しく、詞章も全く異なっているのであるが、継母方の人々が落窪君とその男を笑おうと待ち構える段、落窪君の出立を叙べる段は、第五段、第八段のはじめに当る個所に位置していて、新編御伽草子本と同じである。また、第二段において、新編御伽草子本には、万治板にない傍線Aの句が存する。万治板では、落窪君が、中納言の見参に入りたしとの物狂の希望を取りついだのに対して、すぐに中納言から装束を送られることになっているが、これは新編御伽草子本のように、対面の承諾があった後に装束を請う記事のあった方が、叙述の運びとして整っている。これもB類本には、新編御伽草子本と同じような記事が存するのである。なお、右の対面の場面から後、巻末に至るまでの叙述の運びも、概していえば、新編御伽草子本はA類第一種本よりもB類本の方に近いということができる。そして、結びの勧化の言葉の部分を見ると、

（A一）万　治　板

まことにむかしよりいまゝて、じひをふかくし、人になさけあるものは、つゐにぶつじんのあはれみをかうふる事うたがひなし、このさうしをみ

（A二）新編御伽草子本

是を見かれをきくにも、仏の御方便に身をまかせ、丹誠無二に祈り奉れば、利生忽あらはれ、諸願必成就せずといふことなし、ありがたかりし

（B）横　山　本

これを見かれをきくにつけても、仏のはうへんに身をまかせ、たんせいむにゝいのり奉れは、利しやうたちまちにあらはれて、ひんなるものは

給はん人〳〵は、たとひいかなる人　御誓、しんじてもあまりあり、仰ぎ　ふつきにさかへ、つまのほしき身は
のあしきことを申とも、じひしんを　てこれを信ずべし　えんをむすひ、くらゐなきものはく
さきとして、なさけをせんにし給ふ　わんゐをすゝむ事、これ仏神の御め
へし、まことにしるへき物かたりな　くみ、あふくへし〳〵とそ
り

とあって、やはり新編御伽草子本は、B類本と著しく類似した句を含んでいるのである。

以上のように、新編御伽草子本が、前半はA類第一種本とほとんど同じ本文を有しながら、後半に入って急に本文が変り、叙述の運びがB類本に近くなってくるのは、どのように見るべきであろうか。これには一応次のような場合を想定することができよう。

（イ）新編御伽草子本は、A類第一種本からB類本へ、あるいはB類本からA類第一種本への変化の過程における中間に位置する。

（ロ）新編御伽草子本は、A類第一種とB類との源流に位置する古い形態を存する。

（ハ）新編御伽草子本は、はじめA類第一種本に拠っていたが、途中からB類本を参照して書き変えた。

右の中の、(イ)(ロ)の如きは、新編御伽草子本の本文の変り方が、余りに突然で且つ急角度であること、この系統の伝本を他に見出し得ないことからみて、可能性に乏しいのではないかと考えられ、(ハ)の場合を想定するのが妥当であるように思われる。

B類諸本

(イ)の横山本と松平文庫本とは、本文全く同じで、漢字仮名の別も大部分一致している。松平文庫本は一冊本であり

ながら、横山本の券分けの個所を改丁しているところから見て、松平文庫本は、横山本またはその系統の本から転写したものであろう。

(ロ)の麻生本も、(イ)の横山本と詞章にさしたる違いはなく、巻分けの個所は同じ、挿絵の位置も大部分一致していて、同系の本といってよい。両者は誤脱を互にあい補う所があって、どちらが善本とは決め得ない。参考までに、麻生本によって、「室町時代物語集第三」に掲出されている横山本の誤りを正し得る個所を示しておく。

頁行	横山本	麻生本
五九八—上六	みこのてうくをわられ	みやこのてうくわられ
五九八—下一一	こかねのたを給はり、ふところにおさめける、おもへは	こかねの玉を給はり、ふところにおさめけるとおもへは
六〇五—上一三	かさねこの事の給はねとも	かさねてこのことの給はねとも
六〇六—下一	かふり、しやうそく、さしぬきまてこしてたひ給へ	かふり、しやうそく、さしぬきまてこしらへてたひ給へ
六〇七—上一〇	しやをそへてそまいらせける	しやくをそへてそまいらせける
六一二—上一一	くわんはく殿もきたのも	くわんはく殿もきたの御かたも

外に、やや大きな違いを挙げれば、

五九七—上九	なんはの京より、長岡にみやこをうつし	ならの京より、長岡にみやこをうつし
六〇一—上四	ひめきみをはあるかなきかにかどとちて、なみたのたいに、めのとゝたゝふたりすませたまふあけくれいかはかりかなしかりけん、ちうなこんのこゝろのうちそうらめしけれ、あまつさへ	姫君をはあるかなきかにすませ給ふそあはれなり、あまつさえ、いまの御はらに、きん達あまた出給けり

六〇七―上七　いまの御はらには、きんたちあまたいてきたまひけり　ましてくろしやうそくといふこそうたてしけれと、あんしわつらひ給ひけり、よし〳〵それとてもちからなし、人しれぬむこしうとのけんさんなれは、くるしからしとおほしめし

六〇七―下三　ましてくろしやうそくといふこそうたてけれ、よし〳〵人しれぬむこしうとのけんさんなれはくるしからしとおほしめし　つゆにぬれたることくなり、なにゝつけても、このひめきみの御こゝろのうち、をしはかられてあはれ也

六〇八―下一四　露たにぬれたることくなり　中なこんとのけにもとおほしめし、やかてつかひをたてられけれは、おやのおほせにしたかひきたのかたをあいさつにて、こんにちのむことのをもてなし給ふ、されともいなともの給すゐ給へは、□しめてけんさん申とも

六〇九―下一八　ちうなこんおほしめし、やかてつかひをたて給へは、ひめきみはつかしくおほしめしけれともこれまての事なれは、おやのおほせにしたかひきたのかたをあいさつにて、まれ人にはしめてけんさん申せとも

六一〇―下一四　さしきのちりはらい、みすのきちやうのとてさしきのちりひろひ、みすきちやうをはらひ

の如くである。その他、全般的な傾向として、麻生本の方が敬語を多く使っている特徴が見られる。

(六)の龍門文庫本は、いまだ精査していないが、やはり横山本、麻生本と同系の本文である。ただ語句の末の異同はやや多い。この本は、本文中の所々に「一枚絵」と記した附箋が貼られているところを見ると、おそらく奈良絵本に拠ったものと思われる。

以上、AB両類について、同類の中における伝本の関係を検討してみた。次はA類とB類との関係であるが、この両類の間には顕著な相違が見られる。詞章が全く異なる上に、筋の運びに違いが存する。叙述は概してB類本の方がこまやかで、全篇の分量はA類本の約一・五倍に達している。両類の筋を要約して対照すると左の如くである。

	A類	B類
		六角堂観音の縁起
(1)	(なし)	(同上)
(2)	沢野の中納言夫妻は六角堂の観音に祈請して姫君を儲ける。	
(3)	姫七才の時母を失い、継母を迎える。	(同上)
(4)	継母は姫を憎み、落窪の間に住まわせて、落窪の姫君と呼ぶ。	(同上)
(5)	関白の御子二位中将が落窪君に心を寄せ文を送る。	(なし)
(6)	継母はこれを妬み、姫の六角堂参籠の留守に、中将より文の使いの来たのを幸い、姫は人に盗まれた由を告げる。中将はこれを聞いて狂乱の心がつき、行方知らずとなる。	姫は思いに耐えかねて六角堂に参籠する。
(7)	姫は六角堂での満願の暁の夢に、下向の道にて	(同上)

はじめて会った男を夫にせよとの示現を蒙る。
帰途、二十ばかりの物狂いに会い、夢想にまかせて館に伴ない帰り、同棲する。

（8）やがて物狂いは中納言に見参を申出で、中納言より送られた装束をつけて聟見参の席に出る。
中納言はその顔を見て二位中将であるのに驚く。（同上）

（9）中将と姫は関白の許に迎えられ、末長く栄える。（同上）

両類に共通しているのは、（2）（3）（4）の姫の生い立ち、境遇と、（7）（8）（9）の、六角堂観音の利生によって、姫が高貴の夫を得て栄華に栄えるという二つの部分であるが、後者がこの物語の骨子となっている。最初に会った者と夫婦になれといった示現によって福を得る話は、いろいろの形で伝えられる霊験譚の一つの型で、そうした霊験説話によって、この物語の主要部分が作られたことは明らかであろう。

次に相違する部分を見ると、B類のみに存する（1）は、聖徳太子が難波の浦にて金銅の如意輪観音を得、示現を蒙って、山城国愛宕郡に六角堂を建立して安置した。後に平安京造営に当って条々を割った時に、六角堂が小路の真中に当り、その処置に窮した所、一夜の内に御堂が動いて、無事に治ったという記事で、これとほぼ同じ内容の話は「六角堂縁起」（大日本仏教全書寺誌叢書一所収）に見え、この縁起によったものであろう。この部分は物語には直接関係のない話であるから、A類本の省略とも言えるし、逆にB類本の増補とも考え得るもので、両類の先後関係をきめる決め手とはなり得ない。問題は（5）（6）の二位中将と落窪君との恋物語の部分の有無である。なお、この

ことと関聯して注意しなければならないものに、両類における和歌の違いがある。A類には四首、B類には三首の和歌が見えるが、両者は内容も、挿入されている場所も全く異なる。A類に存するのは、

すゑかもの、またいてたゝぬを、ふりすてゝ、いかになりゆく、わか身なるらん（落窪君の生母の世を去る時の歌）

日にそへて、うさのみまさる、世の中に、こゝろつくしの、身をいかにせん（落窪君の世をはかなんでの歌）

きみありと、きくに心を、つくはねの、みねとこひしき、なけきをそする（二位中将、落窪君へ求愛の歌）

ほに出て、いふかひあらは、花すゝき、そよともかせに、うちなひかまし（落窪君の返歌）

の四首で、第一首は（3）、第二首は（4）、第三・四首は（5）の個所にある。それに対してB類本の三首は、巻末の（9）の部分にある祝いの歌で、次の如きものである。

ちとせにも、かはらぬ松の、わかみとり、いくむれつるの、おひそたつらん　関白（三位中将）

なひきあひ、いく世のとしも、くれ竹の、ふかくちきりて、とりのねぬらん　関白の御台所（落窪君）

よろつよの、かめのすむてふ、うらしまか、なゝ世ののちの、子にそあふなる　太閤（三位中将の父）

右の七首の中、A類本の、「すゑかもの」の歌を除く三首は、平安朝の「落窪物語」にそっくり同じ形で載っている歌である。そして、その三首の中二首は、A類本のみが有する（5）の恋物語の部分に存する。もしこの「落窪」が平安朝の「落窪物語」を粉本として成立したものであるとすれば、同物語の歌を有するA類本を以てその原型と考えるのが常識的であろう。ただ、A類本における（5）（6）の恋物語の部分と、（7）（8）（9）の六角堂観音の霊験譚の部分との間はいかにも不調和である。中将が継母の虚言を聞いて狂乱となり、乞食に身を落すという書き方

は、不自然な感を与えるのを否めない。「伏屋」や「秋月」も、前半は恋物語、後半は霊験譚という組織をもっているが、この場合は、「住吉」から「伏屋」「秋月」への変化の跡を見ればわかるように、本来一貫した恋物語の中で、次第に神仏の霊験を説こうとする意図が強く現われてきたもので、前半と後半との間の間隙は眼につかない。「落窪」A類本の場合は、後半が独立した霊験説話で、それに恋物語をつけ加えたという体である。従って、もしA類本が原型であるとすれば、この作品は、まず主人公に「落窪物語」のそれをとり、全体の構成は「住吉」系統の継子物語になぞらえながら、後半の霊験譚の部分を巷間の説話に置きかえたものと言うことができよう。そしてB類本は、そのA類本の恋物語が不調和であるために、それを削除したということになる。

しかし、これに対して逆にB類本を以て原型とする考え方も成り立つ可能性がある。すなわちこの作品は、不遇な女が観音の霊夢によって夫を得たという説話を物語化するに当って、主人公の境遇に「落窪物語」のそれを借りてきたのに過ぎなかったのが、それを更に「落窪物語」に近づけようとして恋物語を増補し、且つ「落窪物語」の歌をも挿入したものとする考え方である。既に「伏屋」の伝本解題で述べたように、「伏屋」の場合も、風葉集所載の歌を存するB類本の方が、それの無いA類本よりも新しい形を示していると考えられるし、前稿でとりあげた「若草物語」にも、それと同じ現象が諸本の間に認められることに照して、原拠となった古本の歌が後から増補されることもあり得るとしなければならない。そしてB類本を原型とした場合は、この作品は「住吉」系統の継子物語の流行に促されてはいるとしても、その成立から言って、擬古物語系統の作品とは系列を異にし、むしろ「鉢かづき」「姥皮」などの民間説話型継子物と類を同じくすると言うべきであろう。

このように、「落窪」については、その原型がAB両類のいずれであるか、明確な判定を下すに至らないが、たと

えA類本がもとの形であったとしても、霊験説話が部分的な趣向に止まらず、物語の骨子をなしている点において、上述の諸篇から著しく変貌していることは否定できない。そこにはやはり、室町時代物語の中で大きな部分を占めている、説話を骨子として構成された諸作品の領域に入りこんでいる姿を認めることができるのである。

結び

擬古物語系統の室町時代物語として、本稿でとりあげた「伏屋」「岩屋」「一本菊」等は、同じく前稿で扱った「しぐれ」「若草」「桜の中将」等の諸篇と、構想の上でもかなり近似していることをはじめに述べた。それは、薄幸な境遇にある姫君が、権門の貴公子の愛を受けるに至るものの、女性の側の境遇から生じた障碍によって、姫は家を逐われ、流離の生活を余儀なくされるという筋書の類似で、その女性の流離の原因を、継子苛めとし、政略結婚の犠牲とする所に相違があることを除いて、骨子となる恋愛譚の経過においては、同類の物語といって差支えないであろう。この二種類の作品の外にも、「狭衣」の如く、「狭衣物語」の飛鳥井姫をとって主人公に仕立てた室町物語も存するが、その飛鳥井姫もやはり同じような境遇、運命を辿る女性である。これによって、鎌倉期の物語の中で、どのような作品が室町期において再生されたか、その傾向を明瞭に知ることができる。

しかし一方では、「しぐれ」系統と「伏屋」系統との諸篇は、主人公の辿る運命の結末において、顕著な対照を示している。「しぐれ」一類の作品では、男女は結局は添い遂げることを得ずに、出家遁世あるいは死亡に終っているのに対して、「伏屋」系統のものは、二人はめでたく結ばれて、末永く子孫繁昌という結末を有している。（後者の中、「朝顔の露」のみは反対であるが、この作品には、作者がかなりはっきりした創作意識をもって、宗教的思想を

表現しようとした跡が見られ、この類の中では特殊な作品として扱うことができる。）そして、両者の相違が、それぞれの源流となった鎌倉期の物語において既に存在したことは、各作品における改作事情を考察した所によって、ほぼ明らかであろう。従って、この二つの形態の間に、特に時代による変化を認めることはできないが、「伏屋」系統のものは、結末を幸福に導くために、その多くは神仏の霊験の力を借りている所に特徴が見られる。この点については、「しぐれ」系統の中でも、「若草」「桜の中将」の如くに、同じく神仏の力によって、主人公の運命を反転せしめる改作を行なった異本が生じたり、「千手女」のように徹頭徹尾清水観音の利生を説く作品が生み出されていることが注意される。これらは「伏屋」系統の継子物の形態からの影響かと思われるが、そこには「伏屋」系統のような筋の方が読者に迎えられ易い型であったことが考えられる。こうして、「伏屋」系統の継子物には、恋物語としての興味の外に、唱導意識が強く働いていることが認められ、そこに本地物を中心とする宗教的な物語との交渉が深くなっていることを認め得る。神仏の利生ばかりでなく、「伏屋」が巻末に、中将は観音と、北の方は地蔵菩薩と現じたことを記したり、「伏屋」「秋月」に本地物に特徴的な趣向が採られていることなども、それを物語っているであろう。「しぐれ」系統に較べると、「伏屋」一類の継子物作品は、形の上で擬古物語を承けながらも、その意味ではより室町的な特徴を濃厚にした姿を備えていると言うことができる。

（補　遺）

本稿の執筆後に、「室町時代小説論」に紹介されている野村八良氏旧蔵の奈良絵本「一本菊」（甲本）を書肆に見

出し、本斯道文庫に収蔵したので、ここに附記しておく。

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵〔江戸前期〕写奈良絵本　三冊

改装後補紺色表紙（一六・七×二三・六糎）。表紙中央に紅色の題簽を貼るが書名は記さない。見返し金紙、料紙間似合紙。内題なし。本文字面高さ約一三糎。（上）二一丁（中）二二丁半（下）一九丁半、毎半葉一三行、各行一四字内外。挿絵、（上）六頁（中下）各五頁。

本書の本文は、本稿で分類した「一本菊」諸本の類別におけるA類に属することは明らかであるが、既述のA類六種の伝本のいずれとも語句の出入異同が多く、これまた別の一種として分類すべき本である。この本のみの最も顕著な特徴としては次の二点が見出せる。このことは、本書の本文が決して古いものではないことを示していると考えられる。

（イ）兵部卿宮が兵衛佐の妹君の許に忍び入り、暁方立ち帰る条に、宮の歌が一首記されている。

（ロ）兵衛佐が筑紫へ配流されるに当って、妹君と兵部卿宮に別れを告げる所から、兵衛佐の妹君を継母が四条の家に押し籠める条を経て、姫を失った兵部卿宮の歎きを述べる条までの記述が著しく簡略になっており、この間には和歌が一首も記されていない。

（イ）の部分に和歌のあるのは、A類諸本の中では第三種の刊本のみであるが、本書の和歌は刊本のそれとは全く異なっている上に、和歌以外の文章も、特に刊本と類似する所は見られないので、本書を刊本系とすることはできない。なお、次にこの部分の本書の本文を掲げてみる。

（第一段）
ひめ君は、A おほしよらぬ御ことなれは、いかゝせんとなきしつみ給へり、宮は思ひそめし日よりも、心まよひしてなんと、か

きくとき仰らるれと、ひめ君は御いらへしたまふ事もなし、[B]いとゝ思ひまさりしておほしめしけれは、いかにおはすとも、いまはかたときも、たちはなるへきかとて、[C]とりかさねたるやうにおほしめしけれとも

（第二段）

しのゝめもやう〳〵あけゆけは、うたに

うき鳥の、ねもしきりなり、明けれは、[E]また夕くれを、まつそひさしき

なんと、御くちすさみまし〳〵、[F]たもとにあまるきぬ〳〵の、なみたの色もふかきけしきにて、おきわかれさせ給ふ、御なをしひきつくろひ、[G]あかつきおきのうき名こり、[H]くれなはとへよと、ちきりをかせ給へとも、御いらへ申給ふ事もなし、あかぬわかれの御物うき、御身にそひてかへらせ給ふ

（第三段）

[I]いつしかくるゝをおそしと、おほしける、[J]かみな月のことなれとも、いとくらしかたく、待かねさせ給ひつゝ、[K]夕くれになれは、またときわを御ともにて、いらせ給ひける、いまはひとへに、へたてあるへしともおほしめさゝりけれは

これを、八三頁に掲出してあるA類六種の伝本の本文と対照してみると、第一種の慶応本に最も近いということができる。傍線Fの句は第一・五種本にのみ見える句であるが、特に第一種本に近似し、第三・四・六種本にあるGの句のないことも、第一・五種本と一致する。殊にEの部分が第一種本に見られることが注意せられる。これを見ると、第一種本の「又ゆふくれとひさしきなとくちすさみ候て」は何かからの引歌であったのを、本書は、それに「うき鳥のねもしきりなり明けれは」の上句を補って、一首の歌とした如くに考えられるのである。

但し、本書と第一種本との類似は、かならずしも全篇に亘って現れているのではない。従って第一種本を祖本としたとは判定し得ないが、第二種以下の諸本とは直接の関係を見出せないので、第一種本のような古い形態を有する本に基づいて、別個に作製された本文であろうと想像する。